

特 222

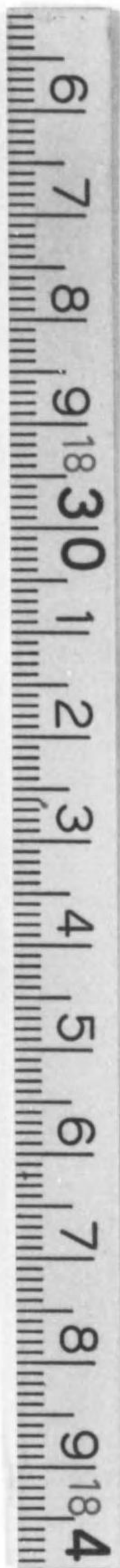
100

講師 河野法雲述

佛說阿彌陀經講義

抄

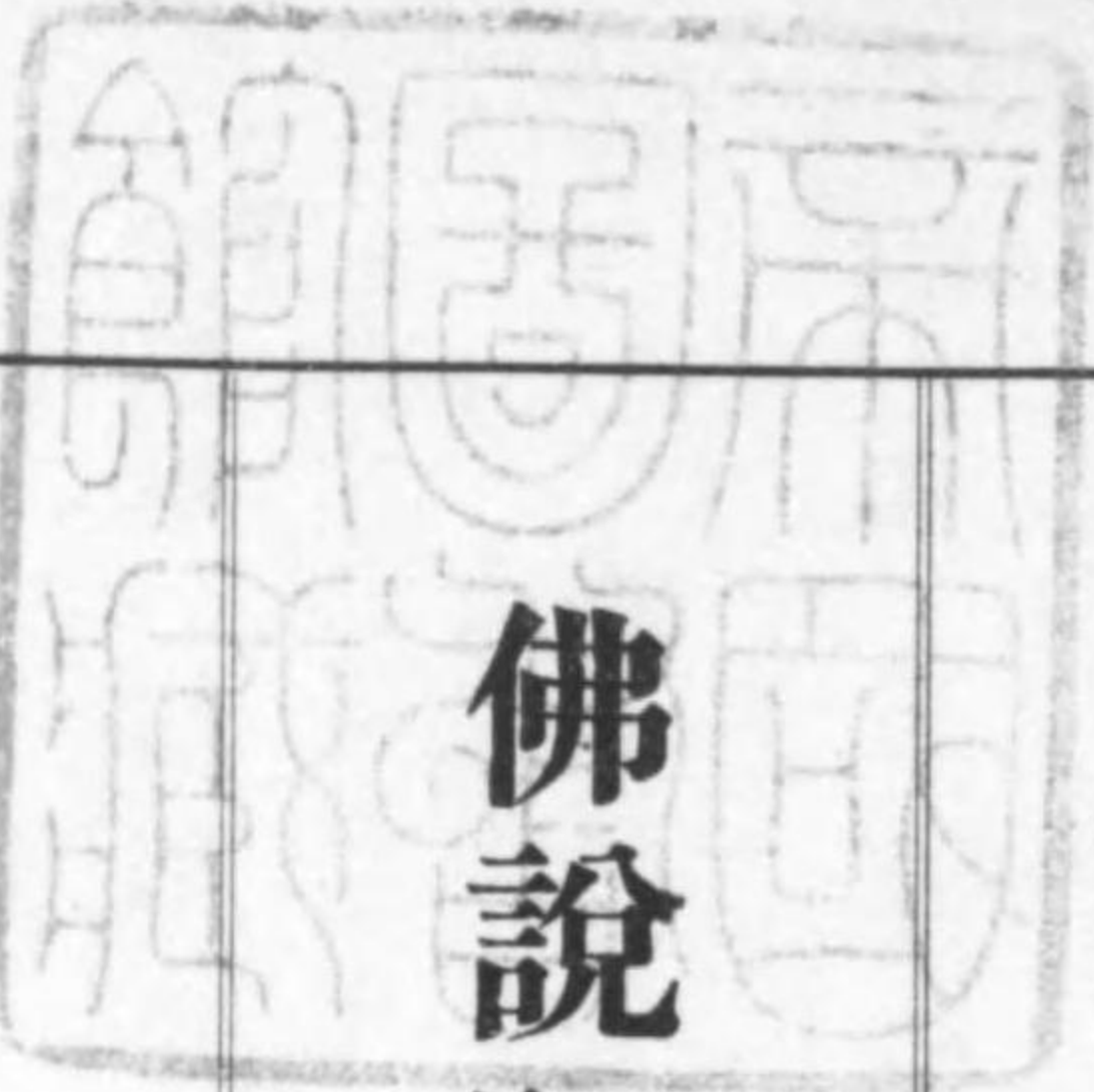
昭和七年安居



始



特 222
100



講師 河野法雲述

佛說阿彌陀經講義

昭和七年安居講本抄



佛說阿彌陀經講義 目次

序 講

本 講

第一章 三經の説時……………一

一、正依三經の事

二、大經觀經説時前後の事

三、三經差別門と一致門の事

四、三經の結經にして且一代經の結經なる事

第二章 無問自説經……………二二

第三章 教興の所由……………二六

第四章 一經の分齊……………三〇

第五章 一經の宗趣……………四〇

入門 解釋

第一章 題號解釋……………六〇

第二章 如是我聞等の文字が諸經の始に在る所以……………六七

第三章 指方立相……………七一

第四章 極樂の名義……………八五

第五章 彌陀の名義……………八七

第六章 執持名號一心不亂の隱顯の義……………九四

第七章 念佛來迎の有無……………一〇五

第八章 諸佛證誠の所由……………一一八

第九章 娑婆の名義……………一二五

第十章 此經流通に勸持附屬の文無き所以……………一二七

佛說阿彌陀經講義

講師 河野法雲

序 講

此阿彌陀經は淨土正依三部修多羅の隨一にして、釋尊將に鶴林涅槃に臨んとするに當り、身子舍利弗を對告衆として、出世の本懷たる彌陀念佛の法を無問自說し給ふ寶典なり、其文僅か四紙一百二十行(十七字を一行として一紙二十四行とするが古例なり)に過ぎざれども、所詮の義理を云へば、廣大觀二經の所説を包含して、濁惡の群生に極難信法の法を説て遐代に之を附屬し、淨土の法門を結止せん爲の説法なり、故に此經は三部經の結經と共に亦一代經の結經なり、即善導大師云、世尊説法時將了、慇懃附屬彌陀名等と實に佛一代の説教筵を卷きし肝要、只此一經に歸するのである。是を以て吾祖化卷本自四十九丁左に斯經大乘修多羅中之無問自說經也、爾者如來所ニ以興ニ出於世ニ恒沙諸佛正意唯在レ斯也と云へり、此指南に依れば釋尊出世の本懷審々出世の諸佛此經を説くを以て本懷とし給ふこと明

なり、此事たる豈にたゞ淨土門の祖師のみならんや他宗の人師も亦齊く之を云へり、華嚴元曉云、今此經者斯乃兩尊出世之大意四輩入道之要門云云と、又律宗の元照云、一乘極唱終歸咸指於樂邦、萬行圓修最勝獨推於果號と、此文意は一乘の極唱とは一乘至極の說法と云はる、華嚴法華なり其終歸は咸な樂邦を指示して、即彌陀の淨土を勸むるより外なし、又一乘教の菩薩の一即一切と、萬行圓修するに就ても、彌陀の果號たる名號を稱念推獎するに在りと云ふ意なり。されば釋尊が五濁出現の本懷は、唯此彌陀念佛の法を説くにあるゆへ、横川の略記にも、今者世尊讚彌陀引接之大教苦界衆生令感ニ安樂勝果故此爲ニ經別號攝ニ所有之衆德歸ニ能化之一身但云ニ阿彌陀也と云へり、而して此經はて簡短にして、最も讀誦するに便易なる故、源信和尚の語に、正明ニ西方觀行並九品行果不レ如ニ觀無量壽經ニ説ニ彌陀本願並極樂細相不レ如ニ雙觀無量壽經大經の事（中略）日々讀誦不レ如ニ小阿彌陀經と（往生要集七十）仰せられた、又慈覺大師引聲の念佛も此經に附帶して傳來すと聞けり、依之元祖日別稱名の外に、此經を吳漢唐の三音にて三卷づゝ讀誦し給ひしこと黒谷傳に出づ、吾御本山に於て、每朝本堂の勤行には漢音の阿彌陀經を讀誦し給ふこと、或は加様なる所より來るものに非るかと存じます。

將レ講ニ此經ニ文前五門分別、一二經説時、二此經無問自説、三教興所由、四定ニ經分齊、五一經宗體、六入文解釋なり、偕て此に一言申し置くことは、今回此經を講するに就て、科文を私に別立せず、先輩香月院が能く考へられた上に科設せられ夫れを占部師が三經の科本として經文の上に其科を入れ加へて已に法藏館より開版になつてあるゆへ、今は其に依つて講することに決しましたから、其科本の儘の科文であることを讀者は了知せられんことを已上、

本 講

第一章 三經の説時

一 正依三經の事

第一に三經の説時に就ては聖道諸師の間に異説あり、是に先立つて辨すべきは淨土門に於て大觀小の三部經を正所依とする事は、元祖法然聖人に始る事今改めて云ふ必要なし。即選擇集の初教相章^三の私釋に正明傍明を判じて「正明^一往生淨土之教者、謂三經一論是也、三經者一無量壽經、二觀無量壽經、三阿彌陀經也、一論者天親往生論是也、或指^二此三經^一號^三淨土三部經^一也」とあり。蓋し正明傍明を分つは元祖の始ての唱道にかゝるものにして、淨土教史上に於ける一大特筆すべき事なり。その故は是れより先天台慈恩等の諸師は廣く諸經論を引いて、彌陀の淨土を勸讚すれども所依の經論に就て傍正の別を云はず、たゞ漫然と諸經論の文に依りて西方往生を云ふに止る。即彼天台の十疑論^(註十)に十餘部の經論を引いて十方淨土の中別して西方彌陀の淨土に生ずる事を勸め、又慈恩の西方要決^{十九}に^丁は西方を勸る聖教として、大集賢護經、藥師經、彌陀經、觀經、無量壽經、の五經を引用し、又迦才の

淨土論中^{丁七}には、十二經七論を引て西方往生の證文となす。又本朝横川の源信和尚も往生要集上末^丁に（極樂證據の下）天台の十疑論、迦才の淨土論を引て其上に私加^ニ云として『法華經藥王品、四十華嚴經、普賢願、目蓮所問經、三千佛名經、無字寶篋經、千手陀羅尼經、十一面經、不空絹索、如意輪、隨求、尊勝、無垢淨光、光明阿彌陀、等諸顯密教中、專勸^ニ極樂^ニ不可^ニ稱計^ニ故偏願求』と云ふてある。されど是等は多く聖道門の傍ら西方の往生を説く者にして、未だ純粹に彌陀の淨土を説く經でない。純粹に之を説くものは大藏中に唯大無量壽經と觀無量壽經、阿彌陀經の三部に限る。故に元祖之を正明往生淨土之教と名け、淨土の三部經と稱し以て淨土正所依の經となし給へり。

然れども元祖が此の如く傍正を明らかにし、三經一論を以て淨土の正所依とすることは、近くは善導の釋に依り遠くは曇鸞の論註に起因せり。近く善導の釋に依るとは同師觀經疏定善義^{二十六}に念佛衆生攝取不捨の文を釋するに就て佛光普照なり、何故唯念佛の衆生のみが此益を蒙るとや云ふ問を出して、其答に此有三義、一親緣、二近緣、三増上緣、と名高き三緣釋を以てし、之を證するにたゞ大觀小の三經のみを引て念佛の衆生が攝取の光益を得ることを明せり。又同散善義^四深信に就ても、大經深信、觀經深信、彌陀經深信として三經を出し、同散善義^八五正行の讀誦正行の下に『一心專讀^ニ誦此觀經、彌陀經、無量壽經』と云ふて三經を讀誦するを正行となす。又般舟讚^二に『瓔珞經中說漸

教、萬劫修功證不退、觀經彌陀經等說、即是頓教菩提藏』と判じて、淨土の三部經を頓教菩提藏と云へり。而して彌陀經等とある等は、大經を等してあれば即三經なり。善導は已に此の如く三經のみを以て淨土の正依とする事を暗々の裡に示せり。

又此善導の本は鸞師の論註なり。即彼上卷^初左に『無量壽^ニ是安樂淨土如來別號、釋在迦牟尼佛在^ニ王舍城及舍衛國、於^ニ大衆之中^ニ說^ニ無量壽佛莊嚴功德』云云と。此文に王舍城とは大觀二經の説所なり。及舍衛國とは阿彌陀經の説場所なり。釋迦牟尼佛は此王舍城と舍衛國とに在りて無量壽佛の莊嚴功德を説き給ふと云ふは、即佛が淨土の三部經を説き給ひし事を述べて、其次に『後聖者婆藪槃頭菩薩服^ニ膺如來大悲之教^ニ傍^ニ經作^ニ願生偈』とあれば、天親菩薩が此三經を通申して淨土論を作り給へる事を明したるが彼論註の文なり。して見れば天親の淨土論が元淨土の三經を所依とし之を通申したる論なり。三經を正所依とする事は正しく天親の淨土論が抑も始りにしてそれを相承する鸞師善導なり。而して元祖聖人は始めて日本に於て淨土の正宗を興行し、所依の經論を定るに正明傍明を分ちて正明往生之教謂三經一論是也と判するに至る。凡て立教開宗するには依教分宗依宗教別と云ふて、是非とも先初に所依の經論を定め置て、それより一宗の宗義を説き出すが諸宗の通規なり。故に元祖淨土宗を興隆し給ふに選擇集の教相章の私釋に先所依の經論を定め、正明往生淨土之教は三經一論と判じ給ふ所以なり。

二 大經觀經說時前後の事

偕て正しく三經の説時を云へば、慈恩の彌陀經疏本_{十一}に三經の外に鼓音聲經を加へて淨土の事を説く經を四經として其前後説時を辨じて二義を出し、初義は「準_ニ其道理_ニ先爲_ニ説令_レ知_ニ次_ニ教修_ニ淨業_ニ次_ニ斷_レ疑證_レ實後護_レ難不_レ生_ニ、即無量壽經初、觀經第二、小經第三、鼓音經第四」とし、第二に「然_レ以_レ事推驗_{スルニ}即觀經爲_レ初、無量壽經爲_レ二」云云。此意は初義の道理より云へば先大經を説て彌陀の依正を知らしめ、而して後に觀經を説て淨業を修せしめ往生を願はしむが順序ゆへ、一經を先きに説き觀經は後でなければならぬと云ふ意。さて第二義は然るに事實はさうで無くて觀經の時は阿闍世は太子でありしが、大經演説の時には闍王已に位に登り、父の頻婆娑羅王を殺害し又母を幽閉す。因_レ之韋提希夫人淨土を請す、如來爲めに十方淨土を現じて光臺中に見せしめ、夫人我今樂生極樂世界と西方を願ふに依つて、佛教へて定散を修せしむ。故に大經の異譯大阿彌陀經云、如來西方の事を説く時に阿闍世王の太子と五百長者と蓋を持して獻じ、彌陀の二十四願を説くを聞て其太子當に發願す等とあり。此文に依れば大經所説の時は阿闍世は已に王となり、其太子とは闍王の子和休王の事にしてこれ亦儲君となる。されば事實の上では觀經が先で大經は後なりと、大阿彌陀經一_{十二}の文を引いて觀前大後の説を

成立せり。之に依りて憬興の大經述文贊上_{丁初}に大經の來意に三義を立て、「以_ニ是三義_ニ故次_ニ觀經_ニ後_ニ説_ニ此經_ニ也」と、明に觀前大後の義を成立せり。龍興の觀經疏も是れと同説と云ふ。然るに玄一の大經疏此説を破して大前觀後の義を選取せり。其理由は大經を説く時に方に四十八願有り、然るに觀經の文には「亦爲_ニ説_ニ四十八願_ニ」とあり、明知先に大經を説き給ふことを。然るに大阿彌陀經等に阿闍世を王と稱することは父の頻婆娑羅王が寒林に移り政を太子に附す、太子執政の故に王と稱す。(婆羅王の寒林に移る因縁は慈恩の法華玄贊一_{四十四}右に出づ披くべし)凡て太子の事を王と稱する例は少なからず、其時は太子でありても後より云ふことゆへ王と稱するに差支なし。彼大阿彌陀經の會座に闍世が金蓋を持して佛に供養し、二十四願經を聞くことを後より稱して王と云ふのゆへ、阿闍世王とあればと何の妨げかあらん。故に迦才も大前觀後の説を取つて、彼淨土論上_{丁十四}に「無量壽經先_ハ説_ニ以下廣説_ニ法藏比丘因縁_ニ及明_ニ往生事_ニ故也、觀經後説_ニ以_ニ但論_ニ往生事_ニ故也」と云へり。

さて他師の説は兎も角として今家の正説は云何と云ふに、是れは元祖漢語燈二_{丁初}觀經釋の初に「説時前後」と云ふ一科を設けて、「壽經爲_レ先、觀經爲_レ後、乃是有_レ文有_レ理」として三文一理を以て大前觀後の義を成立してあり。其三文とは一に華座觀文云、「法藏比丘願力所成」と、意の云く壽經に先彼願を説く、今彼れを指して願力所成と云ふ、乃ち知ぬ壽經は是先、觀經は後なることを。二に中輩下生の文

に云、「亦說法藏比丘四十八願」とあり。これも觀經には法藏發願の事は説てないのに觀經に突然と此語あるは、大經の法藏發願の説を受けて説きたるものなれば、大前觀後なる一の證據なり。三に大經上卷に「阿難白佛法藏菩薩爲已成佛而取滅度爲未成佛爲今現在佛告阿難今已成佛現在西方去此十萬億刹其佛世界名曰安樂」云云と。然るに觀經には具に依正二報を説く、觀經が若し先きならば大經に何んぞ此語有らん。故に知ぬ大經是先なる事をと三文を出し、次に一理證と云ふは、「壽經に先彼佛の發心修行及び果上の依正二報を説く、觀經は即彼經所説の依正に就て十三願を説く故に知ぬ、大經は是前、觀經は是後なることを」と云へり。尙元祖は此の三文一理の外に觀經釋の來意の下に、「壽經雖說能化彌陀修因感果、未說所化行者修因感果、故次彌陀修因感果、說行者修因感果也一義、又壽經雖說三品往生而未說九品義、今則開彼三品而爲九品是爲此經來意也」と云ふて、觀經は全く大經に次で説法し給ふ所以を明してあれば、大前觀後の義、昭々として誰か異義を挾まん。吾祖之を相承して三經和讃に大觀小の次第を守つて各々經意を讃述し給へり。末學たる者須らく敬承すべし。

三 三經差別門と一致門の事

偕て茲に問題のあるは、根本に溯つて思惟するに釋尊何の故ありてか正しく西方往生を説く經を三

部と局つて、四部五部と説かざるかの不審なり是れ即ち宗の玄旨にして此れを顯すが吾祖聖人御已證の法門なり。吾祖は眞宗を開闢するに總じては先の三經に依ると雖も、別しては大經に依りて開宗し、而も三經中に於て眞實方便を分ち、方便を捨て、眞實に入るを以て一宗の要義とするゆへ眞宗と名乗り、三經中大經を以て顯眞實教と爲し、觀小二經を方便教とす。故に吾祖廣文類教卷の初に、「大無量壽經眞實淨土之教眞宗」と標冒し、別して大經を以て正所依とせり。此大經に依りて淨土眞宗を開くことを宣言するが教卷なり。

是れに就て眞宗には三經を扱ふに一致門と差別門の二途ありて、先差別門に就て云へば、元來釋尊が淨土の三部經を説き給ふは、彌陀の本願に三の別あるが故なり。又彌陀三願の誓を發し給ふは衆生の機類に三の別あるが爲なり。隨つて衆生往生の果に亦三の差別を生ず。之を三願、三經、三機、三往生と云ふ。之を宗門内の語では三々の法門と云ふ。是れ實に眞宗々義の根本にして、淨土門中他人未談吾祖の御已證の法門とは即ち是れなり。先づ彌陀の三願とは即ち第十八願、第十九願、第二十願是れなり。就中第十八願は元祖も選擇集本九左に、「四十八願之中既以念佛往生願而爲本願中之王也」とあれば、此第十八願は本願中の王にして彌陀眞實の誓願なり。此誓願を釋尊閻浮提に出現して、廣く開説するが大無量壽經なり。所説の本願已に眞實なれば能説の釋尊の説亦眞實にして、之を説くは實に出世の

本懷なり。故に吾祖は正信偈に「如來所以興出世、唯說彌陀本願海」と云ひ、又大經和讃には「如來興世の本意には本願眞實ひらきてぞ等」との給ふ。已に本願眞實なる故に之を開説する大經亦眞實教なり。然るに其眞實の願たる第十八の王本願に直に入り兼る機類あり、之を何としても誘引せん爲に彌陀方便の願を垂れて、第十九第二十の願を發し給へり。其中第十九願には修諸功德の因に依て臨終現前の益を得せ令んと誓ふ、即諸善萬行を修して方便化土に往生する願なり。此第十九願を開説するが即ち觀無量壽經なり。依つて此れを吾祖和讃に、「臨終現前の願により釋迦は諸善をことごとく觀經一部にあらはして定散諸機をすゝめける」と云へり。願已に方便なるが故に之を開説する觀經も亦帶方便の教なり。然るに佛意の所在を尋ぬるに、經に定散諸行を説くは且らく諸機誘引の爲にして其本意は弘願念佛に入らしむるに在れば、觀經の終り流通分に至れば佛の本意を打出して、定散諸善を廢して念佛の一行を阿難に附屬す。而して此流通の經説に依て衆生は定散諸善を捨て、念佛の一行を修すと雖も尙自力の執心を捨て遣らず、未だ眞實弘願に入らざるものあり。彌陀之が爲に第二十願を發し不果遂者と誓つて、早晚眞實の願海に入らしめんと願じ給ふが第二十願なり、釋尊此誓願に應へて之を開説したるが即ち阿彌陀經なり。此れを吾祖和讃に「果遂の願によりてこそ釋迦は善本徳本を彌陀經にあらはして一乘の機をすゝめける」と。彌陀經の根機は諸善を捨て、念佛一行を修するゆへ自力なれども一乘

の機と褒てあり。此の如く三經差別門の時は眞實方便を分ち、大經は顯眞實教、觀小二經は權方便の教、次いで如く第十八十九二十の三願を開説したるものと見るが、吾祖の廣文類六卷の所明である。其中前五卷は眞實の卷にして大經に依て眞實の教行信證を明し、後の一卷は方便教たる觀小二經の説に依て方便の教行信證を明し、之を方便化身土卷と稱す。(三機と三往生とのことは今の正所論に非れば略之)其方便を捨て、眞實の願海に歸入すべしと勸むる宗旨ゆへ、眞宗と稱する所以なり。

前述の如く差別門の時は佛願を基礎として之を開説する三經に眞實方便を分ち、隨つて衆生往生の因果に眞假を判すれども、若し一致門の時は三部經は淨土法門の始中終にして一具の經と見る。然れども其中に又機法眞實の別あり。先づ大經上卷には如來淨土の因果を説き、下卷は衆生往生の因果を説く、其衆生の因果は如來淨土の因果に收るものゆへ、其要に就て云へば法藏菩薩の選擇攝取の本願の法の眞實を説きたるものなり。然るに其體を尅すれば一南無阿彌陀佛の名號より外なし。故に吾祖教卷に大經の宗體を明して「説如來本願爲經宗致、即以佛名號爲經體也」とあるは此謂れなり。而して其本願名號の法の眞實は觀經の機の眞實を待つて始めて其機能を顯すものであるから、觀經は機の眞實を顯して、提婆阿闍世の逆害の相と韋提希夫人の五障垢穢の女人とを出して、以て彌陀本願の正所被の實機は此の如き惡人女人なりと示す。終りに彌陀經は前の大觀二經の機法を合説して、五濁惡時惡邪

無信の衆生には極難信法たる彌陀の名號を與へて之を六方諸佛が證誠護念せることを説けり。されば彌陀經は機法二の眞實を合説して大觀二經を結止するものなり。斯く見る時は三經はたゞ一具の始中終となりて其證顯する所は共に選擇本願念佛往生を明すより外なし。故に吾祖化卷本自四十に「是以三經眞實選擇本願爲レ宗」と云へり。又覺師口傳鈔下左四丁に「三經ノ説時ヲイフニ大無量壽經ハ法ノ眞實ナルトコロヲトキアラハシテ對機ハミナ權機ナリ、觀無量壽經ハ機ノ眞實ナルトコロヲアラハセリ、コレスナハチ實機ナリ、イハユル五障ノ女人韋提ヲモテ對機トシテ、トヲク末世ノ女人惡人ニヒトシムルナリ、小阿彌陀經ハサキノ機法ノ眞實ヲアラハス二經ヲ合説シテ(中略)一日七日ノ執持名號ニムスヒトマメテコ、ヲ證誠スル諸佛ノ實語ヲ顯説セリ」云々と。尙同師改邪鈔末右十丁に「オヨソ祖師聖人御相承ノ一義ハ三經トモニ差別ナシトイヘトモ觀無量壽ハ機ノ眞實ヲアラハシテ」等の文參照すべし。此の如く一致門の時は三經を始中終と見做して、其の中に法と機と機法合説の別あれども、共に所詮とする所は選擇本願念佛往生を顯すに在り。又先の差別門の時は大經は顯眞實教なる故隱顯なしと雖も觀小二經は帶方便の經なる故、顯には第十九二十の方便の願を開説し隱には弘願眞實を彰して大經と異なる事なしとするが、吾祖獨特の妙判他流未談の法門なり。西鎮の諸流は三經を一具の始中終、法機の別ある事を知れども、未だ三願三經の眞假權實の別ある事を知らざるが爲に、彌陀の願意釋迦

開説の本意果して何くに在るか幾んど明了を缺き、遂に第十八願と第十九願とを一混して、元祖の第十八の王本願と稱し選擇本願との給ふを無意味ならしむる嫌ひあり。實に遺憾ならずや、是れ全く吾祖の如く三願三經の眞假權實を判ぜざるに依ると思ふべし。

四 三經の結經にして且一代教の結經なる事

而して淨土の三部經を一具の始中終と見ることは他師も云ふ所にして先聖覺の四十八願釋に「三經者一教之初中尾也」と云ひ、又凝然の淨土源流章二十に「具足三經淨教義成」とあり、西山上人の四十八願要釋上初にも「三部經者一代始中終一宗機願行萬法攝此内」と云ふ。又行觀の玄義分秘鈔二丁に「大經以廢立義選擇本願四十八願立給之位説、觀經以傍正義開定散要門、説念佛往生安心、阿彌陀經以助正之義説助業起行門也、(中略)是則以廢立助正傍正三義三經説、故選此三經爲正依經、名淨土三部也」とあり。此れは次第の如く三經を廢立傍正助正の三義に當て、又本願と安心と起行を説くと見る西山一流の見方にして他と稍々異なれども、彌陀經を以て最後に居くことは同一なり。又堯慧の彌陀經私集鈔上左二丁にも「宗要云、諸師異説大經觀經互論前後、阿彌陀經共許最後、今者且依一家諸文所依次第大經爲先、觀經爲次、小經爲後、云云」とあり。何れに依るも淨土三部經中

彌陀經は最後にして淨土教の結經なり、是れと同時に亦一代經の結經となるなり。

今其義を少しく辯ずれば、先此經が三經の結尾なることは元と善導に其微意あり。又元祖の指南に依るなり。即ち漢語燈三七（彌陀經釋）に述三經來意者として、「觀經雖ニ初廣說ニ諸行ニ遍迴ニ機緣ニ後廢ニ諸行ニ結歸念佛一行上、然尙彼經諸行文廣念佛文狹、是以行學之徒義路易レ迷是非難レ決、故今此經廢ニ捨諸行ニ唯明ニ念佛ニ。是即爲レ於ニ念佛行ニ令レ生ニ決定信一也」とあり。此文に依れば阿彌陀經は觀經の流通附屬の文を廣説したるものと云ふ意なり。故に此經には諸行を少善根と貶して唯執持名號の一法を勸説してあり。是れ初大經に本願の法を説き、次觀經には機の趣入を示すに正宗中要門弘願並べ説て、終の流通分に要門定散を廢して弘願念佛を阿難に附屬すと雖も、諸行定散を説く文は正宗一部に亘て廣し、之を廢して念佛を説く文は太狭く僅か流通の一端に不過。之に依て行學之徒要門か弘願か何れに適歸せんと其方向に迷ひ、諸行念佛是非取捨の心決し難き故、終に佛重ねて舍衛國に於て舍利弗を對告衆として此經を説き給ふものなれば、此經は三部經の結尾にして觀經の後の説なりと云ふ漢語燈の釋なり。若し又彌陀の第十八十九二十の三願を開説したる三經と見る時も次第の如く、此經は最後に居ることゝなるから、彌陀經は淨土の結經と云ふこと理として當然なり。

而して淨土の結經とすると同時に又一代經の終末となる所以は、古來の學者種々に説を爲す所なれど、今且らく予輩の考を云へば之を分ちて二とし、一には義に依りて辨じ、二には時に就て論ず。初に義に依るとは淨土の三部經は差別門に就けば上に述る如く、三經は第十八十九二十の三願を開説して弘願と要門眞門を宣説するものなれば、之を三論の嘉祥、華嚴賢首等の云ふ三法輪の判の如きもので、今此三經中に一代佛教を包含して諸有る淨土の法門盡で罄ざるはし。否淨土の法門のみならず總て佛の一代經は此中に攝せらるゝものなり。それに就て先づ三法輪のことを一言するに、三法輪とは嘉祥法華義疏、又法華遊意上六、華嚴五教章中卷に出で、一に根本法輪、二に枝末法輪、三に攝末歸本法輪なり。第一の根本法輪とは佛最初の華嚴經の説法を指すものにして、華嚴經は菩提樹下に於て最初に佛自所證の法門を文殊普賢等の大菩薩に對して宣説して、毫も所化衆生の機宜に隨逐せず、隨自意の本分を有りの儘に披瀝して説きたるものなり。故に法身の居士たる普賢文殊は之を聞けども、薄福鈍根の二乗の劣機は如聾如啞と稱して、更に何の謂たるかを知らず、是れを入法界品には「五百聲聞在座如聾如啞」と説けり。此れが華嚴の法の甚深高尙なる所で二乘凡夫の劣機にしてはとても聞く事を得ざる所が却つて華嚴の誇りとする所である。即佛の自證の極致たる所以なり。今淨土の大無量壽經は宛も彼華嚴と同じく、彌陀本願の本意眞實を説きて少しも隨宜方便の法を説かず、弘願眞實の一法のみを説く故に、此れを大經に「如來智慧海深廣無涯底、二乘非所測、唯佛獨明了」と云へり。先に大經は

法の眞實を顯すと云ふは此事なり、乃ち元祖も大經釋（漢語燈一三丁）に淨教本末の下に「以_二此經_一而爲_二根本_一」とあり、されば大經は根本法輪にして佛出世の本懷眞實の教となす。次に枝末法輪とは嘉祥賢首の上では華嚴已外の阿含方等般若等の經を指す意なり。その故は華嚴の説法が餘りに高尚に過ぎて二乗等の劣機は聞くに堪へず、聖旨の如くなるゆへ佛方便して更に場所を改めて鹿園等に於て阿含方等般若等の諸教を説きて、今度は所化の機の宜しきに隨つて有を執するものには空と説き、空を執するものには有と説き、亦中道等と説て其執を除き、又其好む所に隨つて種々に三乘五乘諦緣度等の法を説き、以て各機根に投じて潤益す。されど未だ一佛乘と説かず、これが枝末法輪の相にして皆是根機を調誘し、遂に一乘に會入する爲めの方便説なり、依つて枝末法輪の名を得。今淨土の觀無量壽經は宛も彼の枝末法輪の如く、先に彌陀本願の本意眞實を説きて、弘願他力に歸せしめんとしたれども、悲哉衆生定散自力執心の輩は直ちに弘願眞實に入る事能はず、故に佛止むを得ず第十九願の修諸功德の福徳藏を開て、聖道八萬四千の諸善萬行を束ねて要門定散の法として是れを觀經一部に宣説して、各々根機相應に其善根を修し、以て彌陀の淨土に廻向して往生せよと勸む。之が即觀經の説法なれば、觀經は全く聖道の諸機を誘引して淨土に入らしむる爲めの枝末法輪の相にして、即弘願眞實に直に入り兼る未熟の機を調誘歸入せしめん爲め的手段方便の説法なり。故に吾祖和讃に「臨終現前ノ願ニヨリ釋迦ハ

諸善ヲコトノク觀經一部ニアラハシテ定散諸機ヲス、メケリ」との給ふ。第三に攝末歸本法輪とは、嘉祥等の上では法華經を指すもので、法華は二乘開會の經にして法華已前には二乘三乗の差別を説きて三乘各別の果を得るとして未だ決定性の二乗までが成佛すると云ふ事は説かなかつた。然るに法華に來ると正宗の初め方便品に「十方佛土中唯有一乘法、無二亦無三」と説きて、有りとあらゆる一切衆生如何なる二乗も皆一佛乘に歸して成佛する事を得ると説きて、法華已前の二乘三乗の差別の説を打破して、遂に佛智一乘に開示悟入せしむるが法華經の二乘開會と稱して最も彼の誇とする所なり。故に三法輪の判では第三の攝末歸本法輪と云ふ、即ち二乘三乗の末を攝して一佛乘の根本に歸入せしむるの説法なり。今丁度淨土三部經の終り阿彌陀經は能く之に類似し、已に觀經に於て定散二善の諸善萬行を廻して淨土に往生せよと要門方便を説いて定散の諸機を誘引し來りしが、其流通分に至れば雖の獲を脱して即ち是持無量壽佛名と名號を以て阿難に附屬し、要弘廢立の意を示せども其文簡約にして行學の徒尙未だ岐路に迷ふの風情なる故、更に最後に於て此阿彌陀經を説いて少善根福徳の因縁を以ては彼國に生ずべからずと諸善萬行を嫌貶し、多善根多福徳の名號一法を説いて一日七日持名の功に依つて往生を得ることを説く、是れ全く方便の枝末法輪で卷き攝めて眞實の弘願根本に歸入せしむれば此經は攝末歸本法輪と云ふべきである。前述の如く三法輪の判を立て、嘉祥等は次第の如く、

一代諸教を此中に統攝す。今淨土の三部經も殆んど此三法輪と同様に大經はどふ見ても根本法輪なり。觀經は枝末法輪、阿彌陀經は攝末歸本法輪に當る。そうして而も此三の中に自ら一代佛教が統攝せらるゝものなれば、淨土門の眼孔を以て見れば、淨土の三部經は即佛の一代經なり、諸有の諸經は皆其内に攝せざるはなく、攝し盡せり。故に元祖のお語に「諸宗各々一代經アリ、法相宗ニ法相宗ノ一代教アリ、天台宗ニハ天台ノ一代教アリ、吾淨土宗ニハ淨土ノ一代經アリ」と仰せられた譯なり。(黒谷傳一^{十六}取意)之を要するに法相宗三論華嚴天台等何れも其宗々々の立場に依つて、一代佛教を見ることは諸宗の通規ゆへ、今淨土門の立場より云ふ時は大觀小の三經中に一代佛法を攝盡し、聖道八萬四千の法門を悉く淨土門の方便の善として弘願一乘に歸入令る爲めとなす。是れ即ち吾祖の指南にして和讃に「諸善萬行コトクク至心發願セルユヘニ、往生淨土ノ方便ノ善トナラヌハナカリケリ」と、第十九願開説の觀經を以て、聖道一代の法門を淨土門に取り込み來れり。されば三經を以て三法輪の判に當て、一代教を統收し、眞實より方便を垂れ其方便をして還た終に眞實に歸入せしむ、十八十九二十の三願開説の經は次第に轉入すると云ふ相、洵に三法輪の判と符節を合する如し。故に今三法輪の判と三經のこととを併せ論じて、彌陀經は三經の結經と同時に一代經の結經となる義を叙べしなり。

二に時に就て云へば、元祖の指南に依りて大前觀後の義を前に已に云ひ置けり。依レ之今はたゞ此經

は觀經よりもなを後時の説なる事を云へば事足れり。それは觀經と法華經とは同時同味の教と云ふ事は蓮師の御文にも出で、此れを證するに先輩は善見毘婆沙律^{二十八}の文、又涅槃經^{三十三}の文を引いて、淨土の觀無量壽經は法華の序品の終り正宗の前の説と云ふなり。又一説では正宗の末會に當ると云ふ。此二説あれども成道四十二年佛壽七十二歳に法華を説き始め給ふに、王宮に逆害の事ありて淨土の觀經は其時に於て説かれしものと云ふ事は聖淨の諸家の説粗々一定せり。然るに阿彌陀經は其觀經の流通分を廣説したる經なれば觀經の後なること論なし。尤も場所も此經は觀經と異り、彼經には王宮會者闍會の兩會あれども彌陀經は舍衛國の説なり。場所已に異りて而も觀經の後なること經文的に確の文なしと雖も、理としてそうなければならぬ。故に或人の説に此經を結經と爲すことは未^レ有^レ依^レ時之文、若し強いて一義をあぐれば是經列衆の中に迦留陀夷を載す、彼は出家の後と雖も屢々衆過を犯す、即是六群比丘之一なり、故に擯斥を受け諸經の會座に多く之を列せず、然るに法華に至りて即ち授記を得る、彼れ今亦舍利弗等と共に今經の會座に詣す、されば此經は法華及觀經の後なる事、此事實に徴して明なりと云ふ。然れども三經の説時必ずしも時に拘はらず、義を以て次第を論するに何の不足あらんと云へり。又善導法華讚^下十九^左に「世尊説法時將了慇懃附屬彌陀名」とあり。此文を覺師口傳鈔^下五^丁に引て「世尊説法時將了と釋します、一代の説教むしろをまきし肝要いまの彌陀の名

願をもて付屬流通の本意とする條、文にありてみつべし』等とありて、覺師は此經を三經の結尾とするのみならず、一代經の結經としてあり。此れは文の當相は善導が、此經流通の是爲甚難佛說此經已の下を讚する文ゆへ、強いて一代經の事ではない、たゞ此經說法の將に了らんとするに當つて名號の法を慇懃に流通附屬すと云ふ意なり。依之元祖選擇集末附屬章^{二十}に此經流通分の佛說此經等の文を引き、次に善導の此文を引いてあり。されば元祖の指南より見るも、彌陀經說法の將に了らんとする時と云ふことなり。去り乍ら再往法事讚の前後の文を能く見るとやはり善導も一代經の終りと云ふ意なきに非ず、覺師は其善導の微意を釋顯して一代教の終りとするものなり。それは法事讚下^初此經の證信序の讚文に此經の教興を述するに總じて釋迦如來が此闍浮提に出現して、八萬四千の法門を説き給ふことを長々明してあり。其意趣は釋尊一代の說法を此經の序文として一代經を説き了つた上に、此阿彌陀經を説き給ふと云ふ事を明す。故に初に「諸佛大悲心方便化門等無殊……八相示現出闍浮(中略)變現隨宜度有流……故有八萬四千門」等と先づ佛の攝化一代のことを述べ、其次の讚文に「釋迦如來成正覺四十九載度衆生等」とある。これが此經の初の一時佛在とある一時の釋にし、此說法の時は即ち佛成道已來四十九年間衆生を度し終り、第五十年目の將に鶴林涅槃に臨んとする時に於て、此經を説き給ふたものと云ふが善導の意なり。先きに法華は成道四十二年目に説き始め八年

かゝる、淨土の觀經も亦此れと同様なり。此彌陀經はそれより遙か後で、四十九載佛一代の說法了りて此經となる故に、此經が自ら一代の結經となること明なり。そこで法事讚下^{十九}に「如來出^ニ現於五濁隨^レ宜方便化^ニ群萌(中略)種々法門皆解脫無^ニ過^ニ念佛往^ニ西方^ニ」等と佛一代の化導を悉く擧げ來つて、其次に無^レ過念佛往^ニ西方^ニと云へり。是れ即ち此經所說の念佛の事なり、そうして其次の讚文に世尊說法時將了等とあれば、善導の意法事讚の前後始終を能く窺へば、愈々釋迦一代經の將に了んとする時と云ふ意なること明なり。又慇懃附屬彌陀名とは經の流通分に佛說此經已とあるのみで、慇懃に彌陀の名號を附屬する文なし。されば此慇懃附屬とは此彌陀經一部全體の所說を云ふもので、舍利弗を佛が三十六返まで呼びかけ、於^ニ汝意云何と度々念を入れて舍利弗に告げ給ふ所が、慇懃に名號を附屬し給ふ所なり。されば慇懃附屬は此經一部全體の所明を指したものである。覺師是れを見込んで口傳鈔に世尊說法の文を一代の說教むしろをまさし肝要等と釋せり。依つて先輩の辯に口傳鈔は祖師の御口傳を述べたるものゆへに、これがすぐに祖師の御已證の御釋なりと申された。之を要するに元祖の選擇集には、法事讚の文の當相に就いて彌陀經說法の將に了んとする時と解し、口傳鈔は善導の微意を開て、一代說教の將に了らんとする時とせられた。而して此經が三經の結經なると共に一代教の終りとなる事、二者共に違ふ事なし。其義先きに已に云ふ如く、觀經の流通の經意を更に布衍したが、此經

なれば觀經の後の說法であるゆへ、大觀小と次第する所以なり。それが亦佛一代說法の終りにして、鶴林涅槃の時に臨みて此經を説き、慇懃に彌陀の名號を舍利弗に附屬し給ふなり。此れを元照彌陀經疏の序に「一乘極唱指終歸樂邦」とある、一乘の極唱とは華嚴と法華の大乗教中至極の說法と云ふこと、其終歸のおんすまりは樂邦と西方彌陀の淨土を指示するより外なしと云ふこと。何故なれば佛一代說法の始めは華嚴經なり、即ち其四十華嚴の終りに、普賢の十大願を説き終つて、「願我臨欲命終時盡除一切諸障礙一面見彼佛阿彌陀、即得往生安樂刹」と彌陀の淨土に往生せんと、普賢菩薩が勸説せられた。又法華の藥王品に「若如来滅後五百歲中若有女人聞此經典如說修行於此命終即往安樂世界阿彌陀佛大菩薩衆圍繞住處生蓮華中寶座之上等」とある、天台五時の判で云へば、第一時が華嚴で說法の始めである。又法華涅槃は第五時の終りなり、其終りの法華にも此經を聞きて如說修行し終に彌陀の淨土に往生すと説けり。されば聖道門の頭角の高き華嚴法華の一乘教は畢竟する所彌陀の淨土に往生するより外なし。況んや餘の三乘の諸經をやである。此れは他宗聖道門の元照すら此の如く云はるゝものであるから、之を淨土門の眼より見れば一代佛教を約めて云へば淨土の三部經に收り、其三經の結經が此阿彌陀經なれば、隨つて亦自ら一代佛教の結經となること道理必然である。其義可レ知。上來三經の説時終る。

第二章 無問自說經

第二に此經の無問自說の事を辯ずれば、彌陀經を無問自說と名くるの始めは天台に起因す。彼疏四丁に「此經命章對舍利弗餘經皆有請主此經無問自說」と。それ已來支那本邦の諸徳多く此經を無問自說となし、特に元照疏上二十丁に「此乃十二分教無問自說之經云云」と。さて是れはそうとして吾眞宗では吾祖御本書化卷本九丁左に「斯經大乘修多羅中之無問自說經也爾者如來所以興出於世恒沙諸佛證護正意唯在斯也」とあり。又一多證文十五丁右に「コノ經ハ無問自說經トマフス、コノ經ヲトキタマヒシニ、如來ニトヒタテマツル人モナシ、コレスナハチ釋尊出世ノ本懷ヲアラハサントオボシメヌヘニ、無問自說トマウスナリ」と。又他流でも此經を無問自說とすることと見へて、西山堯惠の彌陀經私集鈔上左に「今此經大經觀經廢立已顯專念一行究竟、所證誠法於持名一法三經一轍也、故證誠教起捨權說宣爲簡少善、說念佛一設無問自說誠諦教、顯六方證誠護念益、(中略)今此一軸者全觀經流通亦即一代結經者乎」として、彌陀經の無問自說なることを主張せり。凡て佛十二部經の中に無問自說と云ふ一部あり、即ち佛が弟子等の問を待すして自徵自說して、餘人の請問を待たず、自ら進んで說法し給ふを無問自說と爲す。此れは諸經中に一品一章一事等往々あることで、法華經の如きも、一分之に

屬して法華は無問自說果分勝と云つて、唯佛與佛の境界にして、唯佛獨り説く故此れを自說と云ふ。今此經は彼法華よりも一層異なる所ありて彼經を説く時は放光地動等の奇瑞を現じて説法の發起因縁となることあれども、此經に限りては放光請問等の發起因縁もなくして、たゞ佛自ら舍利弗を呼懸け給ふこと三十六度なるに、舍利弗の智慧第一の人にして、更に一言を述ることなく、唯々として其説を聞けり、これが即ち今經の無問自說と云はるゝ所なり。而して又他經の無問自說と今經と趣きを異にすることを知らねばならぬ。他經では唯放光請問等の發起の因縁なくして佛が自說し給ふのは無問の說と云ふに止まれども、此經の無問自說はそれと異りて、佛が鶴林涅槃に臨みて弟子の請問を待たず、自說し給ふ所に於て特に隨自意の出世本懷の說たることを顯すものである。其故は是より先釋尊大經觀經の會座に於て屢々彌陀の本願を説て五濁出現の本意は此彌陀の本願なる事を示すと雖も、奈何せん其時期は未だ涅槃に臨みて居らぬ故、他經にも往々出世本懷を説く文あり。即ち華嚴性起品第三十四卷^{十八}に「如來應供等正覺性起正法不可思議、所以者何、非^{トナラハ}少^ヲ因縁^ヲ成^ス等正覺^ヲ出^ス興^ス于世^ニ、以^テ十種無量無數萬千阿僧祇因縁^ヲ成^ス等正覺^ヲ出^ス興^ス于世^ニ」等と説き、又法華經方便品にも、「諸佛世尊唯以^ニ一大事因縁^ニ出^ス現^ス於世^ニ」とあり、其他般若經五百十一卷にも、「甚深般若波羅密多爲^レ此故出^ス現^ス世間^ニ」と説いて、佛出世本懷を説く文は此の如く所々に在り。されば彌陀の本願ばかりが出世本懷と限つた譯で無きやうに見ゆ。是に於て今經の無問自說と云ふ事が必要となりて、彼華嚴法華等も聖道の機所謂法身の大事を所對とする華嚴や、二乘開會の法華經の機の前には出世の本懷と云はるゝかなれども、五逆の惡人五障の女人を相手とする時は斷惑證理の聖道の法門は何の功をも奏せず、此機に對しては唯本願醍醐の名藥たる彌陀名號の一法より外なし。然るに今や佛將に涅槃に入んとするに當つて、五濁惡世の衆生と云はるゝ十惡五逆の惡人や、五障三從の女人を見捨てゝ入滅するに忍びず、佛の大悲は苦者に於てするものなれば、佛一代の終として末代衆生の爲めに、無問自說し、出世本懷たる彌陀の名號を以て舍利弗に附屬し、我見^ニ是利^ニ故説^ク此言^ヲと佛自證體驗の旨を説きて慇懃に舍利弗に附屬し給へり。猶し母の嬰兒を愛する意より其請を待たず、手足の動くを見て乳を以て之を哺しめんと欲するが如し。即ち是愛情の至りなり、此經の無問自說も佛衆生を憐むの切なるの致す所なり。故に是れを善導は身子に告ぐるは即ち是れ普く苦の衆生に告ぐるなりと釋す。此經の對告衆智慧第一の舍利弗にして一言の申ぶる事なきは全く末代濁世の苦の衆生に成り替りて、本願名號の附屬を受け、極難信法を受持する相なり。されば同じ淨土の法門なれども、大觀二經の時は阿難の請問章提の致請あれども此經計りは他の請を俟ず、佛自說し給ふものは臨末涅槃に際して、濁惡の衆生を哀むの切なるが爲めなり。換言すれば此經の無問自說は他經の尋常平生の場合と異つて、將に命終に及びて丁度親が子を思ふの餘り、哀々切實に

遺命して我子に警告する如きものである。是を善導は世尊說法時將了慇懃附屬彌陀名と釋す。吾祖之を承けて化卷に斯經は無問自說の經也爾者如來世に出興し給ふ所以恒沙諸佛の正意唯在斯と仰せられた。唯斯に在りとは此經所說の執持名號の一法を押へてなり、されば彌陀名號を説くのが佛出世の本懷なる事は先づ大觀二經の上にも已に顯れてあれども、今將に鶴林涅槃に臨みて重ねて之を無問自說なさるゝ所に於て、愈々出世本懷の法門なることが顯るゝ譯なり。故に覺師口傳鈔下五丁に「世尊說法時將了釋シマシマス一代ノ說教ムシロヲマキシ肝要、イマノ彌陀ノ名號ヲモテ附屬流通ノ本意トスル(中略)釋迦一代ノ出世ノ元意彌陀ノ一教ヲモテ本トセラル、大都ナリ」と云へり。

問云、此經は無問自說なる所に於て愈々出世本懷たる事一往了承せり。然るに此經は十二部中では唯無問自說のみなりや、尙餘部に亘る法門ありや否や。

答云、横川の略記に預て是れを論じてあり、今其文を出さば、「問教有二十二此經幾具、答略說ニ道品念佛方法隨業往生及佛依正、如是等說名ニ修多羅、說ニ不退轉阿耨菩提往生極樂、是等授記、一經始終無問自說十方恒沙佛不可計、補處須叟供諸佛、壽命無量劫及此一經皆是方廣、此上三部唯是大乘、寶樹音聲、如三百千妓樂俱作、是即譬喻、天雨ニ妙花、水鳥法音奇異、莊嚴是未曾、彼無三惡趣、何有水鳥、但佛化、如是論議、準如是、餘五不具」と。此文の意は此經中に三十七箇の道品と念佛念僧の文あり。又隨業

往生及佛の依正二報等のことを説くは、凡て修多羅の部に屬す。又不退轉往生極樂のことを説くは十二部經の中の授記に當る。或は一生補所のことや十方諸佛を供養する事、又佛の壽命無量等の事は皆大乘に限る方廣の説になる。又寶樹寶林の音聲を發すること宛も百千妓樂を奏する如しと説く如きは、即ち十二部經中の譬喻なり。或は天より妙華を雨し、水鳥の法音を出すは十二部經中の未曾有に當る。其の他無三惡趣の淨土に水鳥等のあるは何なる故ぞと問て、是れ佛の變化所作と云ふ如きは論議經なり。而して一經の始終は無問自說なり。此れに依りて此の阿彌陀經は十二部經の中では修多羅と授記、方廣、無問自說、譬喻、未曾有、論議の七部を具して、餘の本事、本生、因緣、伽陀、祇夜の五は具せずと云ふが略記の説なり。十二部經の事を知らんとせば大乘義章第一卷に別章あり、華嚴孔目章二二十十部經章と云ふ一章を立て、釋す。又慈恩義林章二本二十八十二分章と名けて七門分別して具に釋せり、披き可レ見。新譯では十二分教と云ふ、舊譯家は十二部經と云ふ。

尙此に就き香月院は此經は十二部經中の無問自說に違ひはないが、通途の無問自說と事かはりて先に引く略記にも一經始終無問自說すとある如く、此經は無問自說の一色にしてあり。なぜなれば此經に譬を説ふが、或は未曾有を説ふが、何にもかも皆無問自說ならざる處はない。例せば總修多羅の如し。修多羅は十二部經中の一種なれども、始終がみな修多羅故に一經悉く總修多羅なり。今此經の無

問自説も亦如是、故に元照疏上二十四に戒珠の往生傳を引いて「此乃十二分教無問自説之經」なりと釋せられた。吾祖の無問自説の經と仰せらるゝも、やはり一經の全體なにか説いてありても、悉く無問自説の經とする思召ゆへ、他經の一品一會の請問等のなくして佛の自説するを無問自説の經と云ふとは、大に異なることを知らねばならぬと彼師は申された。此説は實に宜しいと思ふから茲に附記するなり。上來無問自説の義辨じ終る。

第三章 教興の所由

第三に正しく此經の教興の由を辯するに、高倉の先輩に此れに就き十義を立て、姿く辯じ、一無問自説爲顯本懷故、二爲明釋迦諸佛同讚故、乃至、十爲示世間極難信法故、として縷々辯ぜられた、即香月院易行院等なり。又一蓮院眞成院等は、之を七義に約めて此經の教興の由を述べられたが、何れも大同小異である。予輩の見る所では、其様に多義を設けて辯ぜずとも今經教興の由に已に元祖漢語燈三初に五門分別の第三に述經來意と云ふ一科がありて、先の三經の説時の下に文を出した通り、此經は觀經流通を廣説して諸行念佛の廢立を明にせん爲めに此經の説法が興りたものと云ふ一義で事足れり。其他の諸佛の證誠や又諸佛の同勸同證の事、或は極難信法等の事は此經所説の内容たる教義法門

に就くことで、直接の教興の由と云ふべきものでない。其様に經中に説かれてある教義の内容を一々取り出して教興の由とするならば、大經觀經の教興の由も、亦同じく幾十と云ふ義を立てねばならぬ。繁難と云ふべし。又他經に例して見ても、華嚴や法華でも多大の法門種々の教義が説かれてある、それを一々取出して教興の由に備ふるならば、實に難多無量の興由となりて其煩に堪へず、日も亦足らざることになり終る故に、予は内容の教義に關するものを省きて直接の教興の由となるべきものを取つて辯するなり。

其直接の教興の由とは、先の如く淨土門の立場として之を見れば大觀小と三經次第し、觀經に於て先正宗分には廣く定散の諸行を説く、その中に時々念佛も説けども、二者の間に未だ廢立を爲さざるなり。然るに流通分に至りて佛始めて廢立をなし、阿難に對して「汝好持是語……即是持無量壽佛名」と名號の一法を阿難に附屬して、定散の諸行の事を云はず、是が即廢する意なり。故に善導は散善義の終に其流通の文を釋するに當つて、「上來雜説定散兩門之益望佛本願意在衆生一向專稱彌陀佛名」と云へり。これ即元祖が若依善導以初爲正廢立の義を初にと選擇集に相承せらるゝ所で、元祖は善導の儘を弘通し給ふ御方なり。依つて黒谷傳十九に「或時上人月輪殿ニシテ山ノ僧ト參會ノ事侍リシニ、彼僧淨土宗ヲ立給ヘルハ、イヅレノ文ニヨリテ立テ給ゾヤトタヅヌルトキ、善導ノ觀經疏附屬

ノ文ナリト答へ給フ」等とある。之に依れば元祖の淨土宗は此上來雖説の文に依つて立て給ふこと明かなり。して見ると元祖の一向專修の念佛とは、定散の諸行を廢して念佛の一行を立するに在り。而して彼善導の疏文で見れば、觀經流通の文は廢立なること明なれども、觀經の上では諸行の文は廣く、念佛の文は狭し、是を以つて行學之徒岐路迷ひ易く、是非決し難し、故に今此經に至りて不可以少善根等と佛諸行を廢捨して、唯執持名號の一法を明す、是即念佛の行に於て決定の信を生ぜしめんが爲の說なりと、明かに元祖此經の來意即教興の由を示し給へり。依之吾祖聖人も元祖の意を承けて化卷本眞門下（六要九丁左^{二十二}）に先善導散善義の上來雖説の文を引き、次に法事讚の極樂無爲涅槃界等の文を引けり。此法事讚の文は此經の不可以少善根等の讚文にして、彌陀經に諸善萬行を不可以少善根と嫌貶して、多善根多福德の名號を執持せよと、釋迦諸佛が勸讚し給ふは、全く觀經流通分の説法を具に説いたが此彌陀經なりと見よと云ふ祖師の指南なり。（唯信文意^{十六}）に法事讚の極樂無爲の文を引いて具に釋あり可見）されば此經の興起を聖道諸宗の人の見たる所では、各々自宗の見地に据りて種々に説をなせども、夫れは今用なし。吾淨土門で元祖吾祖の指南の如く、觀經の流通を廣説して二行の廢立を審かにし、念佛の一行に於て決定の信心を生ぜしめん爲に、佛此經を説き給ふものと知るべし。斯く見來れば一部の始終唯念佛一行を説いて、諸善萬行を不可以少善根福德因縁と嫌貶し、善導は之を隨縁

雜善恐難生と釋し、次の經文の執持名號一心不亂と説く文を法事讚に「故選^ニ如來要法^ヲ教念^ニ彌陀^ヲ專復專^{ナリ}」との給ふ。これ此經は全く廢立の正意を明にする爲めの經法と見よと云ふ指南なり。

因に他師の教興のことを明してある文處を指せば、天台慈恩の疏には別に此事を云はず、元曉の彌陀經疏^初に「牟尼善逝現^ニ此穢土^ニ滅^ニ五濁^ニ而勸^レ往、彌陀如來御^ニ彼淨國^ニ引^ニ三輩^ニ而導^レ生、今是經者斯乃兩尊出世之大意、四輩入道之要門、示^レ淨土之可^レ願讚^ニ妙德之可^レ歸^ニ等と云ふて、別に教興の科を設けて云ふに非れども、自ら此經の興由を明すことになりてある。又元照の彌陀經疏に教興を明す下に略して五意ありとして、「一欲^レ令^レ衆生^ニ知^レ娑婆苦^ニ、求^レ出離^ニ故、二令^レ知^レ佛境界^ニ生^レ忻慕^ニ故、三令^レ攝^レ心安^ニ住念佛三昧^ニ故、四令^レ破^レ障脫^レ苦得^レ清淨樂^ニ故、五令^レ生^レ彼國^ニ成^レ就菩提^ニ故」として其下に一々此經の文を出して之を證す。今云此等は淨土教として往生に就いて、其の修因得果の事を擧げ、教興の由を明すは、聖道門の人にしては能く見たものと一往讚辭を呈す。然れども、尙未だ三經等に通する廣い教興の由にして、たゞ此一經に局りたる興由とは爲し難し、故に未可なりと云はねばならぬ。又明の大佑、智旭、雲栖、性澄、大惠、等の諸師各此經の註釋を作り、義理を述ると雖も、多くは天台系の人なる故、名體宗用教の五重玄義に依りて釋し、其間に唯心己心の淨土を云て、往々心外有相の淨土は愚者の爲めの方便説とする口吻あれば、吾淨土門の説と同日にして語るべきものに非ず。又

彼等の疏には別に教興の由を明すと云ふ科も無ければ、此を一々評論し引合すに及ばず。又我日本の横川源信和尚の阿彌陀經略記は、天台の疏の餘りに簡約なるを以て、更に略記を作りて經意を釋す。然れども未だ教興の意來意のことは別に論じてない、たゞ最判の其大意の下に「彌陀本地應迹難量、普徧十方廣利六道、極樂是其一區、彌陀是其一化、機感有時今偏讚說云云」とあり。其他諸師の註述一々擧ぐるに違あらず、却つて亦煩しければ之を略す。具に知らんとすれば宜しく其疏を披くべし。

第四章 一經の分齊

第四定ニ經分齊。此一科は此經の分齊即ち仕格を定る事である。先輩は此教の分齊の外に藏部の所攝と云ふ科を立て、此經は聲聞菩薩二藏の中では菩薩藏(大乘教のこと)の所攝、又經律論の三藏の中では、律論に非ずして經藏の所攝なることを叙べ、又十二部經中では無問自說の所攝等と云ふことを委細に辨じ置かれたが、此等は餘乘の中常に出づることにして、少しく他經論を學んだ者ならば能く承知のことであるから今は省略し、直に此經の位地仕格を定る、即分齊のことを述べんとす。

凡て經論を講ずる時には、其經論の分齊即地位と云ふことを知る必要あり、それを等閑に附してはならぬ。例へば曇鸞大師が天親菩薩の淨土論を註釋するに當り、淨土論の仕格は大乘の論か小乗の論

か、又聖道の論か淨土門の論かと云ふ様なことを預め定めて、それを能く知りて論文の内容を窺はでは論意を明白にすることは出来ぬ。故に論註開卷の初に、龍樹菩薩の難易二道の判を出して、後に之を決釋して「此無量壽經優婆提舍蓋上行之極致不退之風航者也」と論の仕格を定めぬ。即ち此淨土論は「上行之極致」と大乘の至極にして、淨土に往生して速に不退に到る事を得る、淨土他力の法門を明す論なりと論定せられてある。これが即ち教の分齊と云ふものなり。今此經に於ても阿彌陀經は一代佛教中には、如何なる地位を占め、如何なる仕格を持ち居るか、又眞宗の祖師は(三經差別門の時はい)か様に此經を御覽になりてあるかと云ふことを辨するが此一科なり。よりて他の事は省略しても、此の事は梗概丈けでも知り置く必要がある。其中先づ他師の説を述べ、次に吾宗祖の御釋を辨すべし。偕てその他師の中此經の註釋家天台、慈恩、元照、雲栖等は各々自宗の立場より此經の分齊を論ずるゆへ、必ずしも一準ならず。先づ天台は例の五重玄義を立て、經論を釋するが常なるゆへに、此經疏にもそれを用ひ、其第五に「教相帶別、挾通、生熟醍醐總爲教相也」とあり。此文を直に見ると、此經は天台の四教(化法)の中では別教の菩薩の爲に法を説く故別を帶し、又聲聞も此列衆中にあれば、それには小乗より大乘へ入るやうに説く通教の法も、兼ねて説いてあると云ふやうに見ゆれども、之を性澄の彌陀經句解_{二丁}に照すと、彼も天台系人ゆへに、天台の意を受けて教相を判する下に、「此經部

屬ニ生酥ニ大乘教攝乃至四教脩法正意、在レ圓而通被ニ四教機ニ乃至薄地凡夫稱名願レ生皆獲ニ果遂ニ蓋部屬ニ方等ニ調レ機入レ頓故機雖レ有レ四教自是圓等と云へり。此れに依れば、天台では佛一代の經は首尾圓に在りと云つて、如來一代の説教は皆圓教を説いて聞かせ度ひと云ふ佛意ゆへ、諸大乘教に圓教を説かざるはない。別して此經は淨土往生を勸むること故、觀經の如く、定善の觀法を説き度ひと云ふのが佛の本意なれど、此經にはその圓教の觀は説いて無けれども、佛の本意は圓教にある故に、此經正しくは圓教なれども、亦別教を帶し、通教を兼ると釋せり。其故は此經の列衆には聲聞菩薩天人阿修羅等ありて、種々の機が列ねてあれば、小乗を引入するには通教も説き、菩薩の爲めには別教も説かねばならぬ、依レ之佛の正意は圓に在れども、所對の機には四教の機があるから、通、別、生、熟、醍醐、總爲ニ教相と云ふが彼の意なり。但し此れは化法の四教に就て判じたものなり。若し化儀に就て云ふならば、先に引いた性澄の句解に、「蓋部屬ニ方等ニ調レ機入レ頓」とあるから、此經は漸教の所説となる。其義知るべし。而して此漸頓の扱ひに天台は化儀に就て云ひ、淨影等は機の趣入に就て云ひ、賢首は能被の教法に就く。吾眞宗の扱ひは善導の頓漸二教は成佛の遲速に就て云ふものなること、愚禿鈔等の講義に常に出ること故、今煩しく一々辨ぜず、讀者之を領せよ。

次に慈恩の見方を云へば、彼彌陀經疏には七門分別して釋してあれども、別に教相の事は一言も沙

汰なし。通贊疏上丁^四には三教八宗の事を立て、教に約すれば此經は第三の非有非空の中道教に攝し、宗に就けば第八應理圓實宗に屬する事を述べてあり。又元照の教相を云へば、彼疏の上丁^{十一}に「次辨ニ教相ニ淨土教觀通明ニ現在十方諸佛ニ即如下引六方恒沙諸佛出ニ廣長舌勸信是經即其證也、又準ニ下文ニ善男善女聞レ經受持不レ歷階漸ニ皆不レ退轉阿耨菩提ニ故知一切淨土教門皆是大乘圓頓成佛之法定非ニ偏小ニ如ニ別委論」とあり。此れは餘程聖道の見解を去つて、淨土門の立場に近い故、吾祖も御本書行卷に此元照の疏を時々御引用になる。此文の意は、唐朝の道綽禪師の頃より、他から淨土願生の人を難じて、淨土教は利他を捨て、自利を先とするゆへに、小乗の教なりと云ふものあり。今それに對して小乘には三千界内の事のみを云つて、而も三千界に一佛一菩薩として、未だ十方に淨土ある專を知らず。況や恒沙の諸佛在すと云ふ事は尙更知らぬ。然るに此經、下の文には六方恒沙の證誠の事を説いてあれば、小乗教に非ることを知る。加之下の文の善男善女が此經を聞て名號を受持すれば速に不退轉を得、又彼國に生じ終れば頓に大心大行を修して佛果を證得す。依レ之此土の三乘の人が次第に進修して、漸次に證果に至るの比に非ざれば、此の淨土法門は皆是大乘圓頓成佛の法にして、定て偏小に非ることを知ると、難者に對して其説の誤れる所を對破して、淨土教は圓頓成佛の法と主張するなり。此所は吾祖の本願圓頓一乘と仰せらるゝと殆んど符合す、彼は聖道の人で有り乍ら、能く淨土教の眞意を

得たるものなりと云ふべし。尙此一切淨土門と指したは、總じて淨土の三部經のみならず、鼓音聲經等の往生淨土を説く文を指す意である。天台の如きは、同じ淨土の三經中觀經は圓觀を説いてある故、圓教と許せども、大經と彌陀經には之を説かざる故、佛の化意より云へば、大經小經共に圓の所攝と一往許せとも、對機より云へば別を帶して通を挾む教で、觀經よりも大小二經は劣ると判するが天台なり。而るに今元照は一切淨土の教門は、何れも皆速疾に不退轉に至り、漸々轉進の三乘權化の比に非ざる故、皆是大乘圓頓成佛之法と三經所說法門を一束にして、高尚甚深に見た所は實に稱嘆に價ひするなり。其他先に擧ぐる彌陀經の註家性澄、雲栖、大佑等の釋は皆多く天台系に禪を兼たる人にして、たま／＼淨土の經を釋すと雖も、到底經意を得ること遠しと云べし。故に今天台元照の主なるものを擧げて、餘は略して一々評論せず、餘は準之應之知。これで他師の教相のことは辯じ終る。

次に正しく今家の判を述るに、淨土門に於て始めて教判の基礎を立てたは、初祖龍樹の易行品難易二道の判に始ること云ふまでもなし。それを承けて鸞師は自力他力と云ひ、道綽は聖淨二門と判す。又善導は漸頓二教を立て、玄義分右^{六丁}に「今此觀經菩薩藏收頓教攝」と云へり。又同歸三實偈にも「我依菩薩藏頓教一乘海」とあり。又般舟讚左^{二丁}に「瓔珞經中說漸教……觀經彌陀經等說即是頓教菩提藏」と。此等の字には大經を等收したもので、善導は三經を悉く頓教と判するなり。何を以てならば聖道門

の瓔珞經を見ると、十信十住十行十回向十地等覺佛果と五十二位の次第を立て、その階位を漸次に轉進して終に成佛すと立てる。其初の十信は大乘の信心を成就するに、一萬劫を経て漸く初住位に入ると云ふ、これ全く漸教の相なり。それに引き換へ、此觀經彌陀經等の説は名號を稱念する僅かの行にて、やがて淨土に往生し、直に無生忍を證し、自ら佛果に近づく、豈に頓教に非ずして何ぞやと云ふが彼の文意なり。偕て此の頓漸二教の扱ひに就て愚禿鈔上卷に二雙四重の教判を立て、聖道の教にも頓漸二教淨土門にも頓漸の二を分つ。今善導の頓漸二教は、吾祖の精密の御釋とは異りて、たゞ聖道淨土相對して、彼聖道を漸教とし、淨土の法門を頓教とする一重の漸頓と心得べし。そこで爰に聖道門の華天密禪の四家大乘までを總じて漸教とする釋ゆへに此時は絶待門の所明にして、凡て聖道八萬四千の法門を淨土門に入るまでの權方便なりとする意である。故に聖淨相對して漸頓を語つて、其中に自ら絶待の意を有する文と見よと云ふが先輩の説なり。それは何故なれば吾祖は此文を愚禿鈔上左^{六丁}に「本願一乘頓極速圓融圓滿之教者絶待不二之教」等として、初の二雙四重の相對終りて更に絶對に移り、而して其次に我依菩薩藏の文と此般舟讚の文が引いてあり。此御引用の點より窺ふと、此れを絶對門の所明と見るが吾祖の御指南なり。而して又祖師は三經の中で弘願一乘を説く大經を頓教とし、觀經要門定散の教を漸教として、三經中に於て漸頓を分つは第二重の判にして、是れやがて聖道門中にも華

天密禪の四家大乘を頓教とし、法相三論等の權大乘を漸教と判じて、終に二雙四重の判をなすに至る。此時は相對門の所明となり。聖道にも頓漸、淨土門にも頓漸二教と分ちて、彼此牛角に論するゆへに相對門となる。此のやうに聖淨二門共に頓漸を分つ事は善導の上によりやと云ふに、顯文にはなければ、其意は自らあると先輩は申された。即般舟讚^{二丁}に、釋尊が八相成道して娑婆の衆生を攝化するに、聖道教の中に「或漸或頓明^三空有^二乃至根性利者皆蒙^レ益」とある。此文は聖道中に漸頓あることを明かすものなり。又淨土門中で頓漸を分つ事も、善導の玄義には要弘二門を分ちて、「要門者即此觀經定散二門是也」とし、其要門に對して「言^三弘願^二者如^三大經說^二」と云て、其弘願を先の十四行偈に頓教一乘海と云ひ、要門を極樂之要門定散廻向として、觀經當分の定散の諸行を廻向して、淨土に生ぜん願する事を云へり。是れが自ら愚禿鈔の二雙四重に合す、即ち淨土門にも漸頓二教を明してある故に、彼鈔^{二丁}漸教の下に「二易行道淨土要門無量壽觀經之意定散三福九品之教也」とあり、又頓教の下には「二易行淨土本願眞實之教大無量壽經等也」と。是大經所説の弘願を善導は頓教一乘と釋せられたゆへそれを相承して大無量壽經等と云へり。而して此等とは何を等したかと云ふが問題であつて、愚禿鈔末註の中、義要纂釋は阿彌陀經を等すとす。又樹心摸象は、觀小二經の隱義を等すと云ふ。これは一寸どちらでもよき様に見へるが左に非ず。是れは義要等の彌陀經を等すと見るが可なり。何故ならば

次の淨土の漸教の下に「易行道淨土之要門無量壽佛觀經之意」として、此所には等字なし、即要弘二門相對して、觀經は要門定散の漸教、大經は頓教一乘として大無量壽經等と云ふ。等の字は阿彌陀經を等したものなり。若此等を觀小二經の隱義を等すと見るならば、漸教の觀經の下にも等の字を置いて、顯には阿彌陀經の眞門自力を等すとせねばならぬ。然るに彼下に等字のないのは、祖師の思召は頓漸二教と分ちて、三經を之に配する時は、大經の頓教の中へ彌陀經を等して漸教には觀經の一經のみとなさるゝ意なり。故に之を化卷^{自五十}眞門下に對すると「良教者頓而根者漸機^{ナリ}」とある。今此の彌陀經の教の分齊は、正しく此文が入用であつて、三經に就て機と教とを擧げて、頓漸を判ずると大經は能被の法も所被の機も共に頓なり、故に愚禿鈔上^{九丁}二機對の下に一乘圓滿機他力^{ナリ}とある。觀經は之に反して法も定散の諸行、機も亦教と共に漸なり。而して此彌陀經は、法は念佛一行のみを説いて定散の諸行を不可以少善根と廢して説かず、大經の弘願と異りはない。而し機が未だ定散の機にして、漸機なり。先の觀經流通の所で、佛が定散諸行を廢して念佛一行を阿難に附屬し給ひしゆへ、行の勝劣を知て念佛一行となれども、機根が未だ定散自力の執情を捨てること能はず、それが爲に自力念佛に墮して眞門の分齊となる。故に此自力の執情を捨て、廻心せねば、第十八の弘願に至れぬ故機は漸機なり。されど其所稱の法體は第十八の弘願の物柄と換りはない。故に祖師は是れを「教者頓而根者漸機」と判じ給へ

り。依之彌陀經の分齊は吾祖の指南より伺へば、教頓機漸の經と云ふことになる。其義知るべし。

問云、此經は一概に教は頓とのみ云ふべからず、又漸教に通すべし。何故ならば此經は二十願開説の經にして、眞門方便の説法なり。故に吾祖も化卷眞門下に「釋迦牟尼佛開演功德藏勸化十方濁世阿彌陀如來本發果遂之誓願也悲引諸有群生海」等とありて明に眞門方便の善本徳本の名號を開示して、自力念佛を策勵するものなれば、第十八の弘願とは大に別なり、故に教もまた漸教に通すべし、何んぞ教頓とするや。

答云、是れ要論なり。一往二十願開説の眞門念佛と云ふ時は、いかにも能被の法までが自力となりて、漸教に通ずるかの如くに聞ゆれども、元と彌陀經は觀經流通を廣説したるものと云ふ事、先に辨するが如し。彼の流通の念佛は弘願法なり、云何ぞ漸教たる事を得ん、飽くまで一乘弘願の法なり。それを定散の機が己が善根として修する所に於て、始めて眞門の名が付いて方便となれども、所稱の法體に更に換りなし。たゞ機の失が累をなして眞門の分齊となるのみ、念佛の體は頓の法なり。

問云、若し然らば此經は教頓機漸にして、教は飽くまで頓にして、漸に通ぜずと云はば、機教不相應の過失あり、能被の教と所被の機が乖隔して其益ある筈なし、故に何れの説法にも機教相應と云ふことを云ふが佛法の常規なり。何んぞ此經に限つて佛が機教不相應の説法をなし給ふや。

答云、此れに就いては先哲も相應に辨を費されたれども尙履を隔て、痒を搔くの感あり。今云、是は左程難問題でない。機教相應と云ふことは佛の化儀に付いて云ふ事、佛が説法し給ふには、所化の機を見て適宜の法を與ふると云ふ事は當然なれども、今吾祖化卷に此經を教頓機漸と判じ給ふたはそ様な意でない。即ち尅體門と云ふて眞門と云ふもの、成立する實質は如何なる邊にて眞門の名が附くかと云ふことを知らしむる爲の御釋にして、元と眞門は要門と弘願との中間に位するもので、先に云ふ如く三經の中で、機教共に頓なるは、大經の弘願なり。又機法共に漸なるは觀經の要門なり。然るに今此經の眞門は大經の法の頓と觀經の機の漸と二者相寄りた所に、眞門が成立する故に眞門の性質を分拆して見れば、教は頓にして機は漸なりと示し、以て機と法とを尅實して知らしめるが化卷の釋なり。例せば華嚴家に云ふ同教の如きもので、同教とは一乗の法を三乘に寄同して説くを、同教と名く、故に此れは唯一乗にも非らず、又唯の三乘にも非らず、三一和合の所に同教の名を得る故、同教の體は三一和合と釋す。今も亦其の如く、大經の頓教のみにも非らず、觀經の漸教のみにも非らず、大經の頓の一分と、觀經の漸機の一分とが相寄つて眞門なるものが成立するゆへ、眞門の性質を尅實して云へば、教は頓にして機は漸と云ふことになる。然るに難者は教頓機漸と云へば、機教不相應になると佛の化儀のことを以て眞門の内容尅實義門を難せんとするは、義門の筋合を知らず、己が無智

を表白するものゆへ、宜しく反省すべし。要するに自力機情の前に本願の嘉號たる頓法を、己が善根と心得て修するから、自力念佛となれども、念佛の自體は本より弘願法なり。喩へば黄金を不淨の所に置くと、清淨の所に用ふると置場に依て淨穢の器となれども、金の自體はどこ迄も異りなし。今も定散自力の機漸が修するゆへ、眞門念佛とくさみを付くれども、所修の法體を尅實すれば、飽迄本願の嘉號頓なること何んぞ疑を存ぜん。此所に先哲の引かれた歌に、「白露の己がすがたを其儘に紅葉に置けば紅の玉」と。白露とは本願の名號に喩へ紅葉とは定散自力の機に況す、弘願の法體名號を定散の機が受けて、能稱の功を募りて此れで往生せんと策勵して稱ふる故、自力念佛の眞門となれど、念佛の自體は頓教弘願の物柄なりと云ふ歌の意なり。應知。上來教の分齊を定る一科辨じ終る。

第五章 一經の宗趣

第五に一經の宗趣を辨するに、凡て釋家が經論を解釋せらるゝには、必らず玄談に其一部を統收總括する所の要義を叙ぶるが例である。此れを宗體と云ひ、或は單に宗と云つて體を云はざるものもあれば、又體を判じて宗を云はぬものもある。又具に宗と體とを分ちて二者俱に釋するものもあり。就中淨影の如きは宗趣と云ふて體を云はず、近くは彼觀經初丁「此第三須知經之宗趣乃至此經觀佛三昧爲」

宗」とあり。觀經の宗趣を判するには初に宗趣と云て後には單に宗のみで語つてある。又海東元曉も宗致、宗趣の言を用ひ或は宗體とも云へり。つまり彼は宗體、宗致、宗趣を同意義に見るなり。其證據には大經宗要二丁に、「第二簡宗致」として初に標し置き、後に「此經者正以淨土因果爲其宗體、攝物往生以爲宗致」と云てある。又同師の小經疏には宗のみを出してあれば、師は宗體は一とするやうにも見へる。此れを賢首の釋に照せば探玄記一丁に「所詮宗趣者語之所表曰宗、宗之所歸曰趣」とありて、宗とは宗要で一經所說の要義を宗と云ひ、其要義の趣き歸する所を趣と云ふ。語を換て云ふならば、一經に説き表す要義は宗なり。其宗に依りて詮顯する者を趣と名け、宗の歸着目的點となる所を趣とする意なり。故に合して云ふ時は宗趣と云ふて之を別にせず、又開いて云ふ時は宗と趣とを別にするなり。元曉と賢首は共に華嚴宗の人にして、至相の門人なれば同轍の學風なり。次に嘉祥の如きは大經義疏初丁に、「此經宗致凡有二例云云」として體を云はず。又同觀經疏五丁には、「第三辨宗體以宗爲體以體爲宗宗體無異」と明に二者別なしと云へども、下の文には「以不二爲體因果爲宗」と宗と體を分け、又終五丁に至りて「淨土因果爲體勸物修因往生爲宗」とあれば、之を宗祖の教卷に大經の宗體を判じて、如來の本願を説くを以て經の宗致と爲し、佛の名號を以て經の體とすとある。吾祖の御釋の宗の方が彼の體の方に當る。勿論嘉祥は觀經の上で云ひ、吾祖は大經

の宗體であるから、直に此れをあてはめる事は無理なれども、一寸似たる邊に就て云ふと此の如し。又善導玄義分の宗旨不同門の下の、一心廻願往生淨土爲體と云ふ體が、嘉祥觀經疏では却つて宗となり居れり。又天台は五重互義を立て、名體宗用教と云ふ中、體は主質の義で即物柄を押へて體と云ふ。實質實體と云はんが如し。宗は宗尊主の義で一部の肝要を云ふ。體は實質であるから天台は諸經何を明しても眞如實相の外なき故、彼は法華經の體を實相爲體と判じ、一乘の因果を明すを宗と云へり。之に准じて觀經疏^右には「心觀爲宗、實相爲體」と釋し、又彌陀經義記^左にも「辨體法性眞如諦心觀察證常樂果」と云ひ、「宗致淨土機緣妙樂莊嚴化像迎撮」となり。慈恩は新譯家なれば能詮の教體所詮の宗趣を論じて、佛の言説々法の能詮の上で教體を論じ、又所詮の義に就ても宗趣を云ふが常なり。故に同師彌陀經疏^左に「此問部類多數宗趣所明」として、答へに三部經と鼓音聲經とを出して能詮の教の上で宗趣を出し、次に「如此觀經教修淨土之業即以定散二善爲宗」と所詮に就て云ふてあり。此の如く他師の宗體宗趣等の扱ひ一準ならず、要するに諸師各自宗の立場に依りて、釋例を異にせり。

今正しく今家列祖の上^{五丁}に就て云へば、曇鸞大師の論註には「以佛名號爲經體」と體の釋あれど宗はなし。道綽禪師安樂集上^右に「今此觀經以觀佛三昧爲宗」と宗のみありて體を云はず。善導の玄義

分に始めて宗と體とを分ち、觀佛念佛の兩三昧を立て、宗とし、「一心廻願往生淨土爲體」と判ぜり。依つて吾祖教卷に之を相承し、具に大經の宗體を分別し給ふ。然るに吾祖三經の宗體に就いては、化卷に「三經眞實選擇本願爲宗」とあれど體の判なし。但し此れは三經の通宗にして別宗にあらず、若三經差別門の時は各々宗體が別とならねばならぬ。此別々の宗體は云何と云ふに、先輩種々に説をなせり。先御本書樹心錄一卷に「三經有通宗通體又有別宗體」として、夫を圖示すれば左の如し。

三經通宗通體——以往生淨土爲宗、以佛名號爲體、

三經別宗別體——

大經——說如來本願爲宗以佛名號爲體、

觀經——以觀佛三昧爲宗、亦念佛三昧爲宗、一心廻願往生爲體、

小經——以勸信爲宗、以佛名號爲體、

此れを香月院は愚禿鈔講説の時に評破して、樹心及模象は愚禿鈔^{五丁}に法事讃の、三往生の文を引いてあるに就て、此通宗を立つれども彼は三經の各別往生を云ふ文なれば異門の別論なりと云へり。依之更に三經の通宗通體を考へられて、凡そ左圖の如き説を立てられた。先通宗通體は今の所用に非ざる故此に別宗別體のみを出す。

大經—說ニ如來本願ニ爲レ宗、以ニ佛名號ニ爲レ體、

觀經—觀佛念佛兩三昧爲レ宗、一心廻願往生淨土爲レ體、

顯—開ニ示善德本眞門—

小經

體—一心廻願往生淨土

此の小經の宗體は、始め慧空師彌陀經義要上本^{十二}に「若准ニ觀經之兩宗ニ者ニ亦此經可レ存ニ隱顯之兩致ニ歟」と、顯義の宗は顯ニ善本德本名號、隱義の宗は在レ顯ニ弘願信心ニと云ふて、化卷の文を引て成立してある。然れども未だ體の事を云はず、依レ之慧然慧琳の諸師之を潤色して終に宗と體とを大成し、香月院も之を襲承して即ち顯には善本德本を宗とし、又隱には選擇本願爲レ宗、又一心執持往生淨土爲レ體と云はれた。それ已來吾派の末學皆之に雷同して、一人として此れ已外に論及するものなし。此の説を以て完全無缺一點の議する餘地なしと迄に某師は稱讚せられた。その他隣山の日溪の聖淨決、慧鑑の弊帚録は別義を設けたり。即ち聖淨決上^{十四}左「以ニ付屬流通ニ爲レ宗、以ニ名號ニ爲レ經體ニ」と云ひ、又弊帚録上^六左「別明ニ今經宗ニ者證誠爲レ宗、名號爲レ體也」と云ふて、各義を成してある。是れを香月院は此等は隱の義のみを出して、未だ顯説の方面を云はぬから一部分の宗體として、隱顯兩義に亘る彌陀經

の宗體とは云へぬと評せられたは適評なれど、若し吾人に云はしむれば師の隱顯兩宗一體説、果して妥當にして間然なしと云ふべきか、是れ一考を要するものなり。善導の玄義分に觀經の宗旨に兩宗一體を立て、觀佛念佛の兩宗あるを速断して、觀佛三昧は即ち顯説の宗なり、念佛三昧は隱の宗なりとせられた。これが誤解を生ずる根本となりて、それ已來の吾派の學者は此の説を至極尤もなりと思ひ込み甲傳へ乙唱へて終には高倉の學輻となりて一步も此の外を出でず。爲レ之觀經系の隱顯廢立の判釋が混淆して、其の結果は善導元祖の觀經を廢立意で見給ふのと、吾祖の隱顯で御覽のとが一所になり、廢立即隱顯の義となりて觀佛三昧は顯説の宗なり、念佛三昧は隱であるから、觀經の正宗顯説の上には念佛は説かない、故に善導も玄義分序題門に「言弘願者如大經説」と大經に譲つてしまふてある。是れ弘願は觀經の上に説いてない證據なりと辨するに至り、遂に善導の疏文の意も吾祖の化卷隱顯釋の意も一所に見做し、剩へ「依ニ釋家意ニ案ニ無量壽佛觀經ニ者ニ等あるに就き、釋相廢立釋意隱顯など、云ふ名目を立て、善導の疏文は文相の上では廢立なれども、其の文意から云へば隱顯であると、曖昧の言を以つて押し通せり。予輩は未だ此の説に賛同すること不能。試みに思へ、善導の言ニ弘願ニ者如ニ大經説ニとは弘願を觀經の顯文に説かぬと云ふ意ではない。善導は觀經を見るに要門弘願で捌いて、定散要門は釋迦の持前、弘願念佛は彌陀の持前と、觀經正宗中は二尊二教なり。然るに流通分に至ると二尊一

教に歸して、釋迦も定散を廢止して唯念佛一行を阿難に附屬し給へり。其の流通の文を釋するに當つて、善導は『上來雖說定散兩門之益望佛本願意在衆生等』と、名高き廢立の釋を爲せり。此の流通より正宗を逆觀する時は、正宗中には或は念佛衆生攝取不捨と説き、或は下上品下々品に稱南無阿彌陀佛と念佛を説けども、其の他の多くは定善の觀佛を説き、又廢惡修善の散善の行法を説いてありて、彼の定散の法が主であるか念佛が主であるか、未だ佛意の所在を知るに由なかりしなり。(約まり正宗中は要門定散と弘願念佛とが混じて説かれ、何れとも勝劣が決し難し)然るに流通附屬に至りて、始めて定散要門は方便にして所廢となり、念佛は能立の物となり、明かに釋尊の意旨が念佛に在ることを知り得る。此れを以て善導元祖は常に廢立の意を以つて觀經を見給ふ所以なり。而して言弘願者如大經説とは、觀經に説ける弘願念佛の本は大經第十八願の念佛にして、是れが彌陀の本願なり。故に本弘誓願の一部始終を委しく大經に説いてありて、彌陀の持前たる弘願を知らんとすれば、大經に説くが如しと云ふのが彼の序題門のなり。それを有人は弘願は少しも觀經に説かぬと云ふが如きに至りては、序題門の文すらも解し得ぬものなり。若し觀經正宗中に少しも弘願念佛を説かぬとすれば、要弘二門は正宗分中に説いて無きことになる。正宗中はたゞ要門のみにして、弘願の説なしとすれば流通に至つて要門を廢し、弘願を立すると云ふことは出來得ない。何故ならば未だ一度も説かざる念佛

を俄に持出して、立てんとしても所對の機が其の何の謂たるかを了知せず却つて惑を生ず。今善導の意は左に非らずして、正宗中では要弘二門が對立してあつたものが、流通に於て定散を廢して念佛の弘願のみを阿難に附屬する所で、始めて二門の廢立と云ふ事が判然し佛意の所在が分る。之に依つて元祖は善導の上來雖説の文を基礎として淨土の正宗を開き、一向專修の念佛を勸めて南無阿彌陀佛往生之業念爲本と標冒せり。善導元祖の要弘二門廢立の要旨は凡そ此の如し。

然るに吾祖は此れに異りて、要弘二門の行々相待して本願非本願の上で云ふ義に非らず、二行の勝劣は已に善導元祖で顯れ終つてある故、更に機受に就いて安心の機上より、自力他力の差別を分かつたんとするが隱顯の判釋なり。故に化卷隱顯の起りを見るに、『問大本三心與觀經三心一異云何、答依釋家之意按無量壽佛觀經者、有顯彰隱密義言顯者顯定散諸善開三輩三心、然一善三福非報土眞因、諸機三心自利各別而非利他一心』等と、又『言彰者彰如來弘願演暢利他通入一心』等とあり。此の文に釋家之意とは釋家善導の意趣に依つて、觀經の上に隱顯を立て、見ると云ふ文なり。されば善導の何れの邊に其の意があるかと云ふに、已に意に依ると云ふが故に文面顯了と云ふに非らず、宗祖の着法眼を以つて彼の疏意を探つて見ると、丁度散善義三心釋の如き即ちそれである。實に吾祖の隱顯を立て給ふ根本は彼の三心釋より起る。元來觀經の至誠心深心廻向欲願心の如きは、行者

の安心。一經の樞要にして、此の三心の説く處は上々品なりと雖も、之れが上定善を通攝し、下九品に通ずる正因であること、散善義十二丁右并に散善の通科に依つて明かなり。されば此の三心の自力と他力とは一經權實の岐るゝ所、自力他力の向背は一に此の三心に在り。爰を以つて善導此の三心を釋するに當つて頗る丁寧を盡し、其の第一の至誠心には、自利眞實利他眞實を分ち、第二の深心にも七深信六決定を立て、第三の廻向發願心にも、亦自利々他の別をなす、此の自利々他の言はみな自力他力の異名にして、通途の自利々他のことに非らず、此の如く疏釋甚だ重疊にして、容易く黑白を辨じ難し。茲に於て吾祖活眼を開いて彼の三心釋を透徹し、之に根據を置いて此の三心を一經に擴充して見ると、遂に觀經に隱顯の二義を含むことなり。若し文の顯義に依れば、觀經一部は第十九願を開説し、定散三福九品の行を説いてあり、其修する行者の心相は自力の三心なり。若し隱彰の上より云ふ時は、此の三心たるや第十八願の三信と等しくして、如來利他の信心なり。故に『二經(大觀)之三心依顯之義異也、依彰之義一也、三心一異之義答竟』自四十丁左と、明かに、三心釋に基て隱顯の釋を立て、あり、是れを以て隱顯は安心に就くことを知るべし。又此れを和讃に徴するに、『定散諸機各別の自力の三心ひるがへし、如來利他の信心に通入せんと願ふべし』とあり。此の讃は觀經一部の大綱を一首に約め、初めの二句は經の顯説の相なり。後の二句は經の隱の義をのぶるものにして、凡そ觀經一部の

大綱は釋迦顯トキに定散二善を説きて、諸機を誘引し通じて定散諸機自力の三心を説くと雖も、其の隱彰の實義から云へば彼の自力の三心をひるがへして、弘願他力の信心に通入せしむるが、此の經の裏面に伏在する密義なりと、隱顯二義に就いて一經の大意を示し給ふが此の和讃なり。又愚禿鈔下二十三丁右には『竊按觀經三心往生二者是則諸機自力各別之三心也爲歸大經三信也勸誘諸機欲使通入三信一也』とあり。此の如く觀經の上に隱顯を立て、一部を通覽する時は、題號の觀無量壽佛とは、顯には眞身觀の六十萬億那由他恒河沙由旬の佛を觀する事にして、即ち定善觀所見の佛なり。又念佛衆生攝取不捨とある念佛も、顯には萬行隨一の念佛か然らざれば修行六念の聖道通相の念佛で、約まり定善位中の行に不_レ過、決して弘願眞實の念佛に非らず。然るに此れを隱彰の義より見る時は、言弘願者如大經說で經題の無量壽佛とは大經の本願成就の盡十方無量光如來なり。また觀とは觀知の義で、聞其名號の一念に疑ひなく往生するぞと觀知したる他力信心のことなり。又經の序分に章提の致請せし清淨業處と云ふは即ち本願の眞實報土なり。又教我正受と云へるは、即ち他力金剛の眞心を表せるなり。又彼が若佛滅後爲衆生故と云ひしは、末代の吾等凡夫の往生の道を顯はせるなり。又正宗分に章提が以佛力故見彼國土と云ふは、實に二尊一致の佛意を領したる相なれば、直ちに是れ如來の本願力を感謝したる語なり。此の如く見來れば觀經は隱義より云へば、大經と全く異なることなし。されば隱

顯とは一文兩義で、隱密と顯文との見方に依りて即ち自力他力の別を生ず。宛も一枚の錦の織物が表裏に依りて繪紋に別あるが如し。已に所釋の觀經が此の如しとすれば、隨つて之を釋する善導の疏にも、亦要門釋あり弘願釋あり必ずしも一準ならず。故に宗祖の着法眼を以つて、要門釋は之を化卷に、弘願釋は前五卷の眞實卷に引用し以つて自力他力の別を知らしむるが、廣文類の筆格の正しき所である。そのこと常の如し。前來觀經の隱顯の大概此の如し。

次に正しく彌陀經の隱顯を云へば、化卷自四十
九丁右に『准ニ知觀經ニ此經亦應レ有ニ顯彰隱密之義ニ等』とありて、隱顯の義は主として觀經に在れども、之に準知して亦此經にも隱顯が立つなり、其の相は顯說では釋迦は二十願を開說して阿彌陀經を演說す、即ち二十願の機は善本徳本の名號を以て、己が功德と執し自力の稱念を勵むもの故、經の顯文に約すれば一日七日と説く念佛は自力念佛なり。故に之を化卷自四十
九丁右に『言レ顯者經家嫌ニ貶ニ一切諸行少善ニ開ニ示善本徳本眞門ニ勵ニ自利一心ニ勸ニ難思往生ニ云云』と。これ行に就けば自力の稱念念佛の行、其安心に就けば至心廻向欲生の自利の一心にして他力の信に非らず。若し隱彰の邊より云ふ時は大經と同じく、眞實難信の金剛心を彰して第十八の願海に歸入して、即得往生の大益を得ることを示す。此れを化卷自四十
九丁右に『言レ彰者彰ニ眞實難信之法ニ斯乃光ニ闡不可思議願海ニ欲レ令レ歸ニ無碍大信心海ニ等』と云へり。要するに觀小二經の隱顯は先の如く、皆安心に

就いて立つたもの、その中觀經は三心釋の所より起り、小經は執持名號一心不亂の行者の機受にかゝる所に、此の隱顯が立つて即ち一文兩義の見様を爲すのなり。然るに先哲の云はるゝ如く、善導の玄義分の觀佛三昧は顯の宗、念佛三昧は隱の宗とすれば、一往は差支なきやうなれども、再往考ふるに觀經の現文に念佛が説いてあるに差支へ、又其の念佛を善導元祖は明かに弘願として見て居らるゝものを、或人の如きは故らに觀經の表には、念佛を説かぬと辨するは全く吾祖の隱顯と、善導元祖の廢立釋を混同したるものなり。若し一步譲りて念佛と觀佛とが果して隱顯と分るゝなれば、觀經の流通には要門定散が廢せられて、二尊一致に歸し弘願の念佛のみを阿難に附屬す、故に流通は弘願の法なり。其流通を廣說したるが此の阿彌陀經なりと云ふが元祖の御指南なり。已に流通分の弘願を廣說したる此の小經に、再び隱顯が立つて自力他力の沙汰ある筈なし。元と善導元祖は二行相對して、要門と弘願と分つて念佛と云へば、いつでも弘願と云はるれども、吾祖は更に安心の機受にかけ給ふから、法の上では觀經流通を廣說するが此の經ゆへ、弘願のみなれども能修の機が自力疑心の上より稱る稱名ゆへ、終に眞門に墮して眞の弘願に非らず。こゝを吾祖『教者頓而、根者漸機、行者專而心者間雜、』と化卷に仰せらるゝ所なり。換言せば所修の行法は念佛一行にして、善導元祖の弘願法なれども、能修の機が定散心に住して己が能稱の功を募る故自力となり、そこに隱顯が立つ故に吾祖は行者專而

心者間雜と云へり。されば隱顯は單に觀佛念佛の行の上に立つものでなく、安心の機に就く即ち自力他力の別なり。而し茲に於て觀小二經の隱顯の同異の點を知らざるべからず。化卷に此經は准ニ知觀經一此經亦應等とあるから、已に觀經の隱顯が三心釋の安心に就いて立つたものなれば、此の經の隱顯も亦安心の執持名號一心不亂の機受にかゝる所に立つことを知るべし。此點は二者共に同なり。さり乍ら彌陀經の隱顯は二十願の機が、諸善萬行をすて、名號の一法を修する相を説くのが、若一日七日等の文なれば、彼文の處丈けに隱顯が立つて其の前後の淨土の依正二報の莊嚴を説く文、并に六方諸佛證誠等の文には隱顯なし。觀經は之れに異り一經正宗分の全體に通じて立ち、彼經の正宗分は第十九願の機が、定散諸善を修する相を委説するのが顯文の當相なれば、彼れと此れとは隱顯の立つのに、全體と部分の差別ありと知るべし。

偕て前來長々廢立隱顯を辯じ來た次第である。此れを辯じたは今經宗體を定むるに、觀經の宗體を善導が念觀兩宗を立て、あるに准じて、此經の宗にも隱顯の兩宗を立つべしと思惟したが、抑も迷の始めであると先に申した。その所以は善導の兩宗を立てたのは隱顯の意から、此の兩宗が立つたに非らずして、要弘二門の行の差別を知らせん爲めなり。先に出す序題門に「娑婆化主因ニ其請ニ故即廣開ニ淨土之要門ニ安樂能人顯ニ彰別意弘願ニとありて、釋迦は要門の教主彌陀は弘願の教主となりて二尊二

教なりと、先づ要弘二門を標して此れを宗旨門に至りて、釋迦教要門は觀佛三昧を宗とし、又彌陀教弘願は念佛三昧を宗と爲す。觀經は題號が觀無量壽とありて觀佛が主で、傍に弘願の念佛を説いてある故に、觀佛三昧を先に出し、念佛三昧を後に出して亦念佛三昧爲宗と云ふ。此れを安樂集に比較すると、綽師の上では要弘奄舎で未だ要弘を決判し給はざる故、觀經の宗旨を判じて觀佛三昧の一宗として其中に念佛を含めてある。善導は二門を決判し、後流通分に至れば此の二に廢立をかけて上來雖說兩門之益等と要門を廢し、弘願念佛の一法を遐代に附屬す。何故なれば念佛は佛の本願なるがゆへなり。此を大經に望むると序分に念佛のことを眞實之利と説いて、正宗には具に彌陀本願を説いて、第十八願に念佛往生を示し若不生者不取正覺と云ひ、又流通には聖道諸教八萬四千の法門を、經道滅盡と説いて念佛の法門を獨留此經止住百歲と留む。これ即ち方便は先に滅し眞實は後に殘る道理、今觀經の要門定散の諸行は方便にして所廢のものなり。弘願念佛は眞實之利たる佛の本願なる故に、遐代に流布する所以なりと、觀經を以つて大經に望めて、二門の廢立勝劣を示すが善導元祖の思召なり。故に善導は望佛本願と云ひ、玄義分には觀佛念佛兩三昧を立て、要弘の別を示す。此の兩三昧を直ちに隱顯のことと思ふ勿れ。これ觀經は要弘二門を經の表に説いてある故、それを知らしむる爲めに一經の宗要を束ねて、觀佛念佛の二なりと表はす善導の釋なり。これを或説では此の兩三昧を直ちに吾

祖の隱顯と心得て觀佛は隱なり。念佛は隱の義と爲すから、後に差支を生じ觀經の上には、顯には念佛は説いてないなど云ふに至る。實に後學をして増々惑は令るなり。依レ之今觀經に兩宗の立て、あるは要門と弘願を表はすものと思ふべし。偕て宗は兩宗なれども體は一で、一心廻願往生淨土爲體となりてあるは云何と云ふに、要門は所廢となり撤廢されるもの故、たゞ弘願の行者は念佛を行じて、一心に往生を願求するなり。而し正宗の所では二者共に淨土を願求する故、往生淨土爲體の一となれり。然るに是れを隱顯に分けて隱の弘願、他力の人は報土の往生、要門の定散の人は方便化土、斯く眞化二土とし往生も各々差別あれども、二者共に一心に往生を願求するに於ては、同一故に宗は二なれども體は一で、一心廻願するなりと辨するが古來の説なり。これは恐く誤りなり。此の誤りを標準として彌陀經も准知隱顯であるから、やはり宗に二を立て顯には善本徳本の名號を宗として、隱には選擇本願を宗とすと爲し、體は一として一心に執持して、淨土に往生するを爲體と兩宗一體を立つるに至れり。此れも一往は至極尤ものやうに聞ゆれども、根本が善導玄義分の宗體を誤解して、それに準じて兩宗一體を立てたもの故に、やはり謬りと云はざるを得ず。元來先に屢々辯する如く、彌陀經は觀經流通を廣説したもので、已に要門は廢せられたれば彌陀經の上では、善導元祖には單念佛の一行を説くと見て兩宗は無き筈なり。然るに吾祖は行門の上でなくて、安心機受に就いて彼の弘願法

を自力の行人が、己が能稱の功を募るから眞門方便となれども法體に別異なし。故に教頓機漸とするが吾祖隱顯の見様なり。それであるから宗を兩宗とせずとも、一文兩義で一の宗の上に機の見様で、自力ともなり他力ともなると爲した方が至當なり。強て觀經疏の兩宗の如く二宗を立つべきでない。然らば如何なる宗とするぞと云ふに、謂く専ら名號を執持するを以て宗とし、一心に往生を願求するを體と爲すと云べし。此の一宗一體で事足るなり。此れは下の執持名號若一日七日一心不亂の文を基調として設けた宗體で、即ち下の彼文には一文兩義の隱顯が立つて、顯説の上から云へば執持名號一日七日は、眞門の機が佛の不可以少善根と諸善萬行では淨土へ參れぬ、念佛ばかりは多善根多福德なりと説き給ふを聞て、されば此念佛に依つて淨土に生ぜんとして、二十願の機が自力の稱念を勵む相を、若一日七日一心不亂と説いた文故に、顯から云へば即ち眞門方便の相なり。此れを化卷自四十
九丁右に言レ顯者經家嫌ニ貶一切諸行少善ニ開ニ示善本徳本眞門ニ勵ニ自利一心ニ勸ニ難思往生ニ等」と。又隱彰の實義から云へば他力弘願の行者が、難信金剛の信心を獲てその上より心に獲たる信が、等流相續して臨終まで變りなく、佛恩を念報する相が若一日七日の念佛なり。故に一心不亂は他力金剛の信、執心堅牢にして移轉せざるを執持と云ひ又一心とも説く、此れを化卷には「言レ彰者彰ニ眞實難信之法ニ光ニ闡不可思議願海……無碍大信心海」として其下に、善導法事讚の直爲弘誓等の文を引て、更に「經言ニ言

執持^{ヘリ}亦言^ニ一心^ニ執彰^ニ心堅牢而不^ニ移轉^ニ也持言名^ニ不散不失^ニ也』と釋して、執持と一心とを一所に組合して信心のこととしてあり。其信より等流する一日七日の稱名相續の行と見るが彰の義の方なり。又體に就いても顯に約すれば、二十願の機が自利の一心を策勵して、必らず往生せんと願求する其往生は、三往生の中難思往生胎生邊地方便化土なり。隱の義から云へば他力信心の行者は聞信一念のその時より臨終まで、をまかりなく助け給ふは彌陀一佛と、餘念なく思ふて心に變りなき故に、『一之言者名^ニ無^ニ二^ニ之言也、心之言者名^ニ眞實^ニ也、』と一心を釋せり。而して命終り次第眞實報土の往生を遂げて往生即成佛となる。是れを難思議往生と云ふ。應知。此の如く一宗一體にて事足れり。何んぞ玄義分の如き隱顯の意で無きものを隱顯と見做し、彼れに兩宗が立て、あるから、此經も隱顯を立る時には是非とも兩宗とせねばならぬと云ふ道理あらんや。思て可知。

問云前來の所辨に依りて、此經は觀經流通の廣説なることを聞く、而して彼の流通は唯弘願法なれば他力の法なり。然るに吾祖の准^ニ知觀經^ニして、此經に亦自力他力の隱顯釋を爲し給ふは云何。

答云先に云はずや吾祖の隱顯は行門の上に立つ要弘二門相對に非らず、衆生の機受即ち安心の上に立つ自力他力心の隱顯なりと云ふことを。故に善導元祖では念佛と云へば弘願の法なる故、觀經の流通で要門を廢し弘願の念佛を附屬したる故、彌陀經はそれを廣説した經なれば其れ已上に廢立はなけ

れども、吾祖は更に彼の弘願法を修する機が、若し第十八願の機なれば能説の佛意に相應して教も機も頓となり、念佛往生の弘願眞實を説き給ふと聞けども、若し聞手の衆生の機が第二十願のなを罪福信の行者なれば、此の經説を聞て諸行は劣り念佛は勝る、法ゆへに、此の念佛を修し勵て淨土に生ぜんと能稱の功を募る。此の機の前には眞門自力の念佛となるなり。此れが即ち經の顯説なり、故に機受にかゝる所の執持名號一心不亂等の文に隱顯が立つて、自力他力の別を生じ、所謂一文兩義となる、其義先に縷々辨するが如し。

問云前難未だ遮せず化卷に『言^レ顯者經家嫌^ニ貶^ニ一切諸行少善^ニ開^ニ示善本德本眞門^ニ勵^ニ自利一心^ニ勵^ニ難思往生^ニ』とあり。汝は衆生の機受の邊より眞門自力の念佛となると云へども開^ニ示善本德本眞門^ニ勵^ニ自利一心^ニとあるにあらずや、已に佛の説法即ち能被の教法の上に、自力念佛を獎勵すること明かなり。何ぞ衆生の機の上でのみ。自力他力の隱顯が立つと云ふことを得んや。

答云こゝが肝要の所なり。小經の上には念佛一法なる故、觀經の如く諸行も念佛もあり、又能修の機も第十九願の機と云ふ如きに非らず。經文の上は名號の一法で極單純なる故、直ちに經文を見れば隱顯のあり得るやうに見へねども、機受の安心が自力根性で弘願法の念佛を稱ふは自力となり、他力信心の上より稱名すれば他力なりと顯す爲めに、祖師は隱顯を立つ。觀經が已に自力の三心と他力の

三心とに依りて隱顯が分かるゝ如く、此の經亦觀經に准知して安心上より、隱顯を立てると云ふ祖意と知るべし。然るに此の經は觀經より來る故に機に熟と未熟とあり、聞說阿彌陀佛の間に能聞の機と不能聞の機との不同あり、能聞の機は佛意と相應す。不能聞の機は定散自力の餘執未だ止まざるが故に、諸行を捨て念佛一行となれども、自の能稱の功に依りて往生すと思へり。此れを機漸と云ふ。此の機の前に眞門の一教が成立するなり。然れども佛の説意は自力念佛や自利の一心を勵めと勧め給ふに非ざるなり、唯聞手の機の前に念佛を策勵し給ふ經と見るまでなり。然るに經文に若一日七日とあれば、いかにも自力策勵の如くに見ゆるのは、大經の説と異なりて、大經には平生の機に約して佛智信疑の得失を判然と明してあれども、此經には臨終に約し來迎を説き其の説相從容として一心不亂其人臨命終時等とあり。此等の文が二十願の不能聞の機より見る時は、開顯勸勵の説相にして即ち二十願を開示する顯說の相なり。然りと雖も佛の説意は能聞の機より之を見るときは、たゞ念佛往生の本願の利益を説くのみと知る。要するに經文の説相が機の能と不能とに依りて、其の所見を異にすれども、能說の佛は念佛の一法を説くのみ、故に佛より之を云へば正しく教は頓なり、たゞ機が漸なる爲めに眞門開示と聞くのなり。此れを吾祖は「良教者頓而根者漸機、行者專而心者間雜」と云へり。尙先の言、顯者經家等とある語に注意せねばならぬ。經家とは結集者のことで釋尊のことではない。此の經の眞

門開示や自利の一心を勵ますやうに見へるは、釋尊の説法にそれを爲されるに非らずして、結集者の仕業である。即ち一日七日の稱名の行相が、一心不亂なれば臨終に來迎があると經文にあるは、皆經家が此の如く結集せられたと云ふ祖意なり。然るに古來の學者は此の經家の語に留意せずして、釋尊自ら眞門を開示せらるゝと解してしまふから、下の化卷教頓機漸の所に至りて差支を生ず、これ經家の仕業なり。其の義を能く考ふべし。已上宗體に因みて教頓機漸のことまでに論及した。宗體は彌陀經は唯一宗一體として、觀經要弘二門に倣ふて、必ずしも兩宗を立つるに及ばぬと云ふ拙者の考なり。

入門 解釋

第一章 題 號 解 釋

○佛說阿彌陀經 玄談已に終りて已下正しく入文解釋するに初めに正しく經題を解すに、此の經の題號を下には、稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經と佛自ら經題を説き給ふ。今此所に阿彌陀經と言ふは結集者の置いた題號で經中に説いてある稱讚不可思議等の經題とは異つてゐる。而し玄奘譯の題號には稱讚淨土佛攝受經と具になつてゐるから、下の經中所説の經名と能く符合す。今此所に阿彌陀經と云ふ時は依報功德の伴を正報の佛の主に攝めて單に阿彌陀經と云ふ。此の一經の所説は具には彌陀淨土の依正二報の莊嚴と、又其の國に往生せんとする衆生の因果を説いて、不可以少善根福德因緣等と諸善を簡び去りて、執持名號の念佛一行を勸めてあり。而して其の名號の一法に因りて衆生必らず彼國に往生することを六方諸佛が證誠護念せり、其のことを下に一切諸佛所護念經と説く。而し此等を約めて見れば皆阿彌陀の一佛中に攝るゆへに羅什譯の此の經題には、單に阿彌陀經と稱す。

さて佛説とは此の佛は能説の釋迦佛のこと。説は善導玄義分^{三十}に「口音陳唱故名爲説」とありて、

佛自ら金口の音聲言説を以つて、説き陳べ給ふゆへ佛説と云ふ。是れに就き凡そ諸經の説法には種々ありて佛の自説あり。又佛が聖弟子をして代説令め給ふものもあり。其の他聖弟子に限らず、諸天龍鬼神等に加被して説法令むることあり。其の場合に佛意に契ふ時は則ち佛如是々と印可し給ふ。其の佛の印可を受けた説法なれば假令佛の自説でなくとも佛説と等しき故、其の經を佛説何々經と稱するが凡てのお經なり。但し其の中でも特に大切なことを説き給ふ時は、代説でなく必らず佛自ら宣説し給ふと云ふが、常の例なり。故に淨影大經疏上^{三丁}に「起説不同凡有五種一如龍樹説（智論二初）、一佛自説、二聖賢説、三諸天説、四神仙説、五變化人説、此經^{大經}佛説爲簡餘四是故學佛」とありて、淨土の大無量壽經は特に佛の直説にして、決して餘の聖賢等の説でない^{と云ふ事}を表して、佛説と置いたと釋せり。又善導玄義分^{六丁}にも、辨説人差別と云ふ一科を立て、凡諸經起説不^過五種（中略）今此觀經是佛自説と云ふてある。吾祖此の説人差別の科を相承して、化卷本に爾者四種所説不足信用^{斯三經者則大聖自説也}と仰せられて、淨土の三部經は釋迦佛出世の本懷彌陀大悲の至極を顯し、像末の惡衆生を平等に救濟する大切の法門なれば、大聖の自説にして毫も他人の代説を許さず、了義中の眞實なる故仰いで信受せよと知らしむる彼の化卷の御釋なり。然るに近來一部の佛敎研究者は大乗非佛説を唱へ、小乘を以つて唯一の佛説と信じ之れを原始佛敎と名けて、四阿含

の如きは佛の自説根根本の佛なれども、其他の大乗經は皆多く後世の發達に過ぎざるもので、少くとも佛滅四五世紀已後に漸々發展して出來きたものなり。故に馬鳴、龍樹已後益々大乗經の完成するに至つたものであると云ふことを公言す。此の説青年の歡迎する所となり、天下滔々として其の説に雷同して殆んど今日では、大乘非佛説論は定説の如く或る一部の者は信じて居る。吾人未だ俄に此の説に賛同するを得ざるものなり。何故なれば其の非佛説とする理由と、大乘を佛説とする理由とを篤くと考へ、之を並べ擧げて先年淨土論を講ずる際其講録に載せ置けり。讀者一讀の上其の批評あらん事を望む。要するに大乘非佛説論は今に起るに非らず。已に印度に於て佛滅二百年頃より存在する問題にして、小乗教徒の大乗を排斥する口術なり。今日此の説の起るは多くは主觀論で大乘經に説く如き佛は吾等は信ぜられぬ。やはり釋迦は人間の一分で小乗教徒の見たる所謂八十の老比丘でありて、佛と加葉と共に解脱の床に座すると云ふ佛に過ぎずして、大乘に説く法報應の三身融即の佛ぢやの、或は尊特報身とか慮舍那身の佛と云ふが如きは毫も信するに足らず。是等の大乘經に説く佛は皆理想を人格化して佛陀としたもので、眞の釋迦佛に斯の如き無碍自在の佛身ある筈なしと斷定し、自己の最も腦裡に入り易き小乗の佛即ち八十老比丘、通常の人間としての佛陀を認むるのみにして、決して大乘で云ふ地上菩薩所見の佛や及等覺の大菩薩文殊、普賢、彌勒等の菩薩迄を皆假想的理想的のもの

として、此の様な佛菩薩は現實界に存在するものでないと云ふ自己の主觀から大乘非佛説を説き起して來てをる。そこで今日の青年佛敎者の腦裡には之れが能く分り易く、亦合點の能く往く所であるから、此の説が非常に歡迎せらる。之れに反して大乘佛説論を唱ふるものは、舊式的の時代後れの論であると思つて、善導、法然、親鸞、等は大乘非佛説の新研究を知らなんだ愚昧の徒であるとまで論斷する者がある。此の論法より云ふ時は支那日本の善導法然等の古徳が、非佛説を知らなんだ計りに非らず、印度に生れた馬鳴、龍樹、無着世親等の諸菩薩までが、小乗教徒の非佛説を降伏して大乘佛説を主張した彼の菩薩も愚昧にも、大乘の非佛説を察知し得なんだと云ふことになる。印度の地に産し、而も佛滅年代を去る尙末だ五六百年、若しくは七八百年代に出世したる彼の菩薩の主張を信ぜずして、佛滅遙に距る事殆んど三千年而も日本或は西洋に生れたる異域の人が、偶々土中發掘の金石文字や又小乗敎團の史料に依りて研究したる非佛説論を確信するは主觀的に考へたものなり。年代も古く又土地も印度に生れた彼の龍樹、無着、世親の佛説論を取らざるは、吾人より云はしむれば本末を顛倒し、佛敎々理を未だ知らざるものゝ考なりと思ふ。大乘非佛説論は自己の主觀的に、大乘經に説かれてある如き佛は神話的、假想的、或は理想を人格化したものと云ふ考より出發して、其の上に種々の小乗敎團の材料を集拾し來り、以て論斷を下したるものなれば、吾人等の見解とは立脚地を異にす

る譯である。此等の委細の理由又事實の上より論證すること等は、予が淨土論の録を見られたし。

次に阿彌陀とは梵語此に無量壽、無量光、と云ふ。即ち下の彌陀の名義を説く文に光明無量……

是故號爲阿彌陀と、又壽命無量故名阿彌陀とあり。是に依て支那釋家多く阿彌陀の梵語を無量壽、

無量光と譯出せり。近く天台の彌陀經疏^初に「阿彌陀者天竺梵音、震旦譯言爲無量壽、化主極以立嘉

名」とあり。嘉祥大經疏^初に「號曰阿彌陀、此土無量壽」と云ひ、又慈恩阿彌陀經疏上^左には「問何故

名阿彌陀、答爲含二義、名阿彌陀、一無量光明故、二無量壽命故名阿彌陀」と云云。同通讚上^初には

「阿彌陀者唐言無量壽等」とあり。智旭要解^二「阿彌陀此云無量壽、亦云無量光」と、又性澄句

解^初には「阿彌陀翻無量壽」と云へり。又大惠の已訣^初には無量壽無量光の二義を擧ぐ。然るに元照

疏上^{二右}には「阿彌陀此翻無量」として無量壽とも光ともなし。此れは如何なる譯ぞと云ふに、實は

單に阿彌陀と云ふ時は無量と云ふが當り前なり。然るに陀の音を長く引いて阿彌陀由沙と云ふ時は無

量壽となり。阿彌陀婆耶と云ふ時は無量光となる故に、古來の譯家阿彌陀の梵語を無量壽無量光と翻

せり。されば陀の字梵音の長引の所に自ら壽と光との二義を具すると見へたり。故に之を惠心の略記

十四^右に「於阿彌陀、一梵語中、含無量光無量壽義、(中略)此之二義顯橫堅益、無量光者顯橫利物、徧照

十方攝衆生、故無量壽者顯堅利物、經無數劫、利衆生、故二利常圓、故得此名」と釋せり。これは

至極妥當の釋と思ふから繁を厭はず、此所に全文を引いて阿彌陀の梵語には、光壽二無量の義を具す

ると云ふこと下の名義釋に對照して知るべきなり。應^レ知。然るに茲に簡び置くべきは、華嚴音義三

三^丁に「阿彌陀佛正云阿彌陀婆耶、此云無量壽」とあり。此は婆耶の時は無量光となる筈、之れは無

量壽と譯する時は阿彌陀由沙でなければならん。然れば此れは後世筆者が誤りて婆耶を無量壽とした

ものなりと云ふ先輩の説なり。予は梵語を解せず、當時は梵學者も澤山あれば其の道の人に尋ねて研

究せられたし。今はたゞ古來の説を傳承するのみ。

問云大觀二經には無量壽經と漢語を用ひ、此の經に限りて梵名を存じて阿彌陀經と云ふは如何なる

義ぞや。

答云堯慧私集鈔に此れを問答してあり。其の答の意は此の經中に彌陀の名義を説くに光壽二無量の

義あり、若し或は單に無量壽と譯せば、則ち光明の義を忘失する故今梵語を存して則ち二義を全ふす

る爲なりと云へり。此の釋可なり。宜しく之に隨ふべし。

問若し然らば大觀二經の題號に何故梵語を存せざるや。

答若し梵語を存して永く譯せざれば何を以て義を解し信を生ぜしめんや。且亦二經は廣說なり。是

ば觀經の文中に稱南無阿彌陀佛と云ふて、此れを譯して稱無量壽佛と云はざるが如し。要するに梵語は多含にして而かも讀誦受持に便なる故に梵語の儘にて置題したものと云ふが私集鈔の説なり。此の阿彌陀の三字を上佛説に相望すれば、佛は能説なり、説阿彌陀は所説の法なり。故に玄義分右^{四丁}に觀無量壽經の題號を釋して、『今言無量壽者法、覺(佛字釋)者是人人法並彰故名阿彌陀佛』とあり、今亦然り。阿彌陀は實に極樂の化主で人なれども、今釋尊が此の經中に彼の佛の依正二報の莊嚴功德を説きて、衆生に聞信せしめん爲めの説法なれば、其の時には所説の法になる。其義可知。故に七種立題の中では人法立題、或は唯人の立題とも云はる、即ち阿彌陀は人なる故に。應^レ知。

次に姚秦三藏法師鳩摩羅什奉^レ詔譯、二譯人の名なり。姚秦とは六朝時代の東晋の時、苻堅なる者關中に都を構へて大秦の皇帝と稱した。其の後姚萇謀を以つて苻堅を亡し、自ら帝と稱して國を同じく秦と稱す、之れを後秦とも又姚氏の秦ゆへに姚秦とも云ふ。羅什は此の姚秦の世姚萇の次の姚興の弘始三年に支那に來朝し、其の翌弘始四年二月八日に此の阿彌陀經を譯し終つたこと開元錄四ノ上^{四丁}に出てある。今年昭和七年より數へて一千五百三十一年前のことなり。羅什の傳は梁高僧傳第二卷の初めに出で、『鳩摩羅什此什云童壽一天竺人也』とあれ共、實は西域地方の龜茲國の産である。羅什の秦關に入るを聞て秦主姚興は、之れを國師の禮を以つて迎へ、逍遙國に請入して衆經を譯せしむ。

彼れの一代に譯出する經論三百餘卷なり、終に弘始十一年八月二十日長安に卒す。即ち東晋安帝義熙五年、日本反正天皇の即位四年に當る。然るに什の没年傳記異説あり、或は弘始七年説或は八年説あり、共に高僧に出づ。次に三藏とは經律論の三藏を通達したる人に非らずんば、經論の翻譯は出來ぬから、所譯の法を譯出する人に隨へて、譯者のことを凡て三藏と云ふ。即ち六合釋の作法では之れを全取他名の有財釋と云ふ。猶し花を賣る人を直ちに呼んで花と云へば、はいと答をするが如し。次に奉詔とは天子の上命を詔と云ふ、此の經は秦主姚興の上命を奉じて譯せしゆへなり。譯は易也と註して、彼の梵土の語を支那語に移し易へて唐土の人に了解せしむる様にするを翻譯と云ふ。凡て外國の語を自國の語に易へ移すを譯すると云ふこと常の如し。

第二章 如是我聞等の文字が諸經の始に在る所以

○如是我聞等と本文大分で三分とす。其中第一序分に六、初に所聞法、此れは如是の二字なり。次の我聞とは、一能持人を云ふ。此の如是我聞等の句は證信序と稱して、諸經の初めに必らず安置してあり。證信序とは可信を證誠する序と云ふ意にして、阿難が佛に従つて親しく如是の法を聞いたから、他の傳説や展轉して聞いたのでなく、正しく佛に従ひて、親しく聞いた法ゆへに間違なし、衆人

宜しく之れを信すべしと證誠する爲めに、諸經の初めに如是我聞等の句が置いてある。而して此の如是我聞等の句を天親の法華論^三等には六成就としてある。其の六成就とは、一信成就今擧げた如是の二字なり、二聞成就此れは我聞の二字、三時成就一時の二字なり、四主成、就此れは佛の一字を云ふ、五處成就、即ち在舍衛國祇樹給孤獨園の句になる、六衆成就此れは與大比丘衆千二百五十人俱の句なり。天親菩薩法華經の如是我聞等の句を此の如く六成就として釋し、此の六が成就具足して始めて佛の說法が起ることを釋せられた。それ已來、諸經に皆此の文ある故其の六成就に當て、解釋することなり。

それに就き諸經の初めに如是我聞等の六成就が有る所以は、諸說ある中。・第一に智論第二卷^左・二に佛敎へて安立せしむと云ふ說。即ち佛が雙林に北首して臥し、將に涅槃に入らんとし給ふに阿難は一代の間、佛の侍者を勤め特に佛の親屬のものゆへに心憂に堪へずして、何の事を請問することも知らざりしが、阿泥盧豆が阿難に注意して曰く、世尊今日在りと雖へども明日は既になし、汝須らく未來の要事を問決すべし、何に因りてか世の愚人に同じて如是悶絕するやと。阿難即ち起ちて問云、我今何の事を請問することを知らずと。其の時に阿泥盧豆、敎へて云、要事に四あり。一に問へ如來在世には親しく自ら說法し、人皆信受す、如來滅後には一切經の初めに當に何の言を置くべしと。二に問

へ如來在世には諸の比丘、佛を以つて師と爲す、如來滅後には何を以つて爲^レ師と。三に問へ佛在世の時諸の比丘佛に依つて住す、滅後には誰に依りてか住せんと。四に問へ如來の在世には惡性の車匿を佛自ら之れを治す、佛滅後には云何が共住せんと。阿難は敎の如く此の四事を佛に請問す。世尊答云く、一に經の首めには常に如是等の六句を置くべし。二に諸の比丘は皆婆羅提木^{此に滅と譯す即戒の事なり}を以つて師と爲すべし。三に皆四念處^{身受}に依つて止住せよ。四に惡性の比丘をば梵檀^{此に默摺と翻す}を以つて治せよと云へり。此れに依れば此の六句は佛自ら敎へて安立せしむるものなり。大悲經第五^九も粗々之に同じ。・第二に爲^レ斷疑^二故此の六句を安すと云ふ說。此れは探玄記^三二左、法華玄讚^一八十眞諦三藏の說を引て辨じてある。其れは阿難が高座に昇つて法藏を結集する時に當りて其の身、佛の如く相好を具す。若し座を下る時は還つて本形に復す、衆此の瑞を見てまた三の疑を生ず。一に佛は涅槃より再び起つて更に說法し給ふ歟と。二に疑ふらく佛他地方より來る歟。三に阿難身を轉じて成佛する歟と。今此の三疑を除ん爲めに六句を安す。是の故に阿難自ら如是之法我れ佛に従ふて聞く、明かに知ぬ是れ佛重ねて起つて説くに非らず亦他方の佛來るにも非らず、又阿難の自身成佛するにも非らずと示す文なり。・第三には爲^レ未來生信^二故に一切經の初めに此の語を置くと云ふ義、此れは智論三^二の說なり。・第四離^レ增減過^二故に此れは佛地論^一左^三に^レ知^レ應說^二此如是我聞意^三避^レ增減異分過^二失^二

云云とあり。此れは法を結集する時佛教を傳ふる者如來の遺勅に依つて此の言を置き末代の衆生に一句一語皆如_レ是の法我佛より聞いたものなりとして、文義決定して増減する所なしと示す。第五に爲_レ息_ニ諸諍論_ニ故に若し自身の制作せば、甲乙の諍論も起れども今佛より如_レ是法を聞くと云ふ時は、此の憂なし、此れは智論一_{二十}の意なり。第六に外道に異するが故に、外道の書は龍馬が河中より出でて顯れた文字とか又青雀がふくみ來る等の奇怪なことを云ふけれども、今は如是我聞等と具に委曲を顯して、法の謬に非ざることを明し、人をして信受せしむる爲めに此の六句を安立すると云ふ。

偕て如是とは、智論一_{十九}に『佛法大海信以爲_ニ能入_ニ智爲_ニ能度_ニ如是即是信也等』と。又註維摩一_五丁に『如是信順辭、夫信則所_レ言之理順、々則師資之道成、經無_ニ豐約_ニ非_レ信不_レ傳、故建言_ニ如是』とあり。化卷九_{四十}左に『經始稱_ニ如是_ニ如是_ニ義則善信相也』とあるは、佛説を深く信する相を如是と云ふ。而し此の二字を離釋する時は、元照疏上_{三十五}左に如は云く法を指すの辭、即ち正宗所説の法門を指す、此の法は理に契ふ故に如と云ひ、非を離るゝを是と曰ふと釋せり。此れ阿難が能く佛語を信じ、彌陀の本願に間違なしと信する相、其の信じた所が直ぐに末代衆生に信を勧むることゝなる。如是と所聞の法を出して是れに間違なき故に之を信ぜよと人に勧むる自信教人信の語なり。此れを化卷に『三經大綱雖_レ有_ニ顯彰隱密之義_ニ彰_ニ信心_ニ爲_ニ能入_レ故經始稱_ニ如是_ニ』と云へり。○我聞とは、二能持人な

り。阿難自身が我れ聞くと云ふ文なり。御延書の點にきゝ玉へとあり、此れは覺師の御點と承る。日本_の古雅の言使には我自身の事をたまへと云ふことありと、源氏等の例を引いて香月院は辨ぜられたれば彼れを披可_レ見。又我とは佛法に我を扱ふに四種ありて、一に眞我、即ち涅槃四徳の中の我れ是なり。二に自在我、此れも實は八自在我と稱して佛の後得智を體とする我なり。三に假我、五蘊の假者を我と云ふ。四に執我、此れは凡夫外道の執見を以つて我ありと思ふ妄我なり。今阿難が我と云ふは假我にして世俗に順じて、自身を指す時に用ふる語なり。

問何故阿難の名を云はずして我と云ふや。

答同名に濫する恐れある故に、已に我と云へば決定して自身に屬し、阿難が佛に親聞した相が顯著なる故名を云はずして、却つて我と云ふ。

第二章 指方立相

○爾時佛告長老舍利弗、大門第二正宗分二、初讚_ニ極樂依正_ニ二、初略讚_ニ依正_ニ三、初標_ニ告勅_ニ○爾時とは前の聲聞菩薩人天が、聞法の爲めに來集した其の時が此の經を説き初め給ふ時なり。此れを爾時と云ふ。故に法華文句三ノ一_初丁に『爾時指_ニ事之末後時始_ニ』とあり。今は即ち無問自説して極樂の依正、

念佛往生の法を説かんとする時を云ふなり。然るに此の爾時等の九字は結集者の置く語なりと知れ。○佛告長老舍利弗とは、茲に何故に佛は菩薩に告げずして二乗の舍利弗に告ぐるかと云ふに、天台義記^{四丁}に「告聲聞者適化無方欲令凡夫小乘厭此欣彼也」とあり。又私集鈔上^{十八}に永觀の説を引て、「釋云小乘之人不許有他方佛今嘆陳之是故告之」とあり。又慈恩、元照、雲栖、各々説を立つれども皆當らず、今云寧ろ先の永觀の説を可とす。舍利弗は智慧第一の弟子なれども、小乗の根性なれば動もすれば他方の佛土あることを知らず許さず、然るに今佛鶴林涅槃に及んで所有る五乗の機類の中別して凡小をして彌陀の淨土に歸せしめん爲めに、特に舍利弗の二乗を呼びかけ、末代衆生の總名代とし給ふ。其の舍利弗は智慧第一なるゆへ、他の聖道の名高き二乗開會の法華經の對告衆となり、彼の會座では自分の智慧を振り回して、自ら佛に請問する等のことあり。然るに此の經では屢々佛が呼懸け給ひ、於汝意云何とまで佛が問ひ立て給ふても、更に一言半句も自の考を叙へず、たと仰いて佛語を聽聞する所が即ち末代凡夫の代表となりて、愚痴に還つて佛語を信する相なり。佛先きの大經説法の時は彌勒を對告衆として説き給ふやうは、汝は展轉五道憂畏勤苦と等覺の大士を以つて具縛の凡夫に同ぜしめ、今は智慧第一の舍利弗を末代凡夫の總名代とし給ふ故に、智慧第一の彼れも愚者にかへりて、一辭をも叙へず、唯々として聽聞する所が即ち淨土教の特徴自力無功を表す所なり。元祖の所謂「聖道門ノ修行ハ智慧ヲ極テ生死ヲ離レ、淨土門ノ修行ハ愚痴ニカヘリテ極樂ニ生ル」と（和語燈五^{二十}右）の給ふ所と知るべし。○從是西方等、二標ニ依報ニ已下依正二報の莊嚴を説くに先づ依報を標示し、從是等と云ふ。大經は正報を先に説き觀小二經は依報を先にす。これは云何と云ふに、大經は彌陀の因源果海を説く經ゆへに、法藏菩薩の修因に依りて果上の彌陀となり、西方の淨土を建立することを説くゆへ、自ら正報を先とし依報は後になる。又觀經は衆生に觀法を勧める機の修入の相を本として説く經故に、日想水想等の假觀から次第に極樂の實地寶樓と進んで、觀法の修し易き依報より先に説いて、後に正報に移る。今此の經は彌陀の淨土を讚じて衆生に欣求の心を生せしめん爲めの故に、先依報を説て捨此往彼の往生思想を喚起令ん爲めに從是西方と云ふ。

偕て此所に於て指方立相と云ふ論目を立て、淨土教は聖道門の此土入聖得果の教と異ると云ふことを知らねばならん。指方立相の名目の初めは善導定善義^{二十}に「今觀觀門等、唯指方立相住心而取境、總不明無相離念也」等とありて聖道門の觀法は無相離念を尊ひて理觀を主とすれども、淨土門は眞如の空理を證し無念無想の境に達せんと云ふが如きは、とても末代凡夫の出來き得る事でない故に、衆生に觀法を凝らせと勸むるにも西方極樂と云ふ方を定め、有相有方の所觀の境を建立して觀法を修せしむと云ふ疏文の意なり。故に觀經に「繫念一處想於西方」と云ひ又「正坐西向」と説けり。今

彌陀の淨土は西方に在りと云ふことは、已に大經に「法藏菩薩今已成佛現在西方去此十萬億刹」とあり、今此の文にも從是西方過十萬億佛土とある。此の西方の彌陀の佛土に向つて往生せんと、欣淨の思をなすを指方立相と云ふ。依_レ之若し吾人の意識主觀を離れて西方の淨土もなく、彌陀佛もなしと云ふならば是れは淨土門の人に非らず、たとひ聖道門の淨影天台等の自性唯心を云ふ人でも決して心外に西方に彌陀の淨土あることを否定して居ない、故に天台大師は臨終に法華經を右の手に取り左に觀無量壽經を持して、「四十八願莊嚴の淨土華池寶樹森然易_レ住無_レ人」と稱嘆せられた。然るに近來は動もすると西方淨土を否定し、自己の主觀已外に淨土を認めないなどと云ふ者の如きは聖淨二門の網格も知らず、聖道の自性唯心も如實に知らざるもの、云ふことなり。淨土門は飽まで有相有方の事を主とする宗にして、若し地上の菩薩となりて無漏の觀智が生じ、一分眞如の理を證り、神通自在の境界となれば敢て西方の一所に念を懸け、有相の淨土を願ふ要はなくても、吾人凡夫は元とより智慧淺短にして心常に散亂し移り易く寂定ならざる故、心を一境に止めて意を西方に向はしめざれば、何れの時にか出離得脱の期あらん。故に彌陀は西方に淨土を構へて、衆生をして一心專注せしめて、欣求淨土を勸むる所以なり。されば指方立相は淨土教成立の根本問題である。指は即指示の義、方は方角なり、立は成立義、相は形相のこと、即ち聖道の空無相の理に對して西方と云ふ。有相の事たる方所

方角を指示し、又七寶莊嚴金銀瑠璃等の形相ある二十九種の歷然たる有形有相の淨土を説示し、以つて之に向つて欣求の心を起さしむるのが指方立相と云ふ、即ち往生淨土の思想なり。故に釋尊が此所に舍利弗を末代衆生の總名代として從_レ是西方等と告げ給へり。

問云三經の所説皆指方立相が淨土門の網格なること一往命を聞く、然るに法性は無相無邊なれば法界亦無邊なり。故に大經に恢廓廣大等と説き論には究竟如虛空と説く、何んぞ今特に方所を指すや。

答云法界一相無邊如虛空と達觀した上より眺むる時は、西方に即して恢廓廣大なり究竟如虛空なり。さり乍ら未だ此の境地に達せざる凡夫の地位に於ては、常に我他彼此の見に住して、どこまでも無邊如虛空法界一相とならず、故に佛凡夫の吾等に對して娑婆を厭ふて、彼の淨土を欣へと教へ給ふ、此の時は佛必らず立相して西方と示指して從是西方との給ふ。若し淨土へ往生し處無之身無極の體となり、法界平等の境に達した上よりは、究竟如虛空廣大無邊際の淨土と云はるる故に此の二は不二にして二なりと、古來より稱して邊即無邊、々々即邊と釋し來る事なり。今少しく此れを辯すれば華嚴探玄記三_{十九}右に「華嚴經三_三右」に「蓮華藏莊嚴世界海東_次有_三世界海_二」と説く文を釋して問を立て、此華藏世界は無の邊なり、云何ぞ此中に東方等有らん耶と、それを答へて華藏界は是れ邊と無邊と不二なるを以ての故に、邊と名く、又無邊と邊と不二の故に有邊と名く」とあり。此の文に邊とは吾人の迷情

の見なり。無邊と云ふは悟情の智見なり。故に迷情の吾人より見れば何を見ても差別となりて、東西南北の邊の方處が歴然と立つ、若し悟情聖智の見から云へば十方佛國皆嚴淨にして無邊なり。斯の如く邊と無邊の別は畢竟迷と悟との差別によりて二の如くなれども、其の實は一體なり。故に佛智見の上よりは安養淨土は恢廓廣大不可限極の無邊際の妙淨土なれども、吾人凡夫の知見は未だ之に達すること能はざる故、此の穢土に在りて常に憂喜苦樂種々の差別に墮して、未だ平等法界の無邊を知らず、故に佛は邊の方面より從是西方と説きて以つて、遂に無邊に入らしむ故に此の方面の邊を説くから、無邊を妨ぐる譯でない。邊即無邊々々即邊でありて互に相碍へず。喩へば天體の虚空は無限無際なり、其の無限無際なれば東西南北の方位を立てる要なけれども、吾人に星の位置所在を知らしめるには、是非に方を云はねばならぬ故に金星は西方に現はれ、化斗星は北に在ると云ふが如し。此の方位を立てたとても天體の無限無際を妨ぐるに非らず、無限無際にして東西南北の方位を示す如く今も亦然り、悟の究竟如空の無邊に即して、迷情の前には必らず西方の方面を示す、二者互に即して相妨げず。依レ之探玄記の結文に是則邊を壞せずして恒に無邊なり。無邊を破せずして恒に邊なり、若し無邊の邊に乖き、邊の無邊に乖くと謂ふならば、是れ情計の法にして正緣起に非るなりと云へり。要するに第一義諦(悟情の境)に由る時は邊即無邊にして四方四維は不可得なり。世俗諦に(迷情)隨ふ時は

無邊に即して邊の東西等の方所あり。邊と云ひ無邊と云ひ共に妄情の計度を離れて見れば、邊と無邊と不二なるなり。然るに注意せねばならぬのは、佛は無邊の所に邊を示して衆生を化し給ひ、衆生は其の化を受けて邊より無邊に入るが故に、邊と無邊とは全く無二なれども吾人に指示する時は、邊の方より説かねばならん。今も釋尊衆生攝化の爲めに此經を説きて欣淨厭穢の心を生ぜしむる所ゆへ方處を指示し從是西方等と説き給ふ。

問云若し然らば、單に西方と云はずとも南方でも北方でも宜し、何んぞ偏に西方と指すや。

答高僧和讃に「世俗君子降臨シ、勅シテ淨土ノユヘヲトフ、十方佛國土淨土ナリ、ナニ、ヨリテカ西ニアル」と。此の問に對して鸞師は「吾身ハ智慧アサクシテ、未ダ地位ニイラザレバ、念力ヒトシクオヨバレズ」と對へてあり。此の和讃の意は約まり心を歸一せしめん爲なり。其の歸一せしむるに餘方を云はずして單に西方淨土と云ふは彌陀に深重の誓願ありて此土の衆生に特に因緣深きが故に偏に西方を勸むる所以なり。此等の事の委細は予先年淨土論講説の時に述べて、置いたから、今は略レ之。尙從是の是は義要上末右^{二丁}に三義あり。一には娑婆三千界を指すとし。二に是とは聖道の此土入聖に對して、淨土を指示する故是は聖道修行を云ふ。三に九方を捨て、西方を取らんが爲めに從是と云ふ義なり。此の中第一義の此の娑婆界より西方を指示して從是と云文なること、大經の去此十万億利名

曰安樂の文に依りて明なり、應レ知。

問若し然らば方所を説くは、迷情の衆生に對する時の説なれば假説なりや。

答云吾人が迷倒の凡夫である限りは決して假説に非らず實説なり。若し安養に至り涅槃の境界に至れば生即無生にして、見生の火自ら滅するの釋思合して知るべし。次に○過十萬億佛土と此の淨土の近遠を論ずるに經論異説あり。易行院師の講録に大經の五存經と此の經の新舊兩譯并に其他の經を合せて十部の經に、彌陀の淨土距離其の數量を説く文異説あることを列舉して此れを束ねて四種として一に大經と此經と如來會と稱揚佛功德經と如幻三昧經との五部の經には十萬億佛土と説てある。二に稱讚淨土經と大莊嚴經の二經は百千俱胝那由他の佛土と説いてあり。三に平等覺經大阿彌陀經の二經は、千億萬の須彌山佛國と説いてある。四に觀音授記經に億百千刹と説けりと。四説を並べて後に一々此の相違を會して丁寧^ニ辯じてあれば、彼の録を見られよ、今は彼れに譲りて略^レ之。但し稱讚淨土經に百千俱胝とあるは即ち億の梵語なり。那由他は千萬億を那由他と名く。然るに百千俱胝として、又更に那由他とあるはたゞ數の多いと云ふことを表はすに過ぎず、強ちに千萬億と限りたことでない^ニと彼師は云はれたから、兎に角今は其説に隨ふ。そうすると宛も百千俱胝が、即ち十萬億のこととなり、故に二經が語の上では別なれど意は全く同なり。即ち千を十合すれば一萬となる。又千を百集むれば

十萬の數となる。故に十萬億のことを百千億と云ふ。億の梵語を俱胝と云ふから、新譯の淨讚淨土經や莊嚴經には『過^ニ百千俱胝那由多佛土』と説いてあり。又其他の經に數量の違ふ様に説いてあるは、天竺には億の數を云ふに四通りありて、一に十萬を一億とする説、二に百萬を一億とする説、三に千萬を一億とする説、四に萬々を一億とする説。此の事探玄記第四卷^{二十九}に出づ。今此經に十萬億佛土と云ふ、億は即ち第三の千萬一億とする説で云ふなり。其證は千萬一億の梵語は俱胝と云ふ。十萬一億の億の梵語は羅俱舍と云ふ。此事俱舍論等に出で、ある。今此經の億は千萬一億の億なるゆへ、唐譯の經に俱胝となりてある。又大阿彌陀經や平等覺經の億は、第一の十萬一億の説であるから、彼經には千億萬の佛土を過ぎてとなれり、此の十萬一億の説なれば、千億萬の佛土を過ぎてと云はねばならん。されば此の十萬億の數と同等になり得る、此の如く億の位の多少に依りて經説に數量を説くのが種々違ふと雖も、よく會して見れば約まり、此經の十萬億(千萬を億とする説で)と云ふことになると易行院は講説せられた、委くは彼録を見よ。要するに此の娑婆界より西方に當り、十萬億の佛土を過ぎ去りた距離の所に、極樂と云ふ彌陀の淨土が確に存在すると云ふことを指示した語と解すれば大差なし。

偕てそれに就いて一佛土の廣狹は何程なりやと云ふに、凡そ此れに古來二説あり。一に大經義寂疏

(今は不傳)の說。此れは大經望西疏五^{十八}に引いてあり、其說では一佛土と云ふは須彌山を中心とし、四洲があり、それを繞る大海があり、其の大海を又鐵圍山が取巻てあるのが一須彌世界なり。其の一須彌山世界を千萬億隔て、西方の其の向に極樂があると云ふが義寂の說なり。此れを證據立てるに平等覺經上^{十三}、大阿彌陀經上^{十三}、正在^三西方^去、是閻浮提千億萬須彌山佛國とある文を以つてせり。(千億萬は十萬億と同じと云ふこと先の辨の如し)此說に伴ふは、飛錫の念佛三昧寶王論中^{二十四}にし、彼極樂之國、彌陀至尊^十、十萬億之須彌山王不^下與^三眼根^爲障^礙とあり。二に觀經妙宗鈔三^{三十}に、極樂去^レ此十萬億刹等とあり、此の十萬億の佛土と云ふは、即ち三千大千世界のことなりと云ふ。是れは宗曉の樂邦文類遺稿上^{二十}に、「三千大千世界即釋迦佛一化之境(中略)若是阿彌陀佛西方淨土出在^三大千世界外^{復過}十萬億佛刹」とあり。(一佛の化境を三千大千世界と云ふことは、大小乘の通說である)されば一須彌世界と大千世界と大違ひなり、故には二義別なりと見て辨ぜられたが、香月院なり。今云是れ恐くは不^レ然前說の一須彌世界も三千大千世界も同じことでなければならん。其の故は一須彌世界と云ふは須彌山を中心として、須彌の四洲や九山八海等がありて其の上に六慾梵天四禪四無色と、天界がありて三界の果報上下歷然と分る、ことを一須彌世界と稱したに違ひなけれと、其實は形に就いて一佛の化境を云ひ表すものにして、即ち三千大千世界のことなり。三千大千世界には百

億の四天下、百億の日月、百億の須彌山がありて、應身の佛は此れを所領とし即ち此の範圍を化境として、衆生を教化し給ふと云ふが、百億三千大千世界と云ふことなり。依^レ之此の時は、百億即ち三千大千世界のことなり。其の證は五教章冠註下^四、^{五十四}に佛攝化の分齊を明す下に「若小乘中唯此娑婆雜穢處(中略)所依百億等是化境分齊」とある此の文を、復古記が註釋して「百億即三千大千世界、皆是攝化境界也」と云ひ、又凝然の通路記にも「愚法小乘教一切世界皆須彌山建立之處無^三別淨土^二此三千界他三千界、森^三連^二八方^一無^レ有^三滉際^二皆是穢土、百億須彌、百億日月等建立安布」云云。されば一佛土を一須彌山界と云ふは即ち一佛化境のことにして、即ち三千大千世界と異なることなし。然るに有人は前の須彌山界と云ふは狭く、三千大千世界は其れを百億集めた世界ゆへ大變廣ひと思ふたのは、これ言に泥みて意を失したので、一須彌世界と云ふが即ち娑婆三千界のことなり。故に前說後說其の云方は違へども共に其の實は三千大千世界の一佛化境のこと、見るが至當と思ふ。讀者果して云何が思惟するか。

更に又此れを梵網經の三重本末の佛刹に合して見ると、彼の經の初に「我今盧舍那坐^三寶蓮華臺^二周匠千華葉、復現^三千釋迦佛^一一化百億國、一國一釋迦、各坐^三菩提樹^二同時成^三正覺^二」と云へり。此の經說に依れば本佛盧舍那の蓮華臺に千の華葉ありて、各其の葉中に千の釋迦佛在します。(此れは中釋迦

なり) 其の千の華葉に復各々百億の國ありて、一國毎に各化身の釋迦在して同時に正覺を成し給ふ。
 (此れは葉中百億の小釋迦なり) 然れば千箇の百億國土有る故に其數今の十萬億に當る。然れば釋迦佛
 の主領し給ふ所の國土は千箇の百億國なるが故に、漢吳兩譯の大經には千億萬の須彌山佛國有りと説
 けり、此れが化身の釋迦の化境の土なり。此の梵綱經を以つて今淨土經を照せば、「正在西方去是閻
 浮提地界千億萬須彌山佛國」と云ふ吳譯等の文と能く符合す。是れ即ち前の一佛化境の國土のことで
 釋迦の自國所領の土を過ぎて、次に極樂が有ると云ふことになる故に此れを今過十萬億と説くなり。
 若し其の様に十萬億の數は釋迦佛の化境の土のこと、解すと、又安樂集上^{二十}に、華嚴經と正法念經
 を引いて、安樂世界と此の娑婆と境次相接して往生甚だ便なりと云ふ文にも符合せり。十萬億の佛土
 と云へば遙かのやうなれど、實は近いことで極樂は此の娑婆と境界相接して隣り合ひたゞ牆一重を隔
 るのみなり。何故なれば、千萬億の須彌山佛國は先の如く釋迦佛の一化境の土なれば、此の娑婆界を
 過ぐる所が直に極樂となる、故に安樂集の今の文の前に、「彌陀浮國既是淨土初門、娑婆世界即是穢土
 末處」と云ふて、其の境次相接するが故に往生甚だ便なりと云へり。然し或説では此の安樂集は隨他
 門の一往の説で隨自意の本意でないとして取らざる人もある。其等の研究は他日のこととして、兎に
 角今一佛土の量は三千大千世界のこと、云ふは元祖漢語燈^{七十一}に「從是西方過十萬億三千大千世界

有三七寶莊嚴地一名曰極樂世界」とあり、又同七^{三十一}左にも「彼極樂世界與此娑婆世界中間隔十萬
 億三千大千世界」等とあり、故に三千大千世界を一佛土とすること明なり。

問云此經並に大經には去此十萬億刹とあり、觀經には去此不遠と説けり、此の二經相違云何。

答云觀經は衆生に觀門を教ゆるに息慮凝心と行者の心を一境に凝して、淨土の依正を觀するには、
 遠き西方淨土を行者の心上に浮べて了々分明と觀想するのであるから、遠い十萬億の彼方に在る淨土
 とは説いてない。さり乍ら他經に説く自性唯心の觀とは異りて未來世の凡夫に教へる觀ゆへ、娑婆即
 寂光と觀じたり、無想離念に到達するが目的でなく、事觀の指方立相であるゆへに、日想觀の初に「繫
 念一所想於西方」と方所を指してある。此れを委しくするに序分義^{八十}に、「正明標境以住心即有
 其三、二明分齊不遠、從此超過十萬億刹即是彌陀之國」とあり。一に此の分齊不遠とは、分量際
 限で、即ち境界分量が遠からずと云意、即ち諸佛の淨土は恒沙無數の佛土を隔て居る。例せば釋迦
 の淨土の無勝莊嚴の淨土は從是西方四十二恒河沙の國土を過ぎて淨土あり、此れが釋迦の眞報土で
 ある。それに比すれば彌陀の淨土は十萬億刹の西方なれば、去此不遠と云ふに妨げなし。二に往生不
 遠の義。此れは疏文に「二明道理雖遙去時一念即到」とありて、此れは往生淨土の宗義より不遠を
 云ふたもので、此の界と彌陀の淨土とは十萬億刹と云へば、遙か隔りて有り其の道程は遙かに遠いけ

れども、往生する時になれば經に如一念頃、或は如彈指頃と説いて一念一刹那に往生することを得る。故に去此不遠と云ふ釋なり。此れは群疑論に往生不遠と云ふてある。三に觀見不遠。此れは疏文に「明_ニ 韋提等及未來有緣衆生注_レ心觀念定境相應行人自然常見_ニ」とあり、此れは定善の觀法成就し、心境相應すれば其の人の能觀の心中に所觀の境が了々分明に顯るゝゆへ去此不遠と云ふ。此の如き三義を以つて去此不遠を釋し給ふ所以は、自性唯心の淨土を云ふ聖道の諸師を簡んで指方立相を成立せんが爲めである。何故なれば第三の觀見不遠の一義で事足れども、是れのみでは諸師の云ふ自性唯心の義に溢れる恐れある故、初の二義を設けたものなり。即ち第一義は正しく指方立相の義を顯したもので、行者の能觀の心上に淨土が顯現はすれども、過十萬億の極樂が假説と云ふものでない。必らず分齋が定つて十萬億と云ふ數量を過ぎて彌陀の淨土が歴然存することを示し、第二は往生淨土の宗義を顯して、此の定善觀は行者の能觀の心上に淨土を觀得するとあればとて、聖道諸師の如く此の娑婆で修行して證ると云ふことでない。此の土より彼の淨土に往生する爲めに定善觀を凝すなりと示し、此の二義を経て第三に觀見不遠を云ふ故に、假令行者の心上に極樂が顯はるゝとしても、極樂國は何時でも過十萬億の向に存在して變ることなし。たゞ如來方便力を以つて教へ給ふ定善觀故に、佛力冥加に依つて此の娑婆界に居乍ら、西方を觀見するなりと成立する善導の御釋なり。故に此の三義は遠より近に至

る次第で説明して、其の間に指方立相を壊せずして、去此不遠の觀門成就の相を釋するものと思ふべし。尙此れより前の西方と云ふ邊際を説くと、無邊際の究竟如虛空との參考する所を附加して置くなれば、論註刪補鈔三_二丁_二、同顯深義記二_二丁_二左_二の所には、探玄記を引いて邊即無邊の義を辯じ、又論註了忠記二_二右_二丁_二には、體相分別を以つて土體を云へば西方十萬億の所に存じ、又包容の用に約すれば無邊際なりとして釋す。各據一義なり。具には彼の書を抜き見るべし。

第四章 極樂の名義

○舍利弗彼土何故名爲極樂、二廣讚_ニ依正_二、初讚_ニ依報莊嚴_二、初總釋_ニ土名_二、初自問、此所に舍利弗と佛が呼給ふは、此の經に屢々呼ぶ最初なり。彼の土とは極樂なり、何故に極樂と云ふ名の附く所以を知るかと舍利弗に徵問し給ふ文なり。○其國衆生無有衆苦等、二自答。此所に衆生と云ふは迷の衆生に非らず、所謂淨土論の衆生世間と同じ衆生で、彼所に佛菩薩のことを器世間に對して衆生世間と云ふ、今は極樂の聖衆を凡て衆生と云ふ。此れは淨影起信疏に衆生心の衆生を釋して衆の因縁聚集して、生起する故衆生と名くとあり。今淨土の菩薩も法藏菩薩の無漏清淨の業因縁に依りて、正覺華化生したる故衆生と云ふ。先輩は多く論註の不生不滅の釋を引いて辯じてあれども、其説は生

即無生の生には宜しけれど、衆生の釋名には過切ならずと思ふ。○無有衆苦とは、苦に三苦四苦八苦等あるは皆分段生死の相なり、淨土は無爲涅槃界なれば此等の苦ある筈なし。然るに定善義三十一に度ス苦衆生ヲの釋に分段生死の苦果は吾人の境界なり、淨土には分段生死の苦樂はなければ、變易の苦ありて下地より上地に進みて行く、因移り果易る變易生死の苦があることを明かしてあれども、彼れは一往經の顯說に就いて化土の相を明かすと見るべし。若し奪つて云へば化土と雖も、報中の化故に實は變易生死の因移り果易る相ある筈はなきなり。何故なれば分斷變易の二種生死を分つは、華嚴で云ふ五教の中の始終二教の上で云ふこと、愚法小乘と圓教とは一分段で變易生死を説かぬと云ふがきまりなり。善導は三論宗の人なる故分段變易の二を分ち給へども、吾祖は本願一乘を光闡し給ふ圓教の人なれば、一分段の外に變易を認めず。故に吾人の四苦八苦の娑婆の境界を一旦離れて淨土の聖衆となれば、假令化土の往生人と云へども變易生死の相ある筈なしと立つるが、吾祖の思召と思ふ。依レ之今も娑婆界の苦相に對して衆の苦あることなく但受諸樂の故に極樂と名くと極樂の得名を顯す説相なり。大經も亦然り「無レ有ニ途苦難之名一但有ニ自然快樂之音一是故其國名曰ニ安樂一」と云へり。其の衆苦の無き相を慈恩疏本三十二に央掘魔羅經を引て「無レ有ニ少苦一純一快樂故名ニ極樂一」と釋せり。又八苦無きが故に、蓮華化生すれば即ち生苦無し、國に老病無ければ病苦有ることなし、年壽盡んと

欲すれば十方淨土意に隨つて往生して念々滅を離る、故に死苦無し、喜樂相隨へば怨憎會苦無し、心皆平等なれば亦怨憎なし、去留を爲すと雖も愛別離苦無し、所欲意の如くなれば、求不得苦及貧窮の苦無し、又身金色にして端正天の如きなれば、神通自在なり、香風鉢を拂ひ天味自盈故に五盛陰苦無し、目に諸佛の顯赫を觀、耳に樹網風鈴を聽き、水流天樂意に隨ふて聞見す、故に極樂と名くと。彼れは分段の鹿苦に對して極樂の妙徳を釋顯せり。其義知るべし。○但受諸樂故名極樂とは、苦樂相對に依りて淨土の相を示す文なり。淨土論に「永離身心惱受樂長無間」とあるは恐く此の經說に依りしならん。但受とある但の字注意すべし。大經にも但有とあり、但は唯但で、こればかりと云ふ時に使ふ文字、故に淨土はたゞ樂ばかりで如何かなる小苦も無き故に但受諸樂と云ふ。已上極樂の名義終る。

第五章 彌陀の名義

○舍利弗於汝云何、二讚ニ正報莊嚴二、初總釋佛名二、初自問、上の略標段に依正二報を示し從是西方……名曰極樂とある。彼文の極樂の依報を聞いて説いたが、上來の依報段なり、又彼文の其土有佛號阿彌陀とあるを已下に開いて説き、委しく正報の彌陀の事を宣説せり。依つて此所に於ニ汝意一云何と問起するは上の略標段の號ニ阿彌陀一の文を押へての問なり。即ち上に阿彌陀の名は標してあれ

ども、如何なる義を以つて其名の起る所以を知らざるゆへ、爰に於て其名義を示すことになる。先にも云ふ如く、此經の説相は依報は何を説いても約まる所は極樂と云ふ名に收まり。又正報や佛や聖衆もあれども、約りは皆阿彌陀の中に攝する、これが此經の特色なり。故に今此の下の及其人民無量無邊と往生人の無量壽までを阿彌陀の名義中に入るゝ所が即ちそれであると思ふ。時に於汝意云何の五字は、此所と下の六方段の終と二ヶ所に此語あり。特に肝要なる所ゆへ佛の方から念を入れて、舍利弗よ汝が意には阿彌陀と云ふ名は、何んと云ふ意義ぢやと思ふてゐるかよ問起し給ふ。そこで舍利弗も答へねばならん筈なれど、愚痴にかへつて自の答をせぬから佛自ら答を爲し給へり。○舍利弗彼佛光明等、二自答二、初釋無量光、已下正しく彌陀の名義光壽二無量を説く所にして、此經の名所なれば此の下に彌陀の名義と云ふ論題を設く。偕て光壽二無量のことは、本と彌陀因位の發願に第十二と第十三の願に光明無量壽命無量の誓を立て、其の願成就して阿彌陀とならせ給へば、阿彌陀の名義には自ら光壽二無量の義が具す。然らば何故因位の本願に光壽の二徳を願し給ふぞと云ふに、彌陀は自利々他圓滿の佛、且らく自利の方では光壽二徳が眞報身の果體となる。凡て報身佛は光壽の二を以つて其の體徳とすること、近くは法華壽量品科註六^{十九}に久遠古成の報身の果體を説いて、慧光照無量、壽命無數劫と光壽二無量を以つて眞報身の果體としてあり。又智論三十四^{十五}にも眞報身の果體は光

壽の二徳を成する外なき旨を釋してあり。今彌陀も自利圓滿の方では十二十三の願に酬報して光壽の二徳を果體とし、此の邊では一往諸佛も彌陀も同等たり。然るに二利は長く別ならず自利即利他となりて、此の光壽二徳を以つて一切衆生を攝化し、化他益物の本とせん爲めに此の光眞二徳を成就し給へり。此れが化他門の方なり。此所に至ると諸佛なみくくの眞報身の光壽二徳に非らず、廣く衆生攝化の大慈悲尊と云はるゝなり。是れを元祖和語燈一^{五丁}に「總ハ光明無量ノ願ハ横ニ一切衆生ヲ廣ク攝センガ爲ナリ、壽命無量ノ願ハ豎ニ十方世界ヲ久ク利益セン爲也」とあり、されば彌陀佛の諸佛に勝れて衆生濟度するには此の二徳がなければならぬ。此れを和讃に「超世無上ニ攝取シ、選擇五劫思惟シテ、光明壽命ノ誓願ノ、大悲ノ本トシタマヘリ」と、此の光壽二徳を一名號に施し給ふ故阿彌陀の名義には自ら此の二を具す。然るに光明を先とするは利他益物の時、又壽命光明と次第する時は體用の次第なり。故に末燈鈔^{三十一}に「壽命無量ヲ體トシ光明無量ノ徳用ハナレタマハザレバ」等とあり。此の羅什譯は光明壽命の次第となり。玄奘譯は壽命光明禮用の次第となれり。各據一界と心得べし。偕て文を解せば、彼佛光明無量照十方國とは、大經の十二光の中の初三光に當る、彼佛光明無量とは、大經の無量光佛なり。照十方國とは、大經の無邊光に當る、即ち十方世界を邊際なく照す光明の徳なり。是れを觀經の眞身觀には光明遍照十方世界と説く、今此の經文には照十方國と云ふ。次に無

所障碍とは、大經の無碍光なり、即ち彌陀の光明は一切の物に障碍せられず、衆生の惡業煩惱の内の障りにも、又天魔破句や、山河大地の外の障りにも碍へられず、故に無碍光と名け奉る。此の無碍の德を觀經には念佛衆生攝取不捨と説く、故に善導は禮讚に彌陀經及觀經云と云ふて、二經の文を合糅して『唯觀念佛衆生攝取不捨是故阿彌陀』と云へり、それを吾祖彌陀經和讚に『十方微塵世界ノ、念佛ノ衆生ヲミソナハシ』等との給ふ。此攝取不捨と云ふが如何なる罪の衆生でも障りなく攝取する彌陀ゆへに此の經の無所障碍の文になるなり。其の義は定善義に攝取不捨を釋して三念釋を爲し、其の増上縁の所に諸邪業繫無_レ能_レ碍_レ者_一と云ふてあり、是れが今の無障碍の義なり。斯く見來れば大經の無碍光、已下の三光と觀經眞身觀の文と、此の經の文と能く一致して、彌陀の光明の德用を顯す相となる。是を天親菩薩淨土論に、彌陀の光明の德に就いて盡十方無碍光如來と尊號を立て給へり。(其の義委しくは先年淨土論の時辨じ置けり、參照すべし)

問何故十二光の中初の三光に就いて云ひ、餘の九光を擧げざるや。

答云初の三光は體德を云ひ、餘の九光は其の別德にして例へば三毒對治の爲めに清淨、歡喜、智惠光と説くが如きみな別德に就く、初の三は不_レ然總じて體を擧げたもの故に、總の三を擧ぐれば自ら餘の別は具する故、餘九は略したものと知るべし。然るに此の光明に心光、色光、常光、現起光、等

の別あれども要するに佛邊では色心二光は不二なれども、衆生の機受に就いて其の別を生ず。又彌陀は光明無量と云へば常に此の光明無量を放つて十方世界を照し給へば、二光の中では常光なりと思ふべし。○又舍利弗彼佛壽命等、二釋_ニ無量壽_一、初就_レ名正釋、彼佛壽命と壽と命との二字を別つて釋することもあれども、今は壽も命も共に同一として彼佛壽命と云ふ、即ち一期相續して行く命根のことなり。彌陀は其の命根が何時が限りと際限なき佛故に無量壽佛と云ふ。及其人民とは淨土の聖衆を娑婆の人民に比擬して説く、即ち彌陀を法王とすれば菩薩等は法臣にして、王の治下に人民あるが如き故に、此所に菩薩の事を人民と稱す。無量無邊は彌陀の無量壽のみならず、其の人民たる聖衆までが無量壽なりと顯す文意、此れが實に大切な文で安心上では機法一體の顯るゝ所、即ち阿彌陀の無量壽の法の中に衆生の機相までが成就して、一名義となりてある所なり。故に機法一體の義が顯るゝ所と窺はねばならぬ。夫れは今の正所論でないから他日に讓る。而して淨影、天台、嘉祥、等は此の彌陀を應身と判じて無量壽を有量の無量と釋する故に、西河禪師已來此れを破して是報非化の判を爲し給ひ、善導之を相承し玄義分に其の義を委しく釋す。依つて吾祖は眞佛土卷に、光壽二無量の願に酬報したる眞報身の彌陀とも定め、佛は則不可思議光如來土亦無量光明土なりとの給ふ。

問云光壽二無量の覺體は因願酬報の眞報身の彌陀なれば何故に此經の名義釋の大切なる文を、吾祖

眞佛土卷に引用し給はざるや。

答云廣文類は三願三經の眞假極めて嚴格なる筆法で、前五卷の眞實卷の中には決して觀小二經の方便經の文を引き給はず、此經は執持名號等の前後の機にかゝる所丈けに隱顯が立つて、依正の莊嚴や六方段の文には隱顯は無い、たゞ眞實なり故に眞佛土卷に御引用ありても可レ然と思へども、假令眞實義のみの名義釋の文でも、三經に眞假を分つ廣本の格は顯眞實教は大經にして、觀小は方便とする故、廣本前五卷の眞實の卷には決して直に二經の文は引き給はず、若し必要ありて引く時には即ち七祖の釋に移して引用し給へり。例せば眞佛土卷には善導の法事讚を引いて、此經の正因段の極樂無爲涅槃界の文、又依報段の自然即彌陀國の文と、又彌陀妙果號無上涅槃と云ふ文を引いて、彌陀經の淨土は眞佛眞土なることを證し、又化卷本^{二十一}散善義の彌陀深信の文を引くに、即ち彌陀經中説の下、釋迦讚歎極樂種々莊嚴の八字を乃至してあり。これ彌陀經の依正二報は眞佛眞土なるゆへ、化卷には邪魔なる故之を乃至し、其換りに信卷本^七左には今の散善義の文を引いて、眞實信心の證文とするに、化卷に乃至したる釋迦讚歎等の十字を打出してあり。今亦之に準じて知るべし。即ち此の名義釋の文を光明大師の唯觀念佛衆生攝取不捨故名阿彌の文に移して、此れを大行六字の證文として、行卷^{二十九}に引用してあり。此の如く實に御本書の筆格の正しきこと以て知べし。又阿彌陀の梵語に

は陀の所に由沙と、婆耶との二音が含んでありて、壽命光明の二義となること先の題號の下で辨じ置けば今は之を云はず。○舍利弗阿彌陀佛等、二示成道時、此の文は上の壽命に因で成道已來の劫數を十劫と示し、阿彌陀佛の壽命は無量と知れども其の彌陀と云ふ佛とならせられて、凡そ幾子であるかと迷ふ衆生ある故、於今十劫と示したるもの。此れを横川略記本^{十五}左に「然所以此文來者、爲顯彼佛三世益物及利此土今日後時衆生故也」として更に三義を設けてあり。其中後の説^前近^以顯^後遠^と云ふ義が尤も適當である。即ち壽命無量は豎に三世に渡りて衆生を攝化し給ふ爲めなれども、若しや成道已來日久ふして攝化の功終らんとするに非ざる歟と思ふ輩に對して、まだ成佛已來は十劫にして將來の攝化利生は無限際なりと示し、以つて聞者をして欣樂の心を生ぜしめん爲めなり。而して十劫の數を説くに經説不同なり。稱讚淨土經には十大劫を経るとあり、大經は今と同じく凡歷十劫と説き、大阿彌陀經には十小劫、平等覺經には十八劫とあり、述文讚中^{四十}二丁には一往會通してあれども、實は和會すべからず。依之鎮西流には單十劫、常演十劫、赴機十劫等を立つ、選擇集直牒^六十七に出づ。又西山でも堯慧鈔中^{十五}丁左に種々説をなせり。披き可レ見。今家は大經所説に依りて今十劫成道の彌陀に就いて宗義を建立し、十劫の佛を實とす。而し若し他經等より眺むれば亦久遠古成の義もある故、此れも遮する所に非らず、故に十久兩實と傳ふるが眞宗の正義なり。故に大經和讚に「彌陀

成佛ノコノカタハ、今二十劫トトキタレド、塵點久遠ノ劫ヨリモ、久シキ佛ト見ヘタマフ』とあり。
其の委細は一朝の論に非れば他日を期して深く研究すべし。

第六章 執持名號一心不亂の隱顯の義

○舍利弗若有善男子善女人等と二正示正因^二上の段に諸善萬行は往生の因に非らずと廢し、此の一段には執持名號の念佛を説いて、是れが正しく往生の因なりと立つる所なり。元祖は此の下を小經釋^{九丁}に「二正修念佛」と云ふて行に就いて釋してあれ共、念佛の行ばかりに非らず行には必ず一心の安心を具するとせねばならぬ。而し經の大體が、觀經附屬の文を重ねて説いたものだから、諸行念佛相對して廢立を説く所なるゆへ、總じて科する時は念佛往生を明す文と行に就くなり。さて善導の法事讚に、隨緣雜善恐難生と云ふまでが上の經文の不可少等の釋、此の下が故使^レ如來選^テ要法^ニ教念^ニ彌陀^ニ專復專^トと云ふ讚文なり。先づ讚文の上を云へば、如來とは釋迦如來、要法と云ふは此經に説く弘願念佛の一法のこと、選とは選擇の義で、上に諸行は往生の因に非らずと簡び捨て此所に於て念佛の一法は往生の因なりと選取るそこを簡^ニ如來要法^トと云ふ。元祖が七選擇を立て選擇證誠と云ふは、正しく此の經文の所に立つので釋迦如來此の經に於て一切諸善萬行は往生の因に非らずと選び捨てた

本願念佛を選び取らせられた。此の選擇を下に至りて六方諸佛が證誠せらるゝから選擇證誠と云ふ。又教念^テ彌陀^トとは經文の執持名號一日七日の念佛を教へてあり。專復專とは初の專は念佛一行、後の專は一心專念なり。故に唯信文意^{二十}左に「專復專トイフハハジメノ專ハ一行ヲ修スベシトナリ、乃至マタ專トイフハ一心ナレトナリ一行一心ヲモハラナレトナリ」と專は專一で、初は念佛一行を専ら修すること、後の專は一心不亂の一心の事なれば、彌陀一佛を信じて餘念なく往生治定と思ひ定むる一心の相なり。今釋尊が一心稱名の念佛一法を選擇して末代衆生に教へ給ふ所なり。然るに故使^レと初の文に使の字あるを先輩は注意せられて、此の使は彌陀因位に選擇して念佛の一法を選び取り給へり。之に依つて釋迦選擇の本は彌陀選擇本願のしからしむる所なりと顯して使の字あり。丁度觀經で釋迦章提をして安養を選ばしむるに此れを序分釋に釋して「致^レ使^レ如來密遺^ニ夫人^ニ別選^ト」と云ふに同じと辨ぜられた。これは尤な説と思ふ。偕て本文の若有善男子善女人とは信受の機を指す。故に且らく善と稱すれども實は廣く一切に通ず。故に元祖の小經釋には「是乃指^ニ念佛行者^ト也、此文雖^レ曰^ニ善男善女^ト意兼^ニ惡人^トとして、次に善導觀念法門^{二十二}左の「若佛在世、若佛滅後、一切造罪凡夫等」の文が引いてあり。然れば此の善男等は第十八願の十方衆生成就文の諸有衆生に當る。次に聞^レ說阿彌陀佛^トとは、此經の正宗分の初めから極樂の依正二報の莊嚴を説いて勸信求往の爲めになさるゝ故に、それを今

此所に依報を正報の彌陀に歸して聞説阿彌陀佛と云へり。即ち上の名義釋に、光明無量の故に阿彌陀と名け壽命無量の故に阿彌陀と名くとある。彌陀の名義を聞いて心に信受する事なり。故に此の聞と云ふが成就の文の聞其名號と同じく名號の謂れを聞き聞いて疑ひなく信する事、一多證文右^{二丁}に「キクトイフハ本願ヲキ、テウタガフコ、ロナキヲ聞トイフナリ、マタ聞クトイフハ信心ヲアラハス御ノミナリ」と、聞即信の今家の法相なり。それを次に執持名號と云ひまた一心不亂と説けり。

さて此の執持名號とは元と觀經流通の即是持無量壽佛名を受けたものなり。彼の經の持無量壽佛名を、善導散善義^{三十}に釋して「正明^下附^ニ屬彌陀名號^ヲ流通^ト退代^ト」と科釋し、次に之を「一向專稱彌陀佛名」と云へり。されば執持とは善導を以つて見れば稱名のことなり。其の時には執持と云ふが云何して稱名のこと、になるかと云ふに慈恩彌陀經疏^{五十}に「執持名號誦念無^レ忘^レ也」とありて口に名號を稱へて心に忘れず受持すること、朝暮常に口に念佛するは心の内に受持して忘れぬから口に顯はれて稱名となるなり。此の時は起業の稱名念佛すること故、それを次に若一日若二日と時節を出して稱名を修する相を顯す。依つて元祖も「執持名號者此正修念佛也、若一日乃至七日是修念佛三昧、時節之延促也」等とあり。然れども具に之を論ずる時は執持に二義ありて、一に稱名の義先の善導元祖の如し。二には信心の義、これは吾祖化卷自^{四十九}に「執言彰^ニ心堅牢而不^ニ移轉^一也、持言名^ニ不散不失^一也」と、

又略本^{十六}に「執者心堅牢而不^レ移持名不散不失」等とあり。元と執持の二字は化卷本^{三十}に孤山疏を引いてある如く「執謂執受、持謂住持、信力故執受在^レ心、念力故住持不^レ忘」と云ふ心に約する文字なり。されど執持名號と四字熟する時は口業の稱名に通するなり。吾祖は此の經文に隱顯を立て、顯の義は口稱念佛のことにして「言顯者經家嫌^ニ貶一切諸行少善、開^ニ示善本德本、眞門^一」等との給ひ、即ち二十願の機が自力念佛を稱へて此の念佛こそ諸善萬行に勝れたる善本德本なりと思ふて、口に常に稱名するなり。所謂化卷に本願嘉號を以つて己が善根とし、これで滅罪生善し給へと思ふて稱ふる念佛なり。愚禿鈔^{十二}に「就^ニ彌陀念佛^一有二種、一正行定心念佛、二正行散心念佛、彌陀定散念佛是曰^ニ淨土眞門^一」とある即ち是れなり。又隱の義で云ふ時は、執持名號と云ふ執持の二字が即ち信心のこと下の一心と同じものになる。依つて他力金剛の信心のことになるなり。其の時は執持と一心とを一組にして信のことになる。何故なれば執持の二字は元と心に約する文字で意業であるゆへ、此れを吾祖化卷に經言^ニ執持^一亦言^ニ一心^一と信心になさるゝなり、去り乍ら若し執持名號と續けて一句にすれば、やはり名號を稱へる事なり。即ち善導元祖のの給ふ弘願の稱名にして第十八願の稱我名號なり。故に吾祖唯信文意^{二十}に法事讚の專復專を釋して、初の專を念佛一行のこととし、後の專を一心の信心のこととし「一行一心ヲモハラナレトナリ」と結んである。其の義已に上に辨するが如し。され

ば隱の時と雖も唯信心取りきりにするに非らず、善導元祖の弘願の稱名との給ふ時は、專修一向の念佛にして他力の如實修行の念佛なり。若し二十願の機が定散の心に住して稱名の一行を勵む時は、顯の義の眞門自力の念佛となる。されば同じ稱名念佛でも二十願の念佛は、罪福心定散心の上より稱ふる念佛、善導元祖の念佛は自力の心を離れたる横超他力の念佛なり。

是れを要するに一の稱名念佛なれども、顯説の自力の一心より稱ふれば眞門の念佛と名け、隱彰の他力の一心を以つて稱ふれば弘願の念佛と名ける。化卷自四十八丁右に「正行之中專修專心專修雜心」とあり。此の專心と云ふは定專心散專心のことなり、今此所に顯説で云ふ念佛は散善自力の眞門念佛なり。已に衆生の機類に定散の二機がある故に、念佛にも亦定心念佛、散心念佛と分る、先の愚禿鈔の如し、随つて定散九品の機の別に依つて勝劣を生じ來迎の佛菩薩にも多少の別を生ず。是れ自力念佛の結果として自ら然らざるを得ず。若し隱彰の實義に就く時は同一念佛の因に依つて無別道故の報土の果を得て勝劣淺深ある筈なし、所謂大願清淨の報土には品位階次を云はずと云ふ是れ也。應レ知。

○若一日若二日等、此下に就いて先輩香月院は丁寧に念佛に就いて三門分別を以つて辨せられた。初判漢土諸師。二述光明黑谷釋。三辯今家隱彰義としてあり。今一々此れを辨する違なければ極略して其大要を云へば、先づ元照疏四丁に「一レ志依投懇求レ解免レ聲々相續レ念々不レ移レ雖レ復理事行殊定散

異レ皆成レ淨業レ盡得レ往生」とあり。彼人等は聖道門特に天台系の人なれば、念佛に事理を分ち初は事の念佛を修し佛の名號を稱念すれども、其の目的は本具の心性を開覺し無想離念の境に到達するに在るのである。又其の同一系の性澄句解丁十七、智旭要解丁四十、大惠の淨土已訣丁十五、其他雲栖大佑等の釋皆然らざるはなし。此等は先きに引く定心念佛散心念佛の域中を出でず、故に唯心已心の念佛或は念觀不分の念佛と云ふべきものにして、善導元祖の念佛とは大に別なりと知るべし。二に光明黑谷の釋は彼の諸師と大に異り、即ち定善義丁二十三に「立レ相住レ心尙不能得、何況離レ相而求レ事者、如レ似無レ術通レ人居レ空立レ舍也」とありて、觀門を修するすら指方立相して西方を觀ぜよと勸む。何んぞ況や無想離念の念佛を修するなどはとても出來得るものでないと仰せらるゝ。故に之を廢して唯稱名念佛の一行を立し廢立を専らにして、一心專念彌陀名號行住坐臥不問時節久近念々不捨者の念佛を勸むるのが、即ち善導の稱名念佛なり。元祖此れを相承して選擇集の初に往生之業念佛爲本と標し、専ら善導流の稱名念佛を弘通し給ふ。故に今此の執持名號と云ふは即稱名念佛なること云ふまでもなし。但し其の所明に二あり、一に法事讚下丁十二に「七日七夜心無間長時起行倍皆然」とある。此の初の七日七夜無間の一句は別時念佛、次の長時起行倍皆然とあるは長時念佛なり。又觀念法門丁左に「又如レ彌陀經云レ（中略）但廻心念レ阿彌陀佛レ願レ生淨土レ上盡百年下至レ七日一日十聲三聲一聲等レ云云」と

あり。此れは長時平生の念佛なり、善導の本意は長時に修する念佛の数を定めざる第十八願の乃至十念の念佛なり。其の義何を以て知るならば、禮讚^{三十七} 十八願加減の文に「稱我名號下至十聲」（中略）衆生稱念必得往生」として次に「又如彌陀經云、若有衆生聞說阿彌陀佛、即應執持名號、若一日若二日乃至七日一心稱佛」とあり。即ち第十八願の乃至十念と此經の一日七日の念佛とを一連に引いて稱名の遍數の定りなきことを示し、長時相續の稱名なることを顯せり。又元祖の上にも別時長時の二ありて、即ち小經釋^{十二}に「問於時節有或十日或九十日等不同、何故今就七日明念佛行、答其例非一」として世俗の七世七廟七寶等の例を出してあり、これは別時念佛なり。又同左^十に「雖但舉一日七日、意兼一生乃至十聲一聲等」と云ふて次に「是故善導釋此文云、上盡三百年下至七日一日十聲三聲一聲等」と云つて次に先に出す觀念法門の文を引いてあり。これ長時の念佛なり。元祖の上にも此の二あれども黒谷の本意は長時念佛なり。故に黒谷傳五^{三十五}に「禮讚ノ中ニ八十聲一聲定得往生、乃至一念無有疑心ト釋セラレテ候ヘドモ、疏ノ文ニハ念々不捨者是名正定之業ト候ヘバ、十聲一聲ニムマルト信ジテ、念々ニワスル事ナクトナフベキニテ候。又彌陀名相續念トモ釋セラレテ候。サレバアヒツヒデ念ズベキコトニテ候」と、又同五^{二十三}に「凡夫ノナラヒ二萬三萬ヲアツトモ如法ニハカナヒガタカラシ、タマ數遍ノオホカラシニハスグベカラズ、名號ヲ相續センガタメナリ、カ

ナラズシモ數ヲ要トスルニハアラズ、タマ常ニ念佛センガタメナリ」とあり。此等の文に依りて長時相續の念佛が元祖の本意なることを知るべし。されど敢て別時の念佛を遮するに非らず、依つて師匠の恩徳を思ひ父母の恩を思ふに就けても、別時供養の營みをして報恩の行に擬することは佛者としてあるべきことなり。吾眞宗の七晝夜の御佛事其の他歴代の御法要を三晝夜五晝夜と勤むるは皆別時念佛なり。御文に「七晝夜ノ間ニオイテ念佛勤行ヲコラシハケマヌ」とあるは、皆別時念佛のことなり。又黒谷傳八^{十五}已下に元祖の御中陰中に種々法會の營みのありたことを載せてあり。披き可^レ見。已上善導元祖の念佛の大概此の如し。

三に吾祖の隱顯のことは玄談に已に辨する如く隱顯は安心の上に就いて立てたもので、善導元祖の行々相對して定散要門の行と弘願念佛の行とを對望して、廢立を語る義門とは別なり。故に善導元祖では稱名念佛と云へば弘願なること當然なれども、吾祖の隱顯で云ふ時は念佛必ずしも弘願と云ふべからず、念佛にも要門の（萬行隨一の）念佛あり、二十願の眞門自力の念佛あり、弘願の第十八願の他力念佛あり、念佛と云へば必ず定散に對する弘願他力と限らず。爰に於て小經顯說の執持名號の念佛は眞門自力の念佛となり。又隱から云へば第十八願の乃至十念の念佛にして所謂善導の上盡一形下至一念の念佛のことなり。故に一多證文^{十四}左に「本願ノ文ニ乃至十念トチカヒタマヘリ、（中略）稱名ノ

徧數サダマラズトイフコトヲ、^{乃至}阿彌陀經ニ一日乃至七日名號ヲトナフベシ」とあり。然れば十念とは一の滿數七日亦一の滿數なり。十の滿數は常の如し。七の滿數は勝鬘經寶窟下末^{五十四}に「外國多以七爲數^{乃至}七是一數滿」とあり。されば十と説くも七と説くもたゞこれ一の滿數に寄せて稱名を顯す。それ故乃至の言を置き又若の字を置いて不定を示し、稱名の功を取らず能稱の力をたのみず、たゞ本願の不思議名號の功德を聞きて此れを信じ行する非定非散の弘願の念佛なり。こゝが宗祖の隱顯となる所で、念佛に要眞弘の三門が分れて單に所修の行のみの上で云はず機の受得の上より自力他力を判じ、以つて善導元祖の弘願念佛の眞價をして愈々明かならしめ、如實修行相應の念佛たることを示す。故に隱顯の立つ理由は安心の衆生機受に就いて立つものであるから、同じ佛名を稱念しても自力疑心の上で稱へる念佛は念佛一行となり餘行を選捨しても、尙機が本願の嘉號を以つて己が功德とするもの故に眞門自力念佛となり。又他力信心の上より佛恩を念報して心の喜びが自ら口に顯れて長時相續の稱名となるは他力の念佛なり。而して其の口業となりて顯るゝ本とは意の信心なれば、此の執持名號の執持を信心のこととして、宗祖は化卷自^{四十九}に「執言彰心堅牢而不^左移轉也、持言名不散不失也」と云へり。是れ一心の安心にして、彌陀一佛に助けられ參せて往生するぞと心の中に決定心が起りた所が即ち堅牢にし移轉せざる所、持の言は不散不失とは、往生不定の思ひで若存若亡なら

ば不散不失の反對なり。今は不^レ然一心の信心の決定心に住し往生に安堵の出來た故餘の方へ心を散らさざる所を不散不失に名くと釋せり、これが即ち一心のことなり。

○偕て一心不亂等。と、此の一心に就いて、西鎮には安心の一心、起行の一心を立つる。即ち鎮西では良忠論註記^{一丁右}に淨土論の一心を釋して、一心と云ふは安心と爲んや起行と爲んやと問ふて、答に今の文は起行の一心之義と釋す。故に「相續無他^二想問雜^一」と云ふ。下文に「釋安心之相^二故云^一三信等^二」とあり。又西山は堯慧の私集鈔^{一左}に「一者心安心爲體^二（中略）一心體是雖^二安心^一約^二修業^一約^二安心^一釋^レ之」とあり。又玄義楷定記^{一丁左}にも十四行偈の我一心を釋して「然此一心含^二有^一安心作業之意^二等」とありて、西鎮共に一心に安心起行ありと云ふ。今家は一心は安心に限りて起行の安心を立てず、さり乍ら先輩の傳へに、此經顯の義の時は所謂鎮西の起行安心に同すと云はれた。何故なれば此の眞門の機は、自利の一心を策勵して日夜常に能稱の功を募る邊は、丁度鎮西等の日に三萬五萬と念佛の數の多きを尊て稱名を策勵して餘念なき故一心不亂と云ふ。即ち彼起行安心と同じことになる。而して此の一心不亂は一經の眼目で、吾祖化卷^{八丁左}に「問大本觀經三心與^二小本^一一心一異云何」と問を出し、其答に「准^二知觀經^一此經亦應^レ有^二顯彰隱密之義^一」と一心に就いて隱顯の釋を爲し給ふ。即ち「言^レ顯者經家嫌^二貶^一一切諸行少善^二（中略）勵^二自利一心^一等」と云ふ、是れは先已に辨するが如し。又

「言彰者彰、眞實難信之法、斯乃光闇不可思議願海、欲令歸、無碍大信心海」とあり。此れも先に粗々辨する如く他力の信心なり。又化卷要門下自四十六丁右に「小本言、一心二行無雜故言、一也、復就、一心、有深有淺、深者利他眞實之心是也、淺者定散自利之心是也」とあり。此の淺深が即ち隱顯の自力他力になる。又先の小本言、一心二行無雜故言、一也とは顯の自力の一心で、眞門の機は念佛は尊き事と思ひ餘行を廢してたゞ念佛一行を修するゆへ、一心と云ふても行が先に立つ一心なり。然るに隱の一心は化卷自四十九丁左に「一之言者名無二之言也、心之言名眞實也」とあり。此時は一心の一を無二の義で釋してあり、又顯の義でも二行雜ることなしとあればやはり無二の義なり。然るに隱の義の無二と云ふは一擧の當體に約して釋す。又顯の時は所修の行の專一無雜に約して能修の一心を釋す、之に依つて顯の義の一心は當體顯の一は無二の義と云ふことは云へぬ。なぜなれば、定散自力の一心は不了佛智の疑心から修する念佛ゆへに、行は一行でも心は定散心間雜す、故に一心の當體が無二なりとは云はれぬ。たゞ所修の行に就いて念佛一行となつたに止るなり。今他力の一心はそれと異りて、定散間雜の心もなく、若存若亡の二心をも離れて、一心一向に本願を信樂した一心ゆへに、當體に就いて一言名無二と無二の一心なり、故に此れを信卷に「信心無二心故曰、一心、是名、一心、等」とあり。これが即ち此經の隱の一心なり、故に今一之言者名無二之言、心之言者名眞實也と釋して他力眞

實の信なることを顯し給へり。○不亂とは、前の如く顯の時は自利の一心を勵ます相なり、隱の時は一心無二の相を示す其體を云ふ時は顯の義の一心の心體は自力策勵の凡心なり。隱の心の他力の一心の體は眞實至誠の佛心なり、此れを最要鈔初左に「信心ヲバマコトノコ、ロトヨムウヘハ、凡夫ノ迷心ニアラズ、全ク佛心ナリ」等と、又蓮師御文に之を相承して「信心ト云ヘル二字ヲバマコトノコ、ロトヨメルナリ、マコトノコ、ロト云フハ行者ノワロキ、自力ノコ、ロデハタスカラズ」等と、已に如來廻向のまことの心を受得して見れば、外へ心の移りて散ることもなく執持堅牢の金剛心なる故に今此所に不亂と云ふ。和讃に「信心スナハチ一心ナリ、一心スナハチ金剛心、……コノ心スナハチ他力ナリ」とあるは全く今の隱の一心不亂の相なり。應に知るべし。

第七章 念佛來迎の有無

○其人臨命終時等、三明往生果二、初聖衆來迎。此所にも例の隱顯二義がありて、先づ顯の義では其人とは上の一日七日の念佛の人を指す。臨命終時とは臨はのぞみかゝること、今正しく命終る時ではない、命終らんとする時のことを臨命終時と説く。是れ即ち平生に念佛を一日七日と上盡一形下至十聲と稱へた行人が、將に命終に臨みて佛菩薩の來迎を得て心錯亂せず、愈々正念に住し往生する

相なり。此れを元祖の小經釋^{十一}に「念佛行漸成就往生期既至時、彌陀如來與諸聖衆俱來迎^{シタマフ}接行者^ニ也」とあり。○現在其前とは、佛菩薩が行人の目前に顯れて現に來迎の相を拜むのなり。これは第十九願にも現其人前とありて、諸行往生の人や自力念佛の行人は平生に堅固決定の信なき故に、聖衆の來迎がなければ心顛倒し臨終に種々の忘念執着が起りて、往生の大事を取りぞこなふことあり。故に佛の慈悲加祐して行人の前に來現す。行者依^レ之正念に住することを得て往生を得るなり。是れ一心不亂の稱名の因に依つて、聖衆の迎接を感じ往生の素懷を得るのであるから、全く顯の義の相なり。元祖の小經私記に、此の下の來迎を觀經九品の來迎には優劣あり、今此經の來迎は、若し聖衆の多少に依りて其品位を定めば、是れ上品上生の相に似たりとある。其故は今經には聖衆の多少は説かざれども、稱讚淨土經に據ると「臨命終時無量壽佛與^ニ其無量聲聞弟子、菩薩衆俱、前後圍繞、來住^ニ其前、慈悲加祐令^ニ心不亂」とある。已に無量の聲聞等と云ふからは此に知ぬ、是上品上生の往生なりと釋してある。されば此段の經文に臨終來迎の相が説いてあるゆへ經の顯說方便と見るが吾祖なり。故に化卷の此經の顯義の下^{自四十}九^右に法事讚の「釋云^ニ九品俱廻得^ニ不退^一或云^ニ無過念佛往西方、三念五念佛來迎^ニ」の文を出して、眞門自力の行者が、三念五念と念佛を稱へ西方往生するに如かずと思ふて稱名を稱へ、其功で臨終の來迎を感得することを明してあり。總じて吾祖は臨終に來迎の附いてある文は、

皆自力行人の相と見て、末燈鈔^初に「來迎ハ諸行往生ニアリ、自力ノ行者ナルガユヘニ、……イマダ眞實ノ信心ヲエザルガユヘナリ」と仰せらる。然らば十九願の諸行往生ならば臨終來迎あるべし。今二十願の自力念佛に來迎の相を説くは云何と云ふに、此れには淨土門の中西鎮今三家の所立各別なり。それは後に辨ずとして、今家の吾祖は來迎と攝取と相望して眞假を判じ、第十八願眞實弘願念佛の利益は平生業成攝取不捨の益を得る、方便十九願の諸行往生の行人は臨終來迎の益を得る、隨つて二十願の人もやはり自力念佛を修する機なれば、平生に攝取の益を得ること不能、臨終來迎の益で即ち方便假門の分齊なりとするが來迎不來迎の大體なり。依つて今も此の下の臨終來迎の相を眞門自力念佛の益と見て經の顯義とす。若し然らば經の隱義で解す時は云何と云ふに、其時は此れに點をかへて「臨^{ソム}命終^ニ時マデ」と讀んでマデと云假名を加へて讀むべしと先哲が申された。此れは一多證文^初に「一切臨終時トイフハ、極樂ヲネガフヨロヅノ衆生イノチヲハラントキマデトイフコトバナリ」とあり。此の時には是れが攝取の利益となりて臨終來迎ではない。即ち聞信の一念に平生より臨終まで常に彌陀の光明に攝取せられ、諸佛菩薩等が百重千重圍繞して常隨影護し給ふなり。依つて此れは觀經の普觀の所に「無量壽佛化身無數與^ニ觀世音大勢至^ニ常來^ニ至此行人之所^ニ」と説ける文と同意味となる。して見ると信の一念から臨終まで、常平生に彌陀佛が諸の聖衆と共に晝夜に常隨影護し給ふ。そ

れが亦行者の命終の時には其人の眼に拜むことを得る。平生は煩惱に覆れて常隨影護の佛を拜見することを得ざれども、此の果縛の穢體將に盡んとする時彼の佛を拜むに至る。是れを不來之來顯現來迎とも名け、常途の來迎と趣を異にす。此等の益は自力の行人には決しあることなし。故に元祖も常來至此等の文を攝取不捨の文とし、三緣釋の中の近緣を明す所に此文を引いて、其次に「念佛草菴雖隘而恒沙聖衆雲集同三菴羅園之華座二等一」(漢語燈二三十五一)と念佛の勝益を喜び給へり。此の如く經の隱の義では此文を攝取の益と見るが吾祖の思召なり。○是人終時心不顛倒、二行者往生、心不顛倒とは、自力の行人は先の如く佛の來迎加護がなければ、種々の障礙を生じ心顛倒すれども、他力念佛の行者には其愛ひなく前念命終後念即生と命終るや否や眞實報土に往生し、無上涅槃の妙果を證す。それに就き凡て凡夫は死の緣は無量なれば、過去の宿業に依りて如何かなる死に様を致しても、一度彌陀の光明に攝取せられたる身なれば、地獄へも落ちずして極樂に參るべき身と定りてある故、臨終の如何に拘はらず必ず報土に往生するは平生業成の致す所、故に祖師は眞實信心の行人は攝取不捨の故に正定聚の位に住す。この故に臨終まつ事なし來迎たのむことなし等との給ふ。

問云口傳鈔下三十左に「修諸功德ノナカノ稱名ヲヨンドコロトシテ現ジツクヘクバ、ソノ人ノマヘニ現ゼントナリ」と、此文に依る時は來迎はた念佛の益と見へたり云何。

答云覺師の此の釋は觀經下上品の「汝稱佛名故諸罪消滅我來迎レ汝」の經文の意に依りて、第十九願の修諸功德中に於て念佛諸行相對して其の勝劣を示せるのみにて、敢て諸行の來迎を遮する文に非らず。故に是れを選擇集末四丁化佛讚歎章に對映するに、彼章に下上品の經文と其下の善導散善義の文を引いて「私云聞經之善はこれ本願に非ず、雜業なるが故化佛讚せず、念佛之行は是本願なり、正業なるが故化佛讚歎す」とありて吾祖の隱顯釋から云へば、第十九願の修諸功德の行人は、種々の自力修善の中に於ても念佛と諸善と比較すれば二者の勝劣あり、已に念佛は此の如しとして念佛の勝るゝことを示し、以つて來迎は假令不定の益たることを釋する文であるから、吾祖の末燈鈔の自力他力相對して來迎不來迎を語る義とは大に義門各別なりと知べし。

爰に於て今家の不來迎の義を辨ぜざるべからず。凡て他流の所立では第十八願に往生の因と往生の果とを説く、其の因とは三信十念、果とは若不生者なり。されば此の乃至十念の念佛に來迎あり。第十九願は即ち此の乃至十念の利益を説いて臨終に佛菩薩の來迎を得るとなす。若し佛菩薩の來迎の力を借らずんば臨終に心散亂し妄念が起りて正念を失す。故に來迎の力に依りて行者正念に住して命終に及んで目出度淨土に生ずと云ふ。故に乃至十念は往生の因、來迎は往生の緣なり、因縁和合して往生すと云ふが鎮西西山等の大體の義なり。故に西山禪林寺炬範述の第十九願の下大經の略箋には「我

等凡夫雖念佛願生若臨終時不遇勝緣一顛倒錯亂恐不得生是故有此願」と云ふ。若し然らば第九願の修諸功德と諸行を説く文は云何がするかと云ふに、鎮西は之を會通して來迎は正しく念佛の益、兼ては諸行にも通ず、其中念佛の來迎は勝なり諸行は劣なりと二者は勝劣を立て、而も念佛諸行共に報土に往生すと云ふが鎮西なり。彼家は二類各生の宗義なる故自ら斯の如く云ふ。其義は望西大經疏六_左第十九願の下に「現其人前者佛之來迎行者外緣準群疑論可有勝劣勝來迎者迎念佛機即三緣中増上緣、故以爲勝也、劣來迎者迎餘行機非三緣中増上緣故名爲劣也、應知因緣和合能成往生大事、一闕不可、如ニ序題門云云」傳通記(定善義)三十一も粗々此意なり。又西山は念佛一類往生の家なれば諸行の往生を許さず、隨つて諸行の來迎と云ふことは決して無きなり。來迎の益は唯念佛に限ると爲す。其の義堯慧選擇集私集鈔三_{二十四}に出づ。然るに前難の如く、三輩九品等の諸行に來迎の益を説く文は云何がするかと云ふに、彼れを通じて云く、第十九願や下卷の三輩段に發菩提心と迎ふて來迎を説くはあながちに諸行の益に非らず、これは大乘修善の機相を擧ぐるに止るのみ。それゆへ迎接は則信心願生之人に在り、其信心願生之人は三輩九品に通じて善機あり惡機あり、機根種々なれば經文に發菩提心修諸功德と説く、これ必ずしも來迎の因と思ふべからず。是れ即ち諸機の中大乘修善の機相を擧るのみ、故に只是れ一偏の機相を擧ると見るが西山なり。此の義大經略箋三_{三十}に出

づ。又散善義指定記八_{十七}左参照。然るに吾眞宗は大に不_レ然。第十八十九二十の三願三機眞假各別に於て、先づ第十八願は眞實の誓願、第十九願は諸行往生を誓ふ方便の願、第二十願は植諸徳本の自力念佛の願と三願に眞假を分ち、又其の機にも三類と分れて、自ら往生にも報土化土の辨別を立つ、故に第十八願と十九二十の願とは眞假權實判然と別なれば、第十九願の來迎を以つて念佛の利益と見ることに決してなし。第十八願は三信十念の因に依て若不生者の益あり、之を成就文には必得往生と説く、第十八願の念佛の利益は來迎に非らず平生業成攝取不捨なり。故に之を觀經には念佛衆生攝取不捨と説き、善導は蒙光觸者者心不退と云ふ、即ち願成就文の必得往生住不退の文意なり。而るに第十九願は諸行往生の相にして、彼機は定散の諸行を修して臨終の來迎を頼んで正念に住し、始めて命終の時に往生を得ると見るが眞宗なり。此れが即ち文の當相である。故に之を吾祖末燈鈔_初に「來迎ハ諸行往生ニアリ、自力ノ行者ナルガ故ニ、臨終(往生の文字あるころ)ト云フコトハ、諸行往生ノヒトニ云フベシ。眞實信心ヲ得サルガ故ナリ、眞實信心ノ行人ハ、攝取不捨ノユヘニ正宗聚ノクラキニ住ス。コノユヘニ臨終マツコトナシ、來迎タノムコトナシ、信心サダマルトキ往生マタサダマルナリ。來迎ノ儀式ヲマタズ」との給ふ。其義可_レ知。

問云、來迎は諸行の益にして念佛の利益に非すと云ふこと聞へ難し。大經三輩段に「一向專念無量

壽佛」と説て三輩共に來迎を説けり。又觀經下上品には「汝稱佛名故諸罪消滅我來迎汝」と特に念佛を稱する故來迎すと説けり。又小經にも若一日七日の執持名號の因に依つて「其人臨命終時阿彌陀佛與諸聖衆現在其前」と説く。三經の中何れの文に依るも念佛に來迎あり、何んぞ之を諸行の益とするや。

答云、これ要論なり、三經の上に念佛に來迎を説く文あれども、念佛に自力あり他力あり、又其の利益に假と眞とあり、假益に就けば且く念佛に來迎を説けども、念佛の實益は攝取不捨にして來迎に非らず。來迎の益は諸行の持前なり、何を以つて之を知るならば、第十八願に未だ曾て來迎を説くの文なし。又願成就の文にも必得往生と説いて來迎の言なし、之を相承して善導元祖も念佛の利益は常に攝取不捨で語りて來迎を以つて念佛の實益とし給ふことなし。其の一例を出せば第十八願の文を善導加減の文として、玄義分に三ヶ所、往生禮讚に一ヶ所、都合四ヶ所の文の中一として未だ曾て來迎を云ふことなし。又元祖是れを相承して選擇集に念佛の利益を示すに攝取章を出してあれども來迎章を開かず、然れば念佛の實益は攝取の光益を蒙るものにして來迎に非らず、たましく念佛に來迎を説く文あるは皆是れ諸行の機に順じて諸機誘引の爲なり。故にこれ念佛の假益にして實益には非ざるなり。然るに他流では來迎を以つて念佛の利益と思ふ故に、吾祖之に簡んで「來迎ハ諸行往生ニ在リ、眞實信心ノ行人ハ攝取不捨ノユヘニ正定聚ニ住ス」との給ふ。されば選擇本願の念佛は、攝取不捨な

るゆへ平生業成なり、不來迎なりと、主張するが吾眞宗の特色なり。又平生業成のことに就いては一念義、多念義、西山義等各々不同あり、此れは他日別に論ぜん、今の正所論に非ざる故略之。

問云、念佛に來迎の有無の事、今家には念佛の實益は攝取不捨にして來迎は諸行往生の益なりとすれども、善導元祖の上に念佛に來迎を説く文枚擧に違なし。然るに其の文を皆假益なりとするは餘り勝手に非らずや。

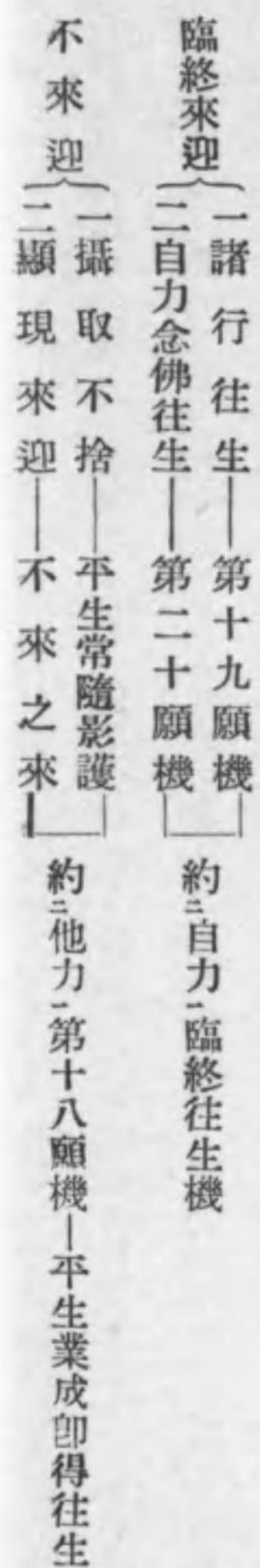
答云、所問の如く善導元祖の上に念佛に來迎ある文少しとせず。先定善義^{六丁}三緣釋の増上緣の文に「衆生稱念即除^二多劫罪^一命欲終時佛與^三聖衆^二自來迎^一、諸邪業繫無^三能碍者^二云云。」又禮讚^{十丁}に「恒願一切臨終時、勝緣勝境悉現前」と。又同^{十一丁}右^二願弟子等臨^三命終時^一心不顛倒^二心不錯亂^一（中略）聖衆現前乘^三佛願^二上品往^一生阿彌陀佛國^二等^一」其他五會法事讚には「彼佛因中立^三弘誓^二聞名念我總來迎^一」と。又「如來尊號甚分明、十方世界流行、但有稱名皆得往、觀音勢至自來迎、」と。（吾祖行卷に御引用）是等は皆第十八願の專修念佛に來迎の益を結び附けてあり。又元祖和語燈^{二三丁}に「能々申置タル念佛ニ依テ必ズ佛ハ來迎シ給フナリ。佛ノ來テ現シタマヘルヲ見テ、正念ニ住スト申スベキナリ」と、又同^{六丁}に「三心ヲ具スルコトハ、只別ノ様ナシ。阿彌陀佛ノ本願ニ我名號ヲ稱念セバ、必ズ來迎セント仰セラレタレバ、決定シテ引接セラレ參ラセンズルゾト深ク信ジテ、心念シ、口稱スルニ等」

と云云。此の如く善導元祖が第十八願の念佛往生に來迎を仰せらるゝは、元と經說の上に念佛三昧に依りて勝緣勝境を拜することを説く文あるに依つてあり。即ち華嚴經七^{十一}云「念佛三昧必見佛、命終死後生佛前」と、又首楞嚴の勢至章の念佛圓通の文にも「現前當來遠カラズ、如來ヲ拜見疑ハズ」とありて、臨終に勝相の現するのは、念佛行者は平生彌陀の心光に攝取せられて居ても平生はそれを拜することを不得、されど此の果縛穢體の將に盡んとする時煩惱の業障も已に盡きぬる故に、彼の佛菩薩を拜見するなり。故に此れは平生の常隨影護の佛が臨終に現るゝので臨終に始めて來迎するに非らず。此れを善導法事讚^{十四}に「弘誓多門四十八偏標、念佛^ヲ最爲^モ親^ト人能念佛^{スバ}々還念^ス」^至聖衆^ヲ常^ニ在^ス行人^ノ前^ニ」と云へり。此の常在と云ふは平生のことなり、依^レ之第十八願に來迎ありと云ふは、自力諸善の人が臨終に始めて見佛する來迎とは大に違ふ、之を混同すべからず。第十八願の他力念佛の行者には一念發起の信心の立所に、晝夜不斷に影の如くに付き添ひ給へる佛菩薩が、始めて命終に及んで行者の目に拜見するのなり。よりに第十九願の修諸功德の行人を拜む來迎とは全く趣きを異にせり。而るに善導元祖は彼此其の義各別であるにも拘らず、單に來迎の言を使用し給ふ所が即ち淺機を誘引せん爲なり。所謂賢者の説默は時を待ち機を待つ^ノ風情で、元祖の御時代は聖道諸宗のたゞ中に始めて淨土門を開き給ふゆへ、第十八願の念佛往生と判然と辨別し給はず、故に未だ來迎と攝取の別あること

を云ふ違なし。要するに時機未だ熟せず故に細判に及ばず、たゞ末代の今時は彌陀の本願念佛の一行より外に生死出離の道なしと勸めて、其念佛の力に依りて臨終の來迎を得て正念に住し易く淨土往生の素懷を遂ぐると教へて、諸機を誘引せん爲めに第十八と第十九の二者の利益を明に分たず、單に來迎の言を以つて勸め給ふが元祖の時代なり。然るに吾祖に至れば、具に五願六法眞假權實を分別し念佛と諸行とに就いて得失を審かに判じ、一は攝取不捨常隨影護なり。一は臨終來迎なりと、第十八十九の願文に基きて判然と其の差別を示し給へり。これが即ち善導元祖の微意を啓いて大いに淨土の宗義を大成し給ふが吾祖の御功蹟なり。而して善導元祖の上にも隨自意の本意を打出して云ふ時は、念佛の益は必ず攝取不捨を以つて談つてある。即ち往生禮讚^{六十}に觀經の常來至此行人之處の文に依つて「彼佛即遣^ニ無數化觀音勢至^ニ護^ニ念行者^ニ復與^ニ前二十五菩薩等^ニ百重千重圍^ニ繞行者^ニ不^レ問^ニ行住座臥^ニ一切時所、若晝若夜、常不^レ離^ニ行者^ニ」と、此の文は誰が見ても臨終來迎に非らず攝取不捨なり。即ち念佛行者に自然に備る常隨影護の相を明せり。又元祖和語燈^{三三}に「問一切ノ善根ハ魔ノタメニ妨ゲラル、是ハイカマシテ對治シ候ベキ、答魔界ト云フ物ハ衆生ヲブラカス物ナリ。一切ノ行業ハ自力ヲ憑ム故也、念佛ノ行者ハ身ヲバ罪惡生死ノ凡夫ト思ヘバ、自力憑ムコトナクシテ、只彌陀ノ願力ニ乘シテ往生セント願フニ、魔緣便リヲウルコトナシ。(中略)念佛ノ行者ノ前ニハ、彌陀觀音常ニ

來り給フ、二十五ノ菩薩百千重ニ圍繞護念シタマフニ、魔縁タヨリヲウベカラズ。又同二三丁にも
 『マメヤカニ往生ノ志アリテ、阿彌陀ノ本願ヲ憑テ念佛申サン人、臨終ノワロキ事ハ何事ニカ有ベキ。』
 又同三左に『其レニサキノ念佛(平生稱フル)ヲバ空ク思ヒナシテ由ナク、臨終正念ヲノミ祈ル人多ク
 有ル、ユ、シキ僻胤ノ事ナリ。』又同丁右三十四に『本日ヨリ念佛ヲ信ゼン人ハ、臨終ノ沙汰ヲバ強チニス
 ベキ様モ無キ事ナリ』と。此等の文を見る時は、善導元祖も隨自意の時は、念佛の益は常隨影護、平
 生業成の意なり。爰を以つて吾祖は『專修念佛ノ行者ハ、即得往生ノ大益ヲ得テ、佛菩薩ガ影ノ如ク
 ニ、護リ給フ身トナル上ハ、何ノ不足アリテカ臨終ノ來迎ヲ期センヤ、來迎ヲ期スルナンド申スハ、
 諸行ノ機ニ取テノコトナリ』として、第十八願の攝取不捨と第十九願の臨終の來迎とを判然と分別し
 給へり。其義知るべし。

尙來迎に就いて辨すべきこと多々あれど餘り煩しければ略レ之。たゞ來迎と云ふことを汎く云ふ時
 は、念佛諸行自力他力に通じて種々の義門あり。依つて今之を左に圖を以つて示さん。



問云、上來の所辨に依りて來迎の言自力他力に通すること一往了解せり。然るに吾祖が來迎は諸行
 往生に在り、眞實信心の行人は攝取不捨の故に正定聚に住す。乃至臨終待つことなく、來迎たのむこ
 となしと、特に不來迎の義を力説し給ふは何の理由に由るや。

答云元來臨終來迎を期するは、平生に決定の信なく若存若亡の不如實修行の念佛なる故に、其の不
 決定の薄弱の心を去つて決定深信金剛心の行者となさ令ん爲めなり。語を換て云へば往生の信念を平
 生に決得せしめん爲めなり。是れ即ち吾祖の信心爲本平生業成の宗義を明示し給ふ所なり。之に反し
 て臨終來迎を恃む人は、起行宗心に住して聞信一念平生業成の謂れを知らず、單に臨終の正念を希て
 平生に決定心の確立なきゆへに若存若亡となる。是れ不如實修行の相なり。此れを善導和讃に「眞宗
 念佛キ、エツ、一念無疑ナルヲコソ、希有最勝人トホメ、正念ヲウトハサダメタレ、」是れは一心の
 正念を得たる平生業成の人なり。正念とは即ち決定信のこと、故に二河喩の文に「汝一心正念直來」と
 呼びかけ給ふ。此の一心正念と云ふが即ち決定信心のことであるから、愚禿鈔下二十左に「一心言眞實
 信心也正念言選擇攝取本願也、又第一希有行也 金剛不壞心也」と、又末燈鈔初丁に「正念ト云フハ
 本弘誓願ノ信樂サダマルヲ云フナリ」とあり。斯の如く平生業成の信心に住して攝取不捨の光益を蒙
 り金剛不壞の正念の住する者は、何の不足ありて臨終の正念を期し佛の來迎を恃んや。之に反して自

力疑心の人は、雜縁亂動して一心の正念を得ざるが故に、自ら來迎を期し臨終正念を祈るは當然なり。元祖漢語燈五丁七右に「來迎願者即四十八願中第十九願是也此乃正爲臨終正念有來迎也、(中略)然今時行者多不辨其旨於尋常行懶惰不營至臨終時一俄祈正念是僻見也」と誠めてあり。和語燈三十一亦同じ。其の他臨終の來迎を期するは、佛菩薩の來迎に依りて外魔の障礙を離れて、目出度往生の素懷を遂げんとすれども、先に引く和語燈の文の如く、自力の行人は此等の障りあれども、眞實信心の行人には佛力他力の加護を得て常隨影護の身となれば、如何なる天魔破旬も碍りを爲すこと不能。此れを和讃に「願力不思議ノ信心ハ、大菩提心ナリケレバ、天地ニミテル惡鬼神、皆悉クヲソルナリ」と、又「佛法力ノ不思議ニハ、諸邪業繫サハラネバ、彌陀ノ本弘誓願ノ、増上縁ト名ケタリ」。斯の如く自力他力の行人を比較し來らば、他力信心平生業成の人は、彌陀の心光中に生活する身なる故一切の障礙を離れ、惡として盡きざるなく、徳として具せざるはなし。實に餘祐綽々として唯佛恩を感謝し報盡を期とす。故に臨終まつことなく、來迎たのむことなし、豈に廣大の利益に非らずや。」

第八章 諸佛證誠の所由

○舍利弗佛如我今者等 二引ニ他佛證誠勸三、初例ニ自讚歎。此の今者と云ふ者の字は助字であるから、

二字で今と讀むべし。御延書に左様に讀んであり。又不可思議功德の下、宋明の二本には之利の二字あり。現に元照、智旭、性澄、大惠の所釋の本には皆二字加へてあり。今家御依用の本にはなし、此れは無き方却つて宜し。先に我見是利とあるを受けて、再び不可思議功德之利と云ふなれば義に妨げなれども、不可思議功德の語の中に、凡て此經一部の淨土の依正念佛往生の利益等あらゆる功德を攝し盡す故、別に之利と今改めて利益のことを云ふに及ばざるなり。さて不可思議功德と云ふは、即ち名號不思議の事で、所讚の體を擧げたもの、上の依報の功德は極樂の名義に攝し、正報の功德は彌陀の名義に攝る、また依報の伴を以つて正報の主に攝して見れば、皆阿彌陀佛の名號中に一切功德は攝る。此れを彌陀經和讃の初に、十方微塵等と、依正二報の功德を彌陀の名義に攝めてあり、此の彌陀の名號は如何なる衆生をも攝取すると云ふ實に不可思議の功德利益廣大なる故に、今釋迦佛が讚歎阿彌陀佛不可思議等との給ふ。之が元と第十七願に我が名を十方諸佛に咨嗟せられんと誓つてある。其の誓に酬ふて釋迦諸佛が此の如く歎讚なさるゝなり。又釋尊が今此所に彌陀の功德を稱讚なさるゝ如く、下の六方諸佛も各廣長の舌相を出し三千大千界を覆ふて誠實の言を説いて之を證誠し給ふと、釋尊自身の讚歎を出し下の六方諸佛の事を云はんが爲めに此所に如我とあり。時に上來の説法を聞いて衆生が直ちに信受するなれば別に引證勸信の必要はなけれども、何分所對の機が五濁惡時惡邪無信

の者故に種々疑惑を生じて容易に信受せざる故、釋迦佛のみならず六方諸佛の證を引いて勸信し給ふ。其の疑惑に就き、元祖の私記十四に「疑惑之相其類非一外道之輩於ニ佛教法ニ都不レ信レ之、況於ニ念佛往生法乎、又佛法中如ニ小乘人ニ尙不レ信レ有ニ他方佛土ニ況念佛往生之法乎、又雖モ學ニ大乘ニ有信者ト而於ニ五逆十惡破戒之徒往生ニ或亦不レ信、又疑設雖ニ善人ニ如何具縛凡夫僅以ニ一日七日念佛十念々佛之力ニ直離ニ三界穢惡ニ入ニ淨土不退境ニ言ニ凡夫往生ニ者或是誘引之言乎、或是別時意趣乎、今爲ニ如レ是疑惑不信之人ニ有ニ此證誠ニ也、」云云。此の如く外道小乘大乘人の疑惑善人惡人に就きて、種々に疑惑を生じて俄に凡夫入報の念佛往生を信ぜざる故、釋尊の自證智見を以つて之を誠證勸進するのみならず、下に六方諸佛の證誠を擧げて懇ろに勸め給へり。此れを宗祖和讃に「恒沙塵數ノ如來ハ、萬行ノ少善キラヒツ、名號不思議ノ信心ヲヒトシクヒトニス、メシム」と、諸佛の證誠も釋尊の勸進もみな念佛の信心の法を勸むるより外なしと知らせ給ふ。時に此經の隱顯は、機に亘る執持名號一心不亂の前後の文には隱顯が立つけれど、極樂の依正二報の莊嚴を説く文や、釋迦諸佛の誠證護念の所には隱顯なし。たゞ弘願眞實のみと云ふことを玄談已來屢々申し置きたり。依つて是れより下の六方段の所は弘願の念佛を諸佛勸信證誠なされる文故、隱顯なしと思ふべし。故に愚禿鈔上四丁に小經勸信二等として、其の下に釋迦勸信、諸佛勸信として皆弘願念佛に就けてあり、決して自力の眞門念佛の勸信證誠に非

らず、其義可レ知。

○東方亦有阿閼鞞佛等、二舉ニ他佛證誠ニ六、初舉ニ東方ニ三、初指レ方舉レ佛。唐譯の經は十方となりてあれども此經は六方になれり、具略開合の異なれば別に怪むに足らず。偕て六方諸佛の證誠を説くに就き彌陀經釋十五に二義を出し、初義は「世尊已以ニ自證智見ニ勸進而恐衆生猶不レ信レ之故引ニ他方諸佛勸進ニ令レ生ニ物信ニ也」とあり。後義は共化不共化で、唯識論第十三十の文を引いて此れを成じてある。今其の意を云へば、共化と云ふは衆生の機類區々にして或は多佛共にして化益に逢ひ奉るものあり。即ち釋迦一佛でなく阿閼鞞佛にも又藥師如來にもと云ふやうに、多佛に逢ふて信を生じ佛道に入る機類あり。又不共化と云ふはたゞ欸佛の化益に依りて信受する機あり、即ち釋迦一佛の說法に依りて多佛の勸めを要せざる衆生もある。此れは不共化と云ふもの。又次文に「或多屬レ一者、謂多衆生繫ニ屬一佛ニ也」とあるは、例へば多人數の衆生が、唯彌陀一佛に因縁深くして皆彌陀の一佛法門を喜ぶ如きは多屬レ一と云ふもの。或一屬レ多とは、一人の衆生が多佛の教化に依りて信を生ずる如きは、一が多佛に繫屬すると云ふもの。此界の衆生の中にも東方阿閼鞞佛の證誠で疑ひ晴るゝ機もあれば、又南方の日月燈佛の證誠で疑ひ晴るゝものもあるべし。二方三方乃至十方諸佛の證誠で疑ひ晴るゝ機もあるべし。故に釋迦一佛の證誠でなくして已下六方諸佛の證誠を説き給ふと云ふ元祖の釋なり。實に御丁寧なる

御釋である。さて六方の中東方を初めに擧ぐるは、西域の風俗に東は日出開明の始めゆへに之を尊ぶ故に、佛の說法も多分東に向ひ給ふは彼土の風儀に順するなり。其の義智論七^{二十}又華嚴探玄記三^{十九}左に出づ。而るに此の東方南方と指すは何處を中心として方所を云ふかと云ふに、横川略記に、釋尊の娑婆を中心とすると云ふ説と、極樂を中心として云ふとの二義あれども、是れは初義可なり。何故なれば上に如我今者讚歎等とありて釋迦佛が我心見を以つて彌陀を讚歎する如く、他方の諸佛も亦同じく稱讚し給ふと明す文なれば、娑婆に望めて東南西北等の方位を定むると見るが至當なり。此所に亦有とある亦の字は、上の如我とある如の字と相望して此界の釋尊が彌陀の功德を讚歎なさるゝ如く、東方世界の阿閼佛も亦同じとかゝる文字ゆへに、此の下の一段を擧ぎ東方と科し、上を例自讚歎と科を先輩が骨折て立られた所以なり。阿閼佛は元照疏下^{十六}に「此云不動法身體寂無遷變故」とあり、法身の理の常住不變の所を不動と云つたので、無色無形の法身佛のことでないと思ふべし。凡て佛名佛土を解するに、近くは淨影觀經疏本^{四丁}に佛の別號を立つるに例を示して云く、「別中立名乃有ニ多種、或隨ニ種姓、如ニ加葉佛釋迦佛等、或は就ニ色身、如ニ身佛、身上佛等、或就ニ音聲、如ニ妙音佛、如聲佛等、或就ニ光明、如ニ妙光佛、普明佛等、或就ニ內德、如ニ功德佛、智慧佛等、或就ニ譬喩、別種々、或從ニ壽命、今此所觀從、壽爲レ名」と、彌陀を無量壽如來と云ふは壽命に従ふ名となせり。又探玄記三

六十五^{丁右}に「汎論ニ佛及刹^{國土}の事、立名不同略由ニ五相、一或因ニ機感、二或由ニ佛本願、三或依ニ本行、四或先佛記別、五或表ニ示法門」と、此の五例が出してある。諸佛菩薩は德を名に施すと云ふて各一能々に就いて立名し、其の中に或は衆生の機感に應じて名を顯し、或は因位の本願に約し、或は先佛より受くる記別に依りて名を立て、或は光壽ニ無量の德用法門で彌陀と云ふ名を得る如き種々の例あり。今阿閼佛を不動如來と云ふのは、法身不動の不生不滅遷變のなき邊で此の名ありとすれば、第五の表ニ示法門の例に當る。又嘉祥勝鬘經寶窟上末^{十九}に同じく五例が出でゝある。探玄と稍別なり。今之を出さば、「諸佛立號義有ニ多門、或從レ姓立名、如ニ迦葉釋迦、或從レ光立名、如ニ錠光等、或從レ聲立名、如ニ微妙聲佛、或從レ喩立名、如ニ滿月光、或從レ因立名、燃燈佛等云云」と、又已下の佛名一々解釋せず此等の例に當て、準知すべし。又此の經には六方段に總じて三十八佛を出し、唐譯の方は十方で四十一佛が擧げてある。これ方位に開合あるゆへ佛にも自ら開合ありと知るべし。

○各於其國等、二明ニ證誠相、此の下堯慧の私集鈔下^{十二}に「各於其國者……文點兩様也」一義に云く其國にしてと訓すべし。此時は諸佛が各其の本國にして舌を出して即ち其世界を覆ふなり。又一義は其國よりと訓す。其の時は諸佛各其の自國より此の釋迦佛の說法の會座に舌相を出して、娑婆三千界を覆ふて證誠し給ふと云ふ義なり。此れは非なり。前義を可とす。故に覺師の御展書にも、各其國に

してと於の字を讀んであり。廣長舌相とは不虛妄の相にして三十二相の瑞一なり。悲華經一八丁に「我昔於無量阿僧祇億那由他劫修菩薩道一時身常遠離妄語兩舌惡口綺語是故我今得是舌相」とある。されば廣長舌相は佛の常に備へ給へる相好にして之を出すは即ち不妄語を表示するもの、已に因位に不虛妄語の因に依りて得る廣長舌相なるゆへ、是れを出して衆生に見せるのが則ち眞實不虛妄と云ふ事を表す事になる、故に今諸佛各々其の國に於て釋迦所説の法を證誠する爲めに出し給へり。三千大千世界は、一佛の化境にして即ち諸佛が衆生を教化する其の範圍を三千大千世界と云ふ。此れは須彌四洲を初として六欲梵天等の三界を總括して一世界として、それを一千集めたるを小千世界と名け、其の小千世界を又一千合したるを中千世界と云ふ。其中千世界を又千合したるを三千大千世界と云ふ。俱舍論第十一卷^{十五}智論第七卷^{二十}等に出づ。近くは四教儀集註上^{十六}を可披見諸佛が舌を以つて大千世界を覆ふと云ふは通途のことに非らず。智論八右^{三丁}に佛婆羅門に對して廣長舌相を出して面上を覆ひて髮際に至ると云ふことがありて、丁度舌が髮の邊まで覆ふなり、これは小信の爲めなり。然るに大品經一^三に釋迦摩訶般若波羅密法門を説かんとして、之を信受せしめん爲めに廣長の舌相を出して徧覆三千大千世界とある。是れは小事を證誠する爲めに非らず、一大事因縁たる般若波羅密の法門を證誠する爲めであると智論に釋せり。今こゝも利益安樂大事因縁たる念佛往生の法門を説

いてそれを衆生に信受せしめん爲めに、大舌相を出して三千世界を徧覆するは實に重大の證誠にして、全く名號不思議の極難信の法なるが故なり。

第九章 娑婆の名義

○而作是言等、二學諸佛讚言。是言と云ふが諸佛の釋迦を讚し給ふ言、即下に出してあるなり。是れを通讀下^{十五}に「而作是言結集家叙也」と云ふてあるは非なり。一寸見ると結集者の語のやうに聞ゆれども、如我今者と釋尊自ら我と指す、此所は諸佛が釋尊を讚歎し給ふ語を釋尊が傳言なさるゝ所故、自身のことでも釋迦牟尼佛と稱する故に經家の語と見るは不宜。釋迦は能仁、牟尼は寂默と翻すること華嚴音義一^{十四}に出づ。慈恩元照等の疏皆是に同じ。甚難希有之事とは元照疏に釋して「他不能爲故甚難、舉世未見故希有」とある。此れを又聞持記に再釋して「於惡世中得道證聖又能開示衆生往生法門可爲甚難、可爲希有」と、此れは下の經に「能於娑婆國土乃至說是一切世間難信之法」とある。此れを二として一に五濁に出現して聖果を證することの難、二には難信の法を疑惑の深き衆生に説き聞かしむる難、此の二を總じて甚難希有と云ふ。五濁のことは慈恩疏^{六十}已下委しく釋す。可披見。娑婆は同疏に二義を以つて釋す、「娑婆世界者今翻難惡、自誓三昧經云名忍世界」等

と云へり。忍と云ふに就いても又二義あり。一に此の界の主梵王が能く他の勝事を忍んで妬忌を生ぜざるが故に、主の梵天に従へて名を立て忍界となすと。二に「此界衆生忍ニ受三毒及諸煩惱」是名忍土」と云へり。五濁の濁とは滓濁の義にして水の濁りかすのこと、清淨の水でも久しく置くと濁りて滓すを生ずる如く、世が末になると次第に濁り滓すを生じ穢となるを濁と云ふ。故に俱舍論十二左^{八丁}「劫滅將レ末壽等鄙下如ニ滓穢故説名爲濁」と、其の濁の相を開いて五とするゆへに五濁と名く。五濁の事は常に出ることなれば略レ之。具には俱舍世間品十二左^{八丁}論伽論四十四^{十七} 近くは華嚴孔目章二九^丁別章あり。可レ見。阿耨多羅菩提は先に釋する如し。即ち釋尊が佛果を成就して娑婆五濁の惡世に出生し、難化の衆生を度することは實に甚難希有のことなりと諸佛が釋迦佛を讚じ給ふ語なり。其の釋迦佛は人壽百歳の時に出世す。悲華經に依れば、人壽二萬歳の時より五濁の名を得るとある。和讃に「劫濁ノ時ウツルニハ、有情ヨウヤク身小ナリ、二萬歳ニイタリテハ、五濁惡世ノ名ヲ得タリ」とは是れを云ふなり。已に五濁惡世に出現して化を施すすら難事であるに、まして況んや一切世間難信之法たる彌陀本願の法を説きて衆生に信受せしむるのは難事にして、難中之難無過此難と大經にも説き、今此處にも難信之法と云ひ下には爲甚難と説けり。

問云彌陀他力の法門は易行易修なり。何故に甚難と云ふや。

答所説所信の法體は易行易修の名號なれども、之を信受する機が此の甚妙の法を容易に信ぜざる故甚難となる。其の故は聖道の華天一乗の速疾圓頓の法は三乘大乘の漸々修家の法に比すれば難信難入なれども此の本願一乘に比すれば難信に非らず。何故なれば其の實際に至れば皆是れ斷惑證理の法門なるゆへ敢て難信に非らず。然るに本願一乗の妙法は一毫未斷の凡夫が利那に成佛する法門ゆへ、とても他力廻向の信心の智慧にあらざれば、疑ひ晴るゝこと不能故に、釋迦も諸佛も總がりて此れを稱讚し護念證誠して五濁の惡邪無信の衆生に勸信し給へり。今それを此處に一切世間難信之法と云ふ。愚禿鈔上^四「一難疑情二易信心」とあり、又樂邦文類四^{八丁}「淨土非難易難易在人難者疑情咫尺萬里易者信心、萬里咫尺」とあり。世間とは衆生世間のことなり。

第十章 此文流通に勸持附屬の文無き所以

○佛説此經已、大門第三流通分三、初叙^レ説經已^レ已下は流通分なり。流通とは聞持記に金光明疏を引いて「流者下澍通者不^レ壅」とありて、正宗所説の法水を末代までに澍ぎて長く壅がらぬやうに傳ふるが流通分と云ふ意なり。依つて他經には經の終に佛の勸持附屬の言がある。即ち一經の對告衆に對して佛が此法を受持して遐代に傳へよと云ふ説相となり。然るに此の經はたゞ結集者の言ばかりで佛の

教勅の語なし此れは云何と云ふに、これが今經の他經に異る所で、此の經は一代經の結經無問自說なれば、序分にも別に發起序なし、今流通分に於ても別に佛の教勅の語なく一部全體が流通なり。故に法事讚に『世尊說法時將了慇懃附屬彌陀名』とありて、玄談で辨する如く、文の當相より云へば此經の終りのやうに見ゆれども、文の意底を伺へば、一代の結經佛鶴林涅槃に臨みて彌陀の名號を舍利弗に附屬し、度々舍利弗を呼懸け給ふこと實に三十六遍、而も此れ他事に非らず一經所說の要義たゞ彌陀の名號より外なき故之を身子に附屬す、是れを善導は慇懃附屬彌陀名と云へり。彼の法事讚の釋は正しく此の下の文なれども附屬彌陀名とは一經全體を指す意なり。其義を覺師口傳鈔下に相承し給へること已に玄談に辨する如し。さて佛說此經已とは、結集者の語にして上の是爲甚難までに佛の說法の終りを告げたことを述べて此所に佛此の經を説き終り給ふと結集者が此の語を置けり。故に是は經家の語なり。これが即ち結前生後の語となる。上の說法の已ることを述べて下の歡喜信受を引き起す句なり。

○舍利弗及諸比丘等、二舉_ニ聞法衆、_一此れは此經を聽きたる一會の大衆を擧げたものなり。其中舍利弗は正しく對告衆、及諸比丘とは列衆段に大比丘衆千二百五十人とありし其の比丘衆なり。上の序分には菩薩を列したれども、此所に之を略する所以は、彼所は證信序なる故聲聞菩薩を具に列ね、舍利

弗等の比丘衆ばかりでなく、文殊彌勒の大菩薩や、釋提桓因等の天部衆までが同聞衆となりて此經の會座が開けて、實に堂々たる御說法の有様なれば、末代の有情は此經の所說に信を置くべしと、具に列ねて證信の序と爲す。今此所は流通分ゆへに、一會の大衆が此の經所說の彌陀の名號不思議を聞て信受することを明して、五乘の機類の中で凡夫人天等の正所被の機を出せり。愚禿鈔上_{十丁}に五乘を列ね之に傍正を立て、聲緣善の三は淨土の傍機なり、天と人とは淨土の正機とせり。今此の流通は此の經所說の法門を信受する所なるゆへ傍機は略して擧げ、淨土の正機を具に擧げて、一切世間天人阿修羅等と云へり。一切世間とは上に云ふ如く衆生世間を云ふ、其數一に非ざる故に一切と云ふ。天人は云ふに及ばず梵天帝釋の諸天なり。人は國王大臣等を初として凡ての民衆なり。阿修羅は舊譯の梵語新譯にては阿素洛と稱す。此所に非天と譯す。果報境界は勝れて天に似てあれども、天の實行なき故非天と譯す。其の性質諂偽にして天よりも劣る故此名を得る。具には探玄記二_{三十五}に佛地論を引いて釋せり。又瑜伽論四_{三丁}にも出づ。等の中に迦留羅(此云_ニ妙翅鳥_一)緊那羅(此云_ニ歌神_一)摩睺羅伽(此云_ニ大腹_一)鳩槃荼(此云_ニ魔魅鬼_一)あり、此等は皆四天王の所領眷屬なり。此等のことは探玄記二_{三十}五_丁已下并に法華玄讚二_{十四}已下披き見るべし。

○聞佛所說歡喜等、三結_ニ聞信去_一、佛の所說を聞くとは上に擧げたる大衆悉く一經所說を聞て、歡喜

信受と喜んで敬信し、作禮と五體投地し、慇懃に禮儀を作爲し、佛の御前を退去することを叙べた文なり。さて歡喜とは慈恩疏^{六十六}に「心歡、體悅、故言歡喜」と云ふて其次に伽耶山頂經を引いて、三清淨を具するを名けて歡喜と爲すとあり。其三とは一に能說者清淨、二所論法清淨、三受者清淨なり。此の三義は一は能說の佛を云ふ、即ち佛微妙清淨の身を現じ四辨八音を以つて法を演說し給ふ。二に所說の法を云へば不可思議功德の彌陀名號なり。三に受者清淨とは即ち聞き手の舍利弗を初めとして、文珠彌勒の大菩薩も天人阿修羅等の八部衆までが悉く受法誠信して、少しも輕謗の念を生ぜざる所を清淨と名けて初めて眞の歡喜となる。今此の經の終りの歡喜信受は、たゞ一往の歡喜に非らず、此の三義を具すと慈恩が釋せられたは洵に服膺すべき釋なり。又「顏舒曰歡神悅曰喜」と釋して、歡喜の二字を身と心とに分つて、喜相の顔色に表はるゝを歡と云ひ、心の内に悦ぶを喜と云ふなり。吾祖^一多證文^左に信心歡喜を釋して、「歡ハミヲヨロコバシムルナリ。喜ハコ、ロヲヨロコバシムルナリ」と仰せらるゝは、此の慈恩の後釋に符合す。次に信受とは慈恩の釋に「聞之不信、領之不在心爲受」とありて、信受は疑はず謗らず所說の法を敬信して心の中に之を領納し、愈々之に間違ひないと決定する相なり。信受は疑ひ晴れて深く信することなり。先に辨する如く此經には流通分と云ふても佛の勸持附屬の語はなくたゞ結集者の言のみで、流通分にふさわしからずと云ふ疑の存する

所なれど、已に一會の大衆が歡喜信受して佛を禮し退去する相を説くのが即ち此經の流通分である。是れ元祖彌陀經釋の終りに「聞佛所說歡喜信受は是奉行の相也。奉行の人とは上に所說の念佛往生の法門を聞て奉行するの人なり。其中に聲聞あり。菩薩あり雜類衆あり。(中略)智慧深利なる者は舍利弗に相從ひ、神通大力なる者は目蓮に相從ふ。其餘の尊者各々掌る所あり。迦葉阿難の傳持遠く像末に迫ぶ。羅云賓頭盧等の守護八萬歲に至る。況んや復文珠は是れ三世諸佛の智母、十方佛土の中の說法の上首なり。彌勒は是れ諸佛の長子當來の導師なり。乃至常精進は一切衆生不請之友なり。何の時何の處にか其れ弘通せざらんや、又其他の天龍八部は福力自在にして、世間を領する者なれば、常に能く此の教法の流通を守護するなり」と具に釋あり。要するに聽衆が皆歡喜信受して去つたとあるからは、何れの時何れの所に於ても彼の衆が此經の弘通を計り、又天龍八部も福力自在にして常に此經の弘布する所を守護し給ふことを、委しく元祖は述べ給ひ、又横川の略記にも此經に値ふことを自ら喜びて「如予二千年末適聞此經作今願當生者豈亦彼力乎」と喜んである。准之思ふに吾人も亦宿因多幸にして、此經に値ひ奉り、講經宣布の榮を擔ふこと實に傳持者の恩德なりと感佩に堪へず。

佛說阿彌陀經講義 (終)

昭和八年七月五日印刷
昭和八年七月十日發行

【非賣品】

京都市上京區小山上總町
大谷大學內

編輯者兼
安 居 事 務 所

右代表者
朝 倉 慶 友

印刷者
西 村 七 兵 衛

印刷所
法 藏 館 印 刷 所

京都市下京區正面烏丸東入三丁目三番地

終

